

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第7集

祝田遺跡 II

昭和57~59年度都田川河川改修工事(細江地区)
埋蔵文化財発掘調査報告書

1985

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第7集

祝田遺跡 II

昭和57~59年度都田川河川改修工事(細江地区)
埋蔵文化財発掘調査報告書

1985

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

祝田遺跡の調査は昭和57・58年度に実施され、58年度には遺構編である「祝田遺跡Ⅰ」が刊行され、59年度事業では、遺物編としての「祝田遺跡Ⅱ」の刊行をみたわけである。従って、(財)駿府博物館付属・静岡埋蔵文化財調査研究所から引継いだ全ての祝田遺跡に関わる事業が、本報告書の刊行をもって終了したわけである。

都田川の流域に展開する遺跡群の調査は、都田川の河川改修に伴う調査により地域史解明の緒についたといえるであろう。本報告の責務とするところの重大さを痛感している。調査によって弥生時代から古墳時代前期と、平安時代から中世にいたる遺構・遺物が発見され、特に弥生中期の壇棺の出土は注目される。また当地「祝田」は、古代から中世にかけて伊勢神宮の所領「祝田御厨」の比定地として、以前から布目瓦の出土がみられ、注目されていた地域であり今回の調査で、区画あるいは水路のような大型の溝・井戸等が発見され、それらに豊富な遺物群が伴い、巴文の軒丸瓦とか、白磁四耳壺や古瀬戸等の陶磁器が出土している。このように本遺跡からは、在地で一般的に用いられるものは勿論、広域的な分布図をもつもの、限られた性格の遺跡から出土するものも含み、今後、伊勢・尾張・三河・遠江という東海地方西部の動きのなかで、本遺跡の位置付けがされ、研究が深まっていくであろう。出土木製品の同定については、国立科学博物館の山内文氏から玉稿を頂き、数少ない当該期の研究の貴重な資料を得ることができた。

本報告書の刊行までは様々な人々の御協力と援助を頂いた。木製品樹種同定の山内文氏、調査委託者の静岡県浜松土木事務所、種々の調整に献身的な援助を頂いた細江町教育委員会、地元の方々、多くの指導助言を与えられた静岡県教育委員会に深い謝意を呈するものである。また、本報告書に関係した当所員の辛苦に対し感謝したい。

昭和60年3月

財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤 忠

例 言

1. 本書は昭和57～59年度都田川河川改修工事（細江地区）埋蔵文化財発掘調査に伴う^{第35}祝田遺跡調査報告書Ⅱである。
 2. 調査は静岡県浜松土木事務所から委託をうけて、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、調査調整機関・細江町教育委員会、調査実施機関・（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所で実施した。
 3. 発掘調査は、昭和57年12月～昭和58年3月と昭和58年12月～昭和59年3月に実施した。
 4. 資料整理は昭和59年度に行った。調査体制は以下のとおりである。
- 所長 斎藤 忠 調査研究部長 岡田恭順
 調査研究2課 課長 平野吾郎 主任調査研究員 佐野五十三
5. 出土した木製品の樹種同定を国立科学博物館の山内文氏に依頼し、結果を特論におさめた。
 6. 本書の執筆は佐野五十三があたった。
 7. 本書の編集は、（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。
 8. 本書の遺構・遺物の標記は下表の略称を用いた。

遺 構 (S)		遺 物 (R)	
A	柵	W	木製品
B	竪穴住居跡	P	土製品
C	祭祀遺構	M	金属器
D	溝	B	玉類
E	井戸	E	その他
F	土坑	土器は番号のみ 符号なし。	
G	小鐵冶遺構		
H	掘立柱建物		
P	小穴 (Pit)		
X	その他		

目 次

序	
例言	
目次	
第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 調査の経過	1
第2節 資料整理の概要	1
第Ⅱ章 弥生～古墳時代の遺物	2
第1節 弥生土器・土師器	2
第2節 須恵器	15
第Ⅲ章 古代末～中世の遺物	16
第1節 無釉陶器	16
A・山茶碗・小皿	16
B・大平鉢	25
第2節 施釉陶器	43
A・灰釉陶器	43
B・中世陶器	43
第3節 磁器	43
第4節 土師質土器	43
A・土師質小皿	46
B・壺	46
C・鍋	46
第5節 土製品	51
A・瓦	51
B・土鍋	62
第6節 石製品	64
第7節 金属製品	64
第8節 木製品	65
第Ⅳ章 まとめ	67
第1節 山茶碗・小皿の年代観	67
第2節 古代末から中世の祝田遺跡の性格について	69
おわりに	72
第Ⅴ章 特論	
静岡県祝田遺跡出土の木製品の樹種について	
山内 文	73

挿 図 目 次

第1図	弥生土器・土師器実測図 I	4
第2図	弥生土器・土師器実測図 II	5
第3図	弥生土器・土師器実測図 III	6
第4図	弥生土器・土師器実測図 IV	7
第5図	弥生土器・土師器実測図 V	8
第6図	弥生土器・土師器拓影図	9
第7図	須恵器・灰釉陶器実測図	15
第8図	山茶碗・小皿実測図 I	20
第9図	山茶碗・小皿実測図 II	21
第10図	山茶碗・小皿実測図 III	22
第11図	山茶碗・小皿実測図 IV	23
第12図	山茶碗・小皿実測図 V	24
第13図	施釉陶器・磁器実測図	44
第14図	土師質土器実測図 I	45
第15図	土師質土器実測図 II	46
第16図	瓦拓影図 I	53
第17図	瓦拓影図 II	54
第18図	瓦拓影図 III	55
第19図	瓦拓影図 IV	57
第20図	瓦拓影図 V	58
第21図	瓦拓影図 VI	59
第22図	瓦拓影図 VII	60
第23図	瓦拓影図 VIII	61
第24図	土錐実測図	62
第25図	石製品実測図	64
第26図	木製品実測図	66
第27図	遺構出土山茶碗・小皿相関図	68
第28図	達江の莊園分布	71

挿 表 目 次

第1表	弥生土器・土師器観察表	10
第2表	山茶碗法量表	17
第3表	小皿法量表	18
第4表	遺構出土山茶碗・小皿分類別点数一覧表	26
第5表	山茶碗・小皿観察表	28
第6表	灰釉陶器観察表	42
第7表	土師質小皿観察表	47
第8表	土錐計測表	63

図版目次

- 図版1 弥生土器・土師器I
- 図版2 弥生土器・土師器II
- 図版3 弥生土器・土師器III
- 図版4 弥生土器・土師器IV
- 図版5 山茶碗I
- 図版6 山茶碗II
- 図版7 小皿
- 図版8 墨書き土器・涅美壺
- 図版9 輸入磁器
- 図版10 土師質小皿
- 図版11 中世陶器・石製品・土鍤
- 図版12 軒丸瓦
- 図版13 軒平瓦・丸瓦I
- 図版14 平瓦I
- 図版15 平瓦II
- 図版16 木製品

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査の経過

静岡県引佐郡細江町中川に所在する祝田遺跡は、以前から布目瓦の散布地として知られ、また当地の研究者、故月岡準三氏のコレクションの中にも手培形土器が見られ、弥生時代～古墳時代、及び中世の主要な遺跡として、注目を集めていた。また、静岡県教育委員会では、昭和45～47年度にかけて、県内埋蔵文化財包蔵地分布調査を行った。この結果、細江町内の都田川の流域で、祝田・田米寺・茂塚・森・岡地船渡・川久保・市場といった諸遺跡の存在が確認された。

都田川の河川改修工事は、昭和49年7月の台風8号（七夕豪雨）による被害を契機として策定され、これに伴う埋蔵文化財の調査は、昭和56年より開始されている。その成果は細江町教育委員会によって試掘調査の報告がだされており（堀田・栗原 1983）、次いで本研究所の前身である（財）駿府博物館付属静岡埋蔵文化財調査研究所が、昭和57・58年度に現地発掘調査を行い、58年度には調査の遺構編である「祝田遺跡I」を刊行している。

昭和59年5月に財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が発足した。これにともない、昭和57・58年度の事業を引き継ぎ、昭和59年度は出土遺物の整理・報告の作業を行った。「祝田遺跡II」とした本書では、Iの遺構編をうけて、遺物の整理報告を行ったものであり、3ヶ年に及んだ祝田遺跡に関する調査が本年度をもって終了した。

第2節 資料整理の概要

昭和59年度の資料整理は、注記・接合の作業から始まった。水洗作業は、現地発掘調査と併行して行った。注記の要領は静岡県教育委員会文化課の資料整理の方法を踏襲した。まず、遺跡名は県内を大きく旧国名で、遠江（T）・駿河（S）・伊豆（I）のように分け、次に遺跡名の漢字の頭文字、祝（ホウ・H）、田（ダ・D）を用いて、THDの略称を設定した。現地調査の遺構名、遺物の取り上げにも全てこの略称で統一している。次いで、地区名・層名・遺構名等、及び遺物台帳の登録番号を注記していく。また細片は一部の注記を省略したが、遺跡名と登録番号は必要最低限の記載項目とした。基本的に土器、石製品はこの方法で対処した。木製品については、注記が保存処理の過程で消失する可能性があるため、マイラーに記載し、個々の木製品に縛りつけた。また優先的に保存処理が必要な、曲物・下駄等は、写真撮影、実測等の作業を先行させた。

接合・復元の作業は遺構出土遺物を中心に行い、現地での調査所見を記載した遺構カードに遺物の種類・時期・個体数等の事項を追加して記述した。この段階で遺物に関する事後の作業の振分を行い、実測・拓本・写真撮影するものに選別した。石膏による復元はその後の作業に耐えられる程度とし、展示等を考慮した復元は行っていない。土器類の多くを占める山茶碗は、遺構出土で遺存状態の良好なものから行った結果、作業量の制約から接合・復元可能なものを多く残してしまった。

先の遺構カードへの記載と併行して、実測分として抽出したものから作業にかかった。実測点数は土器類で約600点を数えた。また、水漬けした木製品の実測は、水気をはじき、湿気があっても収縮しないマイラーの方眼紙を用いた。

整理作業を進めてゆくなかで、整理方法のシステム化が早急に必要であることを実感した。担当者・整理期間の相違で、整理作業の成果が個々の遺跡によって異なるという事態をつくらなかったため、早急な対応が望まれる。尚、近世陶磁器も包含層から出土するが、今回の報告では除いている。

第 II 章 弥生～古墳時代の遺物

この時代の遺物には、土器棺に用いられたと思われる弥生時代中期の壺と、溝、土坑等から出土した弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器が認められる。また7世紀代の須恵器も包含層から少量出土しているが、この時期に対応する土師器はみられない。実測図は遺構ごとにまとめ、個々の記述は観察表に記した。

第 I 節 弥生土器・土師器

祝田遺跡の弥生時代から古墳時代にかけての土器の主体をしめているのは、東海地方西部に分布する欠山式、元屋敷式といわれる土器である。

弥生時代中期の土器（第4図、図版第1）

35、36は土器棺に用いられたと思われる壺で、35は埋設土器No.6、36は埋設土器No.3としたものである。いずれも胴部中位と下位に穿孔されており、35はやや小型で、口径8.5cm、器高21.6cmを示す。肩が丸みをもち、胴下位が強く屈曲する受口の壺である。一方、36は大型で、口径21.6cm、器高47cm、胴部最大径46.7cmを計る。口縁は大きく開き、胴中位は丸みをもって張り出している。

両者の描画の施文手法をみると、横線を一度の回転で全周するのは共通しているが、35は波状文を5～6回にわけて全周させ、また頸部は櫛による連続の刺突を施す。一方、36は扇状文が認められる。

両者ともに、回転台の使用が推定されるが、同一土器の施文手法で、一度の回転によるものと、小刻みに回転させて施文する手法の二つが認められる。両者ともに愛知県三河地域に分布の中心をもつ長床式に比定される土器である。弥生時代中期の土器は破片を含めて、土器棺に伴うもの以外は出土していない。

弥生時代後期後半～古墳時代前期の土器（第1図～6図、図版第1～4）

先述した欠山～元屋敷式に比定される土器であり、壺、甕、高環、鉢、器台、埴、壺蓋等がみられるが、個々の記述は第1表の観察表に譲り、その概要を述べることとする。

壺

壺は大型と小型のものに大別されるが、小型のものでは全体の器形の判明するものはみられない。最も大型のものは、埋設土器No.1の34で、口径16cm、器高34cm、胴部最大径28.7cm、底径8cmを計る。口縁部のみであるが、2は口径が21.5cmを示している。

胴部形態は球胴を呈するものが殆どであり、僅かに23、44のような小型のものに胴下位で屈曲するものが認められる。また、15は球胴にちかい形態であるが、やや屈曲している。

口縁部の形態は、単純口縁、折り返し口縁、複合口縁、二重口縁がみられる。

単純口縁

単純口縁のなかでもいくつかの種類がみられ、直線的に開くもの（17・30）、直線的に開き、口唇部が尖るもの（18）、外反するもの（38・43）、口縁部先端がやや内傾するもの（24）がみられ、直線と外反のものの口唇部は、平坦なもの（30）、丸みをもつもの（17・43）、やや尖るもの（38）等の変化が認められる。

折り返し口縁

13・34を図示した。34は折り返しが厚く、13は薄い。両者ともに口唇部に施文がみられる。

複合口縁

単純口縁に次いで多い形態であり、2、14、40の3点を図示した。14・40には棒状の突起が付けられ、

櫛による羽状の刺突が施されている。この両者は口縁がほぼ直立するのに対し、2では大きく開いている。また、棒状の突起ではなく、櫛で波状と扁状に施している。口唇端部は14がやや丸いが、2と、40は平坦に面取りされている。

二重口縁

埋設土器No.4とした37がこれに該当する。口唇部は尖り気味につくられている。

小型壺

小型壺については、口縁部の形態が判明するものを欠き、かつ胴部形態は、大型のものとの類似性はみられないが、口縁部の形態は単純口縁であろうと推定される。25は器高が低く、幅のひろいすんぐりした形態の広口壺であり、大型壺にはみられない器形である。頸は太く、口縁は短く直線的に開いている。

文様は櫛を施文具とし、波状、横位の櫛描きが第1図の2、第6図の56～58等に認められる。また、櫛の刺突によるものとして、14、40、43では羽状に、19では横位の3段に刺突される。また、2種類の施文具を用いているものが30で、口唇部に櫛状工具、肩部に棒状工具による3段の刺突がみられる。このように施文具としては、櫛が圧倒的に多用されるが、文様の種類をみると刺突の手法によるものが優位の傾向が伺える。また、実測図のなかにはみられないが、櫛描きと、刺突を併用する施文が第6図の56・59・61・63・64の拓影のなかに認められる。

全体的な傾向としては、文様をもつものは一部の土器で、かつ施文の部位は肩部より上に限定されるようである。したがって、無文の壺が優位をしめているといえる。胴部は器面をなめらかに調整するものが多く、24のようにヘラ磨きしたり、37のように刷毛目痕を多く残すものは少量である。

甕

甕は全体の形状の知れるものはないが基本的には全て、22・48のように台付き甕と推定される。口縁部形態は「く」の字に屈曲するものが多いが、26のように緩やかなものもみられる。胴部は球胴を呈する27～29・48と、胴部の張り出しが急激に細くなり底部に至る11のような形態を認めることができる。

最も個体差の現れるのが口唇部であり、刻みが入るものとないものの二者があり、後者の例として48がある。また、刻みの工具は櫛とヘラ状、棒状のものがあるが、多くは櫛を斜位に用いているものが多く、11・28・29にみられ、ヘラ状工具によるものは26、棒状工具は27に認められる。全体に出土した甕は出土量が少なく、全体の形態も不明であるため概略を述べるにとどめたい。

高环

高环は脚部と環部の一部が出土したのみであり、全体の形状を確認できるものはなかった。脚部が外に膨らみ、环の下部が強く屈曲するものと(6・8・9・32)、脚部が直線に開くもの(7・20)がある。全体に丁寧なヘラ磨きを施している。図示した6点中、6～9の4点がSX111の底から出土している。

鉢

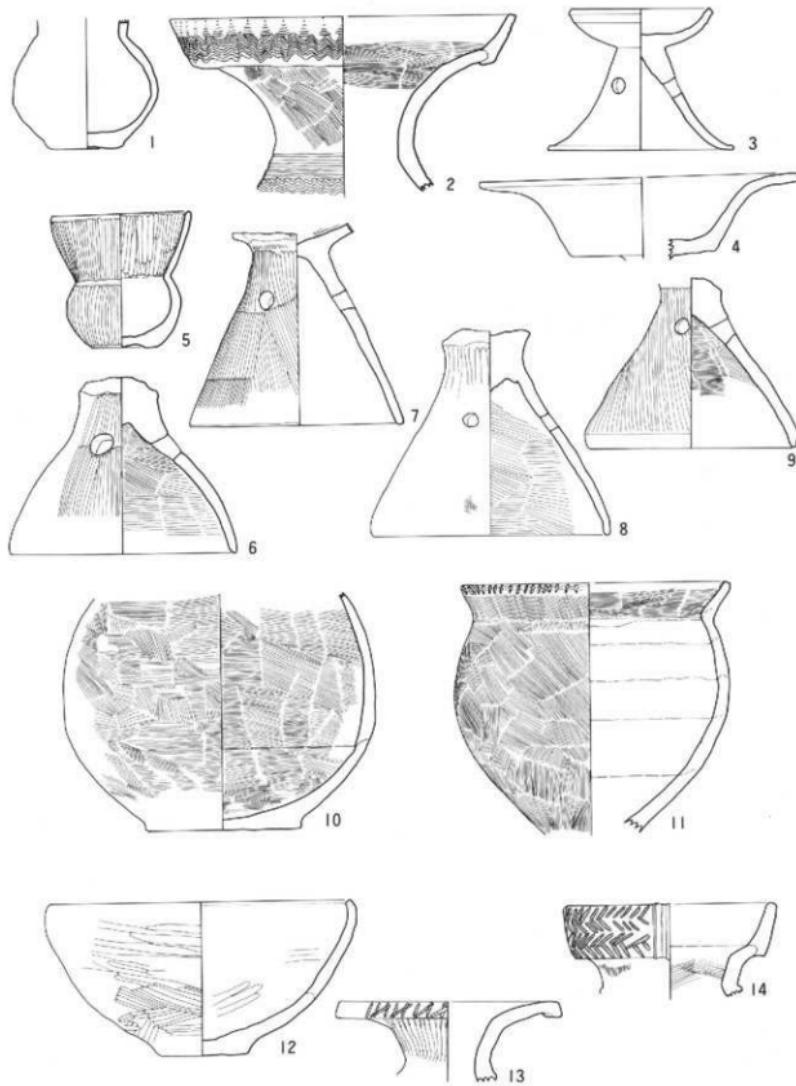
壺の下部を上部と接合せずに使用したものを鉢とした。12・31・39がそれに該当する。器形、調整等壺と同じものであり、12・31は球胴、39は球胴で小型の形態をもっている。疑似口縁は12・39が斜位に面取りされるが、31ではやや丸みを帯びる。12はヘラ磨きされ、31は刷毛目を残している。

器台

器台は大型のもの(4)、小型の完形品の3があり、大型の4は脚を欠損している。両者ともに丁寧な器面調整がされている。

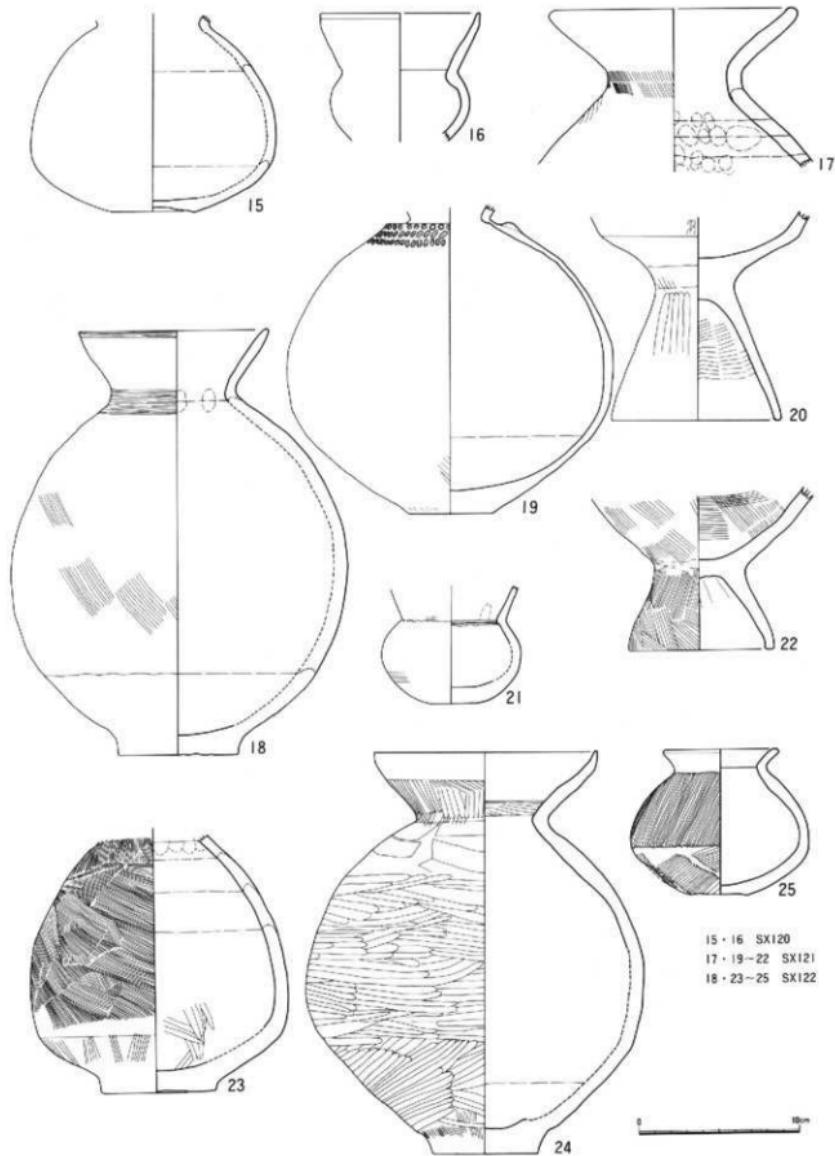
壺

口縁の径が胴部より大きく、頸が太く器高の中位にあるもので、5が典型的な形態といえる。16・21も一部欠損しているがこの種類と考えた。底部は5は平底、21は丸底風につくられている。器面調整は遺存



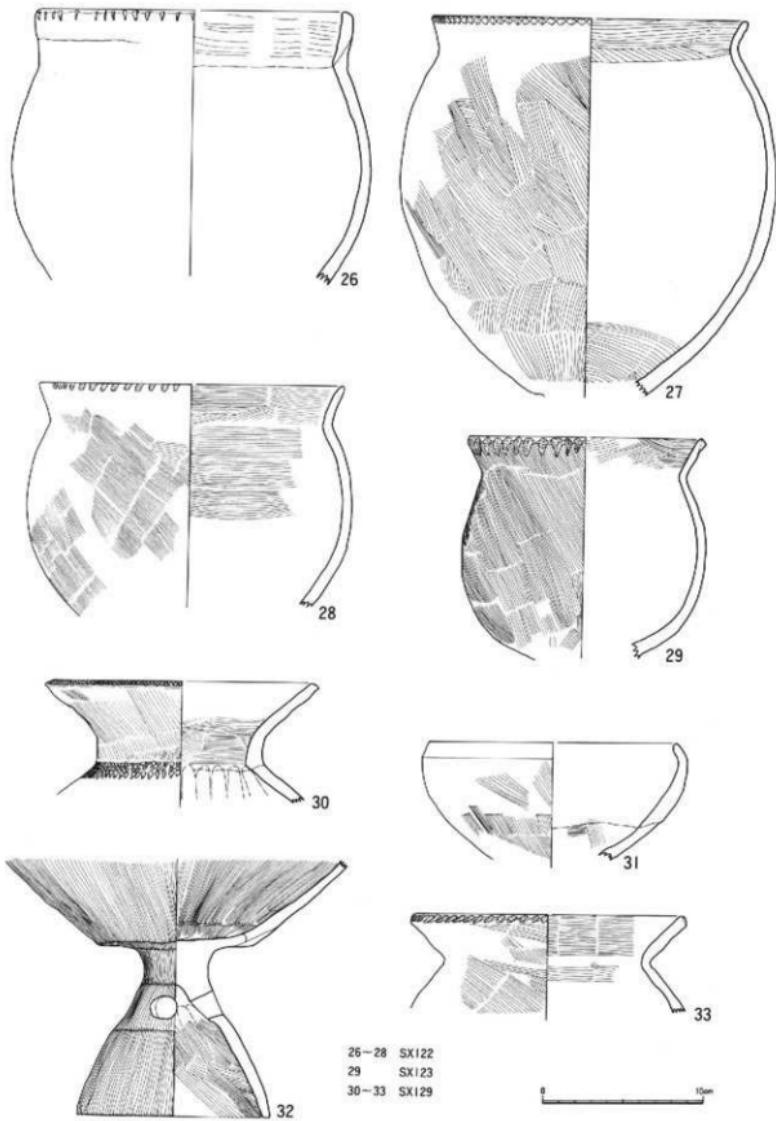
1 SD114 1~9 SX111
2 SD132 10~11 SX112
3~4 SX12 12~14 SX115

第1図 弥生土器・土師器実測図 I

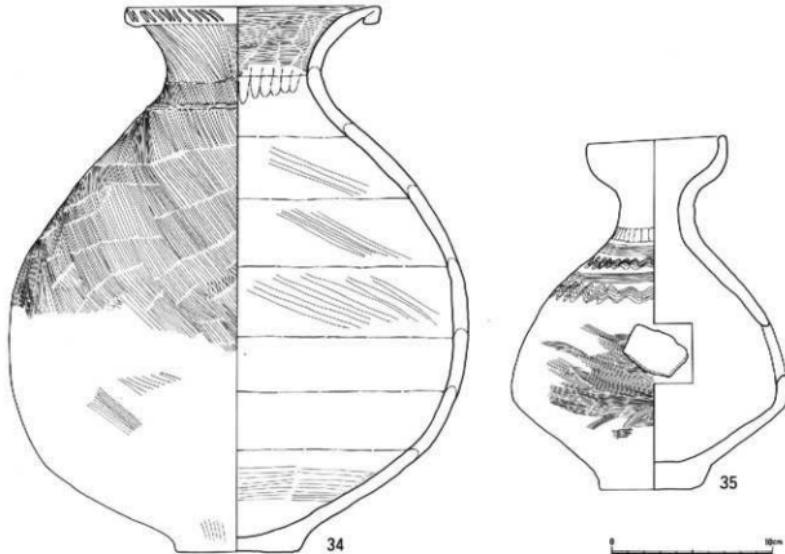


15・16 SX120
17・19-22 SX121
18・23-25 SX122

第2図 弥生土器・土師器実測図II



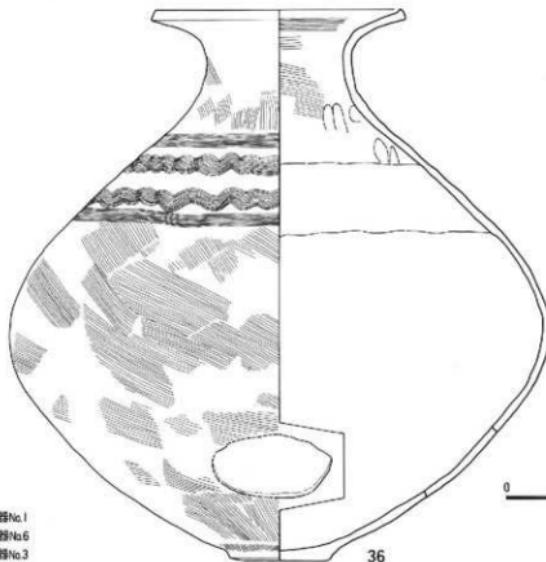
第3図 弥生土器・土師器実測図III



34

35

0 10cm

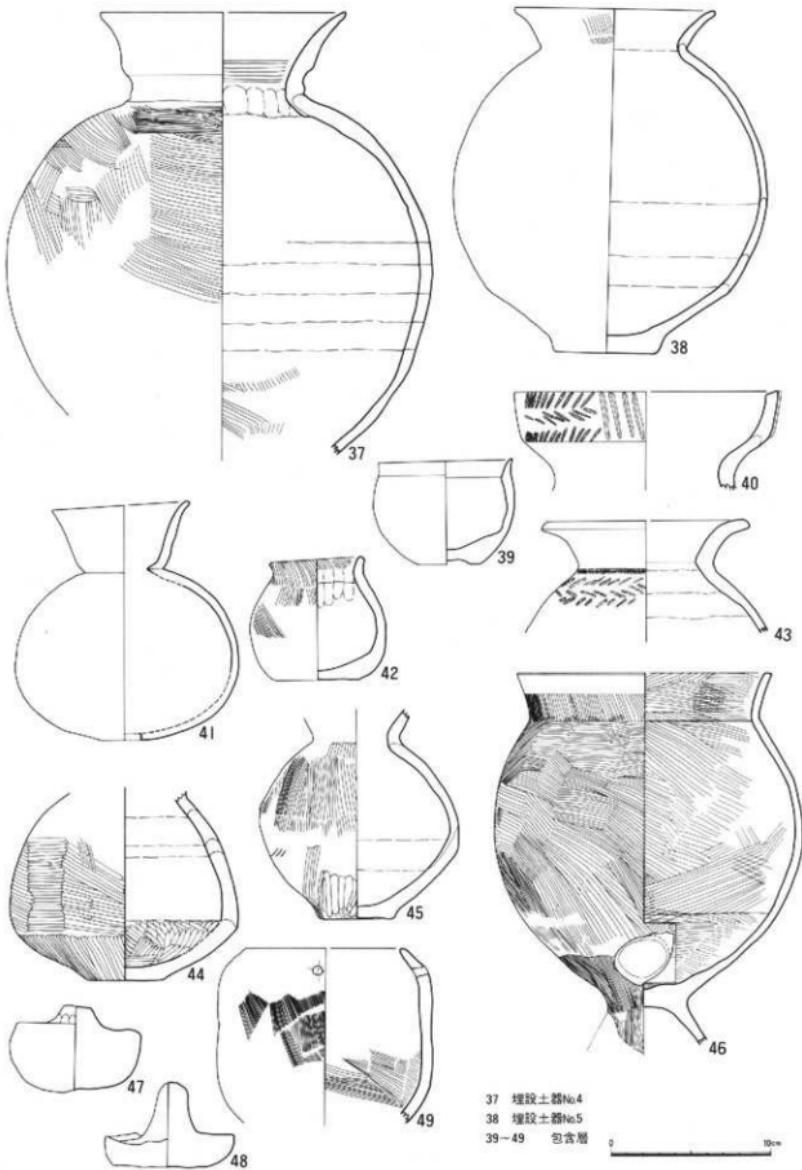


36

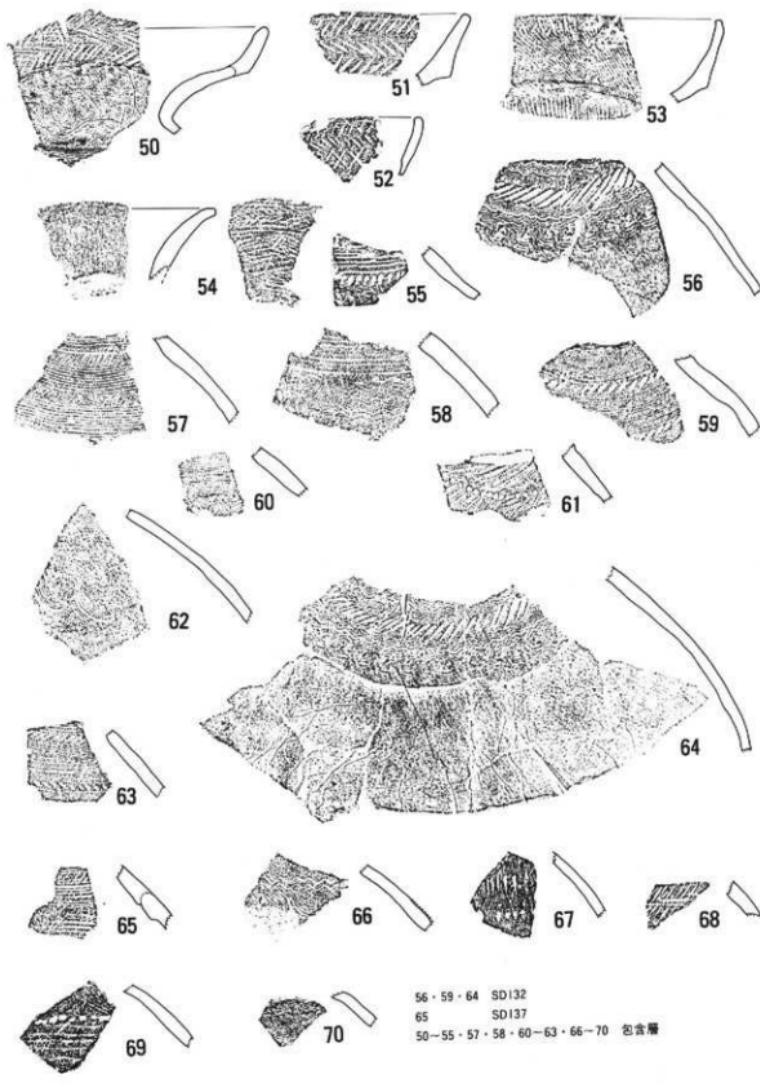
0 10cm

- 34 埋設土器No.1
- 35 埋設土器No.6
- 36 埋設土器No.3

第4図 弥生土器・土師器実測図IV



第5図 弥生土器・土師器実測図 V



第6図 弥生土器・土器拓影図

第1表 弥生土器・土器類縦表(1)

器種	図版 No.	計測値(cm) ()は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
小型壺	1	胴径 底径 4.0 4.2	・球胴を呈し口縁は直立に近い ・立ち上がりをもつ。 ・底部平底。 ・胴部最大径は中位にあり。	・磨滅激しく観察不能。	胎土 多量の赤色顎と金雲母含む 焼成 普通 色調 赤褐色	S D114 No.1 2383 口縁及び脚部の一部欠損
壺	2	口径 21.6	・複合口縁をもち、柄による波状文・割状文を施す。 ・肩部に横線文・波状文。	・口縁部内側刷毛目調整上から下、口唇部付近、横ナデ調整。	胎土 砂粒、石粒等を多く含む 焼成 金雲母混入 色調 黒 赤褐色	S D132 №4 2486 胴部欠損 口縁部1/2欠損
器台	3	口径 9.0 器高 8.8 底径 11.6	・环部は緩やかに内湾して開き ・口唇部を平坦に面取りする。 ・脚部はラップ状に緩やかに開き端部は面取りする。	・脚部内面を除き全面研磨される ・环部外側面研磨ナデ研磨。 ・脚部外側縁にナデ研磨非常に丁寧につくられる。	胎土 良選 焼成 普通 色調 赤褐色	S X12 910
器台	4	口径 20.3 器高 4.7 底径 8.9	・环部はするどく屈曲し、大きく外反する口部を有する。 ・口縁部はほぼ水平となる。	・内外面とも丁寧な横ナデが施される。	胎土 良選 焼成 壓 色調 赤褐色	S X12 №2 911 脚部欠損
広口壺	5	口径 8.8 器高 8.5	・口縁は直線的に外反し脚部は球形を呈する。 ・底は凹みがみられる。	・体部・口部・外面・口縁部内面底位のヘラ磨き。 ・脚部内面板ナデを施す。	胎土 砂粒、赤色粒子、雲母が混在緻密 焼成 やや堅 色調 淡赤褐色	S X111 2435 口縁部1/3欠損
高环	6	底径 14.0	・脚のつけ根から大きく弧状に開き、端部を縮める。接地面は丸く収める。	・脚部外表面が激しく観察不能。 ・三孔窓の痕はナデに依り調整。 ・脚部内面は横位・斜位の刷毛目調整。 ・环部接合痕は刷毛目により調整。中央部の凸部を残す。	胎土 長石や石粒 白、青、赤色 の細繊を多く含む 焼成 壓 色調 赤褐色	S X111 №1 2430 脚部欠損
高环	7	底径 13.3	・三孔円窓。 ・直線状の脚部をもち接地面は平坦に仕上げる。	・脚部外表面はヘラ磨き調整。 ・脚部内面は斜位の刷毛目調整、接地面は平坦に仕上げる。	胎土 良選 焼成 石粒、砂粒、長石を含む 色調 やや堅 明赤褐色	S X111 5 2434 环部欠損 端部1/3欠損
高环	8	底径 14.5	・脚部はかすかに丸味をおび、端部は内側に縮まる。 ・円窓あり。	・脚部外表面は磨滅が激しく観察不能。 ・脚部内面刷毛目調整。 ・环部接合痕未調整。	胎土 粗い長石、砂 粒等を多く含む(3mm大) 焼成 普通 色調 淡赤褐色	S X111 No.4 2433 环部欠損 脚部1/4欠損
高环	9	底径 14.0	・脚部は直線的に開き端部に向かって緩やかに内湾する。 ・脚部上位に三孔円窓を認める。	・脚部外面や斜位に、ヘラ磨き調整、一部擦減。 ・脚部内面、横位に刷毛目調整。 ・孔窓はやや斜め上より開かれ、その痕は未調整。 ・脚部、下半、ヘラ磨き以前に刷毛目調整直わずかに残る。 ・ヘラ磨きと同方向。	胎土 良好 1mm大の長石 石英雲母等 焼成 混入 色調 細密 やや堅 赤褐色	S X111 2436 环部欠損 脚部1/4欠損
壺	10	胴径(19.5) 底径 9.1	・脚部下位に最大径。 ・底は平底。	・脚部内外面共刷毛目調整。 ・脚部内面、最大径の位置に接合痕。 ・底部に木葉痕。	胎土 石粒、砂粒等、 長石、赤色粒、 微小雲母を含む 焼成 やや堅 淡褐色	S X112 No. 2506 No.9 2547 No.7 2480

第1表 弥生土器・土師器観察表(2)

器種	図版 No.	計測値(cm) ()は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
台付壺	11	口径(16.8) 器高(15.0) (保存値) 胸径(17.2) (最大径)	・「く」の字に外反する口縁部をもち、ヘラによる割目を施す。 ・口唇内面に折り返して肥厚させる。	・外面、全体的に斜位の刷毛目調整。 ・内面は口縁部のみ刷毛目調整をし下は巾1.2cmのナダ調整を施す。	胎土 粗い長石、砂粒等を多く含む 焼成 やや軟色調	S X112 N4 2574 台部欠損 脚部一部欠損
鉢	12	口径(18.7) 器高 9.6 底径 5.4	・口唇部に向かって緩やかに内高し、端部を内側に内高させる。 ・底部は平底。	・外面ヘラ調整。 ・内面は磨滅が激しく觀察不能。一部にヘラを残す。 ・口縁部はヘラで横ナダを施す。	胎土 やや粗砂粒、石粒等を多く含む 焼成 やや堅淡赤褐色	S X115 N6 2619 1/3欠損
壺	13	口径(13.6)	・口縁は大きく開くラッパ状を呈し、口縁部を折り返して肥厚する。 ・頸部に粘土貼付けの凸帯がめぐる。 ・口唇部は棒状工具による斜位、継ぎの剥文を施す。	・口縁折り返し部より下に窪い刷毛目を施す。 ・頸部に横ナダを施す。	胎土 良選 焼成 金雲母含む 色調 堅明淡褐色	S X115 N2 2 下 2758 口縁部2/3欠損
壺	14	口径(13.3)	・複合口縁。 ・口縁部に2本の棒状突起がみられ、垂直突出羽状文が連続して施される。	・口縁部外面、端部から頸に至るまで弱い横ナダ、内側は直立する範囲にナダを施す。	胎土 良選金雲母含む 焼成 堅淡褐色	S X115 下2759 口縁部2/3欠損
壺	15	胸径 15.3 底径 5.0	・胸部はいっぢちく状を呈し底は凹む。	・表面の調整は磨滅し不明。	胎土 砂粒、石粒、長石多く含む 焼成 やや堅赤褐色	S X120 2539 口縁部欠損
広口壺	16	口径(10.0)	・口縁部は直線状を呈し口唇部付近で直立する。 ・胸部は球形を呈する。	・全体にローリングをうけ觀察不能。	胎土 長石を含むがほぼ均一な胎土 焼成 堅黃褐色	S X120 2439
壺	17	口径(15.6)	・「く」の字に外反する口縁部をもち、口唇部は平底に仕上げる。	・頸部周辺に刷毛目が僅かに認められる。 ・内面に、輪積みを指頭押圧で調整した痕跡が著しく残る。 ・輪積みの巾は約1.5cm。	胎土 良選 焼成 やや堅明褐色	S X121 2695 口縁部1/3欠損
壺	18	口径 11.8 器高 26.4 胸径 21.3 底径 7.6	・口縁端部が外側に大きく外反。 ・球形を呈する胸部で最大径は中位にくる。 ・底部は平底。	・口縁外面、口唇部に添て横ナダ。 ・口縁部外側胸部との接合部分は横ナダ。 ・胸部刷毛目後へラナダ調整。 ・口縁部と胸部の接合部分内面に指頭压痕。 ・胸部内面は刷毛目調整する。	胎土 良選 石粒、砂粒、礫、微小雲母、赤色粒子含む 焼成 やや堅大きな黒斑淡赤褐色	S X122 N4 72 底部木葉痕
壺	19	胸径 20.4 底径 5.2	・胸部は球形を呈し、肩に凸帯がつき竹管と棒状工具による連続剥文が施される。 ・底部平底。	・胸部ヘラ調整を施されていると思われるが磨滅が激しく觀察不能。	胎土 やや粗く機合 む 焼成 やや軟赤褐色	S X121 口縁部欠損
壺	20	底径 10.5	・脚部は直線状に開き接地面は平である。	・全体に継ぎのヘラ磨き調整が施されるが、磨滅が著しく觀察不能。 ・脚内部の杯部との接合痕は指ナダ調整する。	胎土 砂粒、石粒、長石、微小雲母、赤色粒子を含む 焼成 やや堅明赤褐色	S X121 2673 環部ほとんど欠損 脚部1/2欠損

第1表 弥生土器・土師器観察表(3)

器種	図版 No.	計測値(cm) ()は推定値	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
広口壺	21	口径 (7.8) 器高 7.3 胴径 8.7 底径 2.8	。「く」の字に直線状に開く口 縁部をもち胴部は球形を呈す る。 底部は平底。	。僅かに刷毛目痕残すが調整痕 不明。	胎土 石粒、砂粒、 礫、微小雲母、 赤色粒子多量 に含む 焼成 やや堅 黒斑が2ヶ所 淡赤褐色 色調	S X121 2708 口縁部1/3欠損
台付壺	22	台径 9.0	。台部は下方でやや縮まってお り、接地面は平相。	。胴部外側は刷毛目調整。一部 磨滅。 。台部内側は板ナガ調整を施す。 。台内部の胴部との接合痕は指 ナガ調整を施す。	胎土 砂粒、石粒、 礫、微小雲母、 微小赤色粒子 を含む 焼成 やや堅 乳白褐色 色調	S X121 2784 胴部ほんと 欠損 台部1/2欠損
壺	23	器高 16.0 (残存値) 胴径 15.8 (最大径) 底径 7.0	。胴部はいちばん形を呈し、肩 曲部より下は直線的に底とな る。 。底は突出し平底となる。	。肩部は継位、胴部は斜位と横 位に細い刷毛目調整。 。底部外面に木葉痕。 。肩より下部は荒いヘラ調整。	胎土 長石、砂粒等 を含むがほぼ 均一な胎土 微量の赤色粒 子、金雲母混 入 焼成 やや堅 淡赤褐色 色調	S X122 N15 2532 口縁部欠損
壺	24	口径 13.9 器高 25.0 胴径 11.2 (最大径) 底径 6.6	。口縁部は「く」の字に外反し、 口唇部で穴味をもって直立し、 肩部はやや内傾となる。 。胴部最大径は中央よりやや下 にあり球形を呈する。 。底部は突出する平底で木葉痕 有り。	。口縁部内面横刷毛目、外面縱 刷毛目の後横位の横ナガを施す。 。頭部より肩上位まで縱斜位の 刷毛目調整を施す。 。肩上位より底にかけて丁寧な 横位のヘラ跡を施す。	胎土 良選 焼成 やや堅 色調 明赤褐色	S X122 N16 2533 口縁部1/2欠損
小型壺	25	口径 7.1 器高 9.0 胴径 12.0 (最大径) 底径 4.0	。口縁は「く」の字に外反する。 。胴は丸みをもち、緩やかに屈 曲する。 。底部は平底。 。胴部最大径下位。	。口縁部、内外とも横ナガ。 。胴部外位面で縱へら磨き、 下位は横へら磨き調整	胎土 砂粒を含む ほぼ均一な胎 土 極めて纏かい 銀雲母混入 焼成 黒褐色 色調 赤褐色一部あり	S X122 N6 2550 ほぼ完形
壺	26	口径 (19.8) 胴径 (22.4)	。口縁は緩やかに外反して開 いている。	。口縁部に断面。ヘラ状工具に よる刻み目。 。口縁部内面は刷毛目調整。 。胴部はナゲによりなめらかに 調整。	胎土 砂粒、石粒、 礫、微小雲母、 長石含む 焼成 黒 淡赤褐色 色調	S X122 N6 2/3欠損
甌	27	口径 19.8 胴径 23.4	。経長い肩部を呈し口縁は「く」 の字に外反する。 。口縁部に棒状工具による刻 み目を施す。	。器面を刷毛目で調整する。	胎土 多量の繊維を 含む 焼成 やや軟 明赤褐色 色調	S X122 2571
甌	28	口径 19.0 胴径 20.2	。緩やかに外反する口縁部をも つ。	。口唇部に棒状工具による刻 み目が施されている。 。胴部外面は刷毛目調整。 。口縁部内面は刷毛目調整。	胎土 砂粒、石粒、 礫、長石、赤 色粒子含む 焼成 軟 赤褐色 色調	S X122 N33 2660 約3/4欠損
台付甌	29	口径 16.4 胴径 (16.9)	。口縁部は「く」の字に外反し、 刷毛による刻み目を施す。 。胴部は球形の胴部を呈する。	。胴部から口縁部にかけて斜位の 前毛目調整。 。内面は口縁部刷毛目。 。胴部は横ナガ、工具不明。	胎土 長石等の混合 物含む 焼成 赤色粒子含む やや堅 暗褐色 色調	S X123 2470 台部欠損 胴部1/2欠損 内面底部外面 一部に煤付着
甌	30	口径 (17.0) 器高 7.5 (残存値)	。口縁部は「く」の字に外反し、 口唇部は外傾する平坦面とな り、脚の連続割突が施される。 。胴部に棒状工具の刺突を施す。	。口縁部外面横位刷毛目、内面 横刷毛目。 。口縁直下に横ナガ。 。口縁と胴の接合痕明瞭	胎土 良選 長石、砂粒等 を多少含むが 均一 焼成 壓 淡赤褐色 色調	S X129 N8 2560 N16 2613 胴部欠損 口縁部1/3欠損

第1表 弥生土器・土師器観察表(4)

器種	図版 No.	計測値(cm) ()は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
鉢	31	口径(15.3)	・縦やかに内湾する胸部から「く」の字に内湾して口唇部をつくる。	・胸部外面は刷毛目調整。 ・口縁部外面は横位の刷毛目の後ナデ調整される。 ・胸部中位に横合底有り、内面は特にナデ調整。	胎土 良選 燒成 硬 色調 乳白色	S X129 N15 2567
高壺	32	脚径 12.0	・脚部はやや内湾して立ち上がり基部は屈曲する。 ・三孔円窓。	・全体に線位のヘラナデ調整を施す。	胎土 良選 燒成 硬 色調 金雲母含む 良好 暗赤褐色	S X129 2556 口縁部欠損
甕	33	口径(17.2)	・口縁は「く」の字に外反しして状工具による斜位の刻目を施す。	・外面口縁部横ナデ調整。 ・胸部、斜位と横位の刷毛目調整を施す。 ・内面は全体に横位の刷毛目調整。	胎土 砂粒、礫を含む 燒成 やや堅 色調 暗赤褐色	S X129 N14 2556
壺	34	口径 16.0 器高 34.0 脚径 28.7 底径 8.0	・折り返し口縁をもち胸部は球形を呈する。 ・底部は平底。	・全面にわたりて刷毛目調整がみられ、口縁部内面まで施される。	胎土 石粒、砂粒を多く含む 燒成 やや堅 色調 赤褐色	埋設土器 N1 2291
壺	35	口径 8.7 器高 21.7 脚径 17.3 底径 6.6	・脚部最大径が下位となり頸部は細く、受け口の口縁をもつ。 ・文様は、頸から肩にかけて横状工具による連續刷突文、横縞文、波状文を施す。 ・底部は平底。 ・脚部穿孔。	・脚部最大径が下位となり頸部は細く、受け口の口縁をもつ。 ・文様は、頸から肩にかけて横状工具による連續刷突文、横縞文、波状文を施す。 ・底部は平底。 ・脚部穿孔。	胎土 砂粒を多量に含む 燒成 良好 色調 やや堅 暗赤褐色	S X116 B12S 2325 埋設土器 N6 光形
壺	36	口径 21.6 器高 47.0 脚径 46.7 底径 8.8	・口縁部は大きく開き脚部は丸みをもって屈曲する。	・口縁部内側横位、外側は斜位の刷毛目調整。 ・脚上部横縞文を施す。上から横線・肩状文・横縞。 ・脚下部は斜位の刷毛目調整。	胎土 長石、石英、 金雲母含む 燒成 やや堅 色調 淡赤褐色	埋設土器 N3
壺	37	口径 15.2 脚径 26.6	・口縁部は緩やかに外反し口唇部は尖る。 ・脚部は球形。	・口縁部、内外共に横ナデ。 ・頸部に接合時の指頭圧痕、粘土の折り返し有り。 ・胸部に平行、斜行の刷毛目を施す。 ・脚部内面は上位歓指押圧、中位滑らかなナデ、下位板ナデが施される。	胎土 礫多い 燒成 やや軟 色調 赤褐色	2325 埋設土器 N4
壺	38	口径(12.8) 器高 21.5 脚径 19.6 底径 6.2	・口縁は「く」の字に外反する。 ・球形を呈する胸部で最大径は中位にくる。 ・底部は平底。	・脚部外面に刷毛目を認めるが全体的に磨滅が激しく観察不能。	胎土 やや粗 砂粒、石粒を多く含む 燒成 赤色粒子混合 色調 壓 赤褐色	埋設土器 Nn5 1/2欠損
小型壺	39	口径 8.3 器高 6.45 底径 3.9	・胸部から直立する短い口縁部をもち先端を尖らせている。 ・底部粘土ひもを貼りつけて四んだ底をつくる。	・外面に刷毛目を施すが、器面が磨滅の為観察不能。 ・内面は指頭圧痕が多く見られる。	胎土 石英、長石を多量に含む 燒成 軟 色調 淡赤褐色	V層下部 N4 806 地点資料 ほぼ完形
壺	40	口径 16.4	・複合口縁をもつ。 ・口唇部平坦に面取り内傾する。	・口縁部外側輪による羽状の刺突文がある。	胎土 やや粗い長石、 燒成 硬 色調 赤褐色	B11 2200

第1表 弥生土器・土器観察表(5)

器種	図版 No.	計測値(cm) ()は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
柑	41	口径 8.4 器高 14.6 胴径 13.9	○口縁部は直線的に立ち上がり、上部でやや外反する。 ○胴部は球形を呈し丸底。 ○底部穿孔。	○口縁部は横位ヘラ磨きを施し、胴部に横位ヘラ磨きを施すが、摩滅が著しい。	胎土 長石、石英、細纖維を多量に含む 焼成 普通 色調 赤褐色	発掘区南壁 944
小型 広口壺	42	口径 5.9 器高 7.6 胴径 8.5 底径 5.2	○最大径は胴部の中位。 ○口縁部はややひらき気味に立ち上がる。 ○部は凹む。 ○口唇部は水平につくる。 ○器面は凹凸がみられる。	○外面口縁から胴部巾位にかけて斜位、刷毛目調整が施される。 ○刷毛目は口縁部から胴上位に集中。 ○内面口縁部に横位の刷毛目がみられる。 ○内面胴部上位に接合痕。 ○内面胴部より体部、底部にかけて指で調整、指頭圧痕もある。 ○底部外面に木葉痕。 ○胴全体刷毛目調整の施される部分は少ない。	胎土 長石、砂粒等を多く含む 焼成 堅 色調 淡褐色	表採 2215 口縁部1/2欠損
壺	43	口径 12.4	○口縁部はゆるやかなカーブで外反し口唇部を丸く收める。 ○口部は比較的厚い。 ○頸部から肩部にかけて横位及び羽状の櫛状施文具による連續刺突を施す。	○口縁内外に横ナデ調整。	胎土 砂粒、砂礫、赤色粒子、石英物、5mm~2mm大の物数多く混在 焼成 堅 色調 赤褐色	土器群 2744 口縁部1/2欠損
壺	44	器高 11.6 (残存値) 胴径 14.0 (最大径) 底径 4.8	○いちぢく型の胴部を呈し、肩部より上は横位のヘラ磨きを施し滑らかに仕上げる。 ○底部は平底。	○肩部より上は横位のヘラ磨きを施し滑らかに仕上げる。 ○表面に丹が塗ってある。	胎土 長石、砂粒等を含むがほぼ均一な胎土 焼成 堅 色調 淡赤褐色	弥生土器群 N1.3 2081 口縁部欠損
壺	45	胴径 12.5 底径 4.3	○肩部は丸く、胴中位はやや強く屈曲する。 ○底部はやや凹む。	○胴上位は、刷毛目痕を明瞭に残す程度の荒いヘラ調整を施す。 ○胴下位は横位ヘラ調整を施す。 ○肩の接合痕は下から粘土を移動させている。	胎土 良選 焼成 砂礫少量含む 色調 堅 明赤褐色	S P1332 2789 口縁部欠
台付壺	46	口径 15.8 胴径 19.3 (最大径)	○口縁部は頸部より直線的に短く外反する。 ○口唇部は平につくる。 ○胴部中位に最大径を持ち、球形を呈する。 ○胴部下位に穿孔。	○口縁部上位は横ナデ調整、下位は刷毛目調整。 ○頸部上位外側横刷毛目調整、中、下位は斜位刷毛目調整。 ○胴部下位、外、内面に接合痕。 ○口縁部内面刷毛目調整。 ○胴部内面刷毛目調整。	胎土 砂粒、長石等を含む 焼成 軟 色調 明赤褐色	不明 台付欠損 口縁部1/10欠損
壺蓋	47	器高 5.2 (残存値) 胴径 8.2 (最大径)	○上面平坦、下面は丸味を持たせる。	○指頭押圧により成形し粗いナデを施し調整する。	胎土 粗い 長石、砂粒等を多く含む 焼成 堅 色調 褐色	弥生土器群 N4.8 2069 摘み部分欠損
壺蓋	48	器高 5.2 底径 10.0	○円盤状を呈する。 ○中央部につまみ部をつくりだす。 ○下面は平坦面となる。	○下面を平坦に仕上げているのを除き、他は指頭押圧及びナデにより荒く仕上げる。	胎土 砂粒、石粒、長石、雲母を含む 焼成 やや堅 色調 灰白色	V1層 B39 1967
腹膨れか?	49	口径(9.6) 胴径(13.5)	○胴部は直立に近く立ち上がり、上位でややくびれ部が認められる。 ○口縁は内湾し、口唇は尖る。 ○口縁に焼成割り、外からの孔が対にあけられる。	○胴部外側、細かい刷毛目調整。 ○内面上位横ナデ調整。下位横刷毛目調整。	胎土 良選 焼成 砂粒、金銀葉母含む 色調 堅 赤褐色	弥生土器群 N14.2267 1/2欠損

状態のよい5をみると、丁寧な綴のヘラ磨きを施している。

本遺跡の土器群は、浜松市椿野遺跡出土土器のなかにみいだすことができる。椿野遺跡は本遺跡とおなじ都田川の微高地に立地し、上流約1kmに所在する。昭和55年度調査（川江・鈴木 1980）出土の土器群と本遺跡を比較してみる。

本遺跡の壺は、口縁部形態は椿野遺跡のものとの変化はないが、口唇部が方形で面取りされるものは少なく、尖ったり丸みをもつものが多くみられる。また、口縁部に顯著な横ナデを施すものも少ない。胴部形態は殆どが球胴であり、下部で屈曲するものは小型の壺に認められるのみである。

装飾的な点をみても、椿野遺跡の場合、頸の位置に凸帯を巡らす例が、単純口縁、折り返し口縁、複合口縁のものにみられ、本遺跡より文様帯が広く、かつ多様であるといえよう。従って、本遺跡の土器は椿野遺跡の欠山期の土器群に比較して、球胴、装飾的な様相が退化している等のことをもって後出の要素とすれば、その多くは元屋敷期に比定されるであろう。僅かに、34の厚手の折り返し口縁、23・44の壺の胴部に弥生時代後期の形態を残しているのが本遺跡の様相といえるだろう。

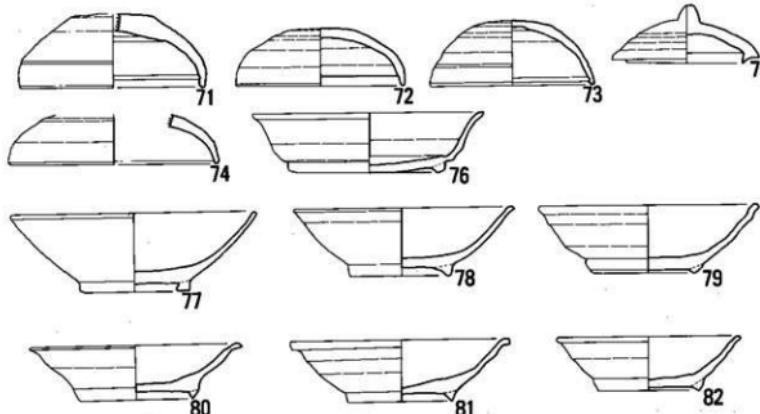
高环では、土坑状の不明造構としたSX111の底から出土した脚、6・8・9が欠山期のものである。また26の墻で、緩い屈曲の口縁部をもつものも古い様相をしめしている。

元屋敷期の土器については、本遺跡ではS字状口縁台付壺の出土がなく、全体に資料不足である。周辺の遺跡としては、本遺跡の下流の川久保遺跡（栗原 1981）からS字状口縁壺を含む土坑一括資料が出土している。

第2節 須 恵 器

須恵器は包含層のIV層から僅かに出土したもので、6点を図示した。71～74は器高の高い環蓋であり天井は平坦にヘラ削りにより面取りされ、その中位から直下までヘラ削りがおよんでいる。端部は71、72が直立し、73、74はやや傾く。環が最も小型化する段階といえよう。75は乳頭状のつまみのつく蓋であり径は7.1cmと小型である。いづれもIV期前半に位置付けられる須恵器である。

6は口径14.4cmの坏身であり、高台と底のレベルはほぼ同一で、底部はヘラ削りによって調整されている。8世紀前半に比定される。この6は古墳時代のものではないが須恵器であることから本節に含めた。



71-82 包含層

第7図 須恵器・灰釉陶器実測図

第 III 章 古代末～中世の遺物

本遺跡の主体をしめているのがこの時期であり、土器類として、無釉陶器（山茶碗、小皿、大平鉢）施釉陶器（灰釉陶器、中世陶器）、輸入磁器、土師質土器（小皿、甕、内耳鍋）といった多様な土器類が出土している。また土製品として、瓦、土錐が、このほかに石製品、金属製品、木製品がみられる。遺跡が都田川の微高地に立地し、溝とか井戸というように、検出面から深く掘り込まれている遺構が多かつたことでも多種多様な遺物の遺存に貢献していた。

遺物は各々の種類ごとにまとめ、かつ遺構ごとに図示した。土器類は、一部のものを除き、各々種類ごとの土器の観察表にまとめてみた。

第 1 節 無 釉 陶 器

無釉陶器は、先述したように山茶碗、小皿、大平鉢がまとめられる。遺物のなかでも山茶碗、小皿の出土量は他を圧倒している。山茶碗では高台の付されるものが優位であり、小皿では高台、無高台がほぼ同じ程度の比率で出土している。

A・山茶碗、小皿

個々のものについては第4表、山茶碗・小皿観察表にゆずるとして、本遺跡では井戸、溝等に比較的法量、形態が類似する群が認められることから、全体的な様相を法量、形態等で検討し、年代観の基礎資料となる一括遺物の抽出に努めたい。

山茶碗の法量について

山茶碗の法量は第5表にあるような分布をしめしている。これは、形態、法量の判明するほぼ完形に近い山茶碗を検討資料としたものであり、資料的な制約から点数は少ないので、各遺構の山茶碗の傾向を示しているといえるだろう。表は縦軸を器高、横軸を口径とし、その交点を表に表し、各々の遺構ごとに、分布する最も外側を直線で結んだものである。これらの分布は口径で約4cm、器高で約2cmの差のなかに納まり、最大径18.2cm、最小径13.7cm、最大器高6.4cm、最小器高4.4cmである。

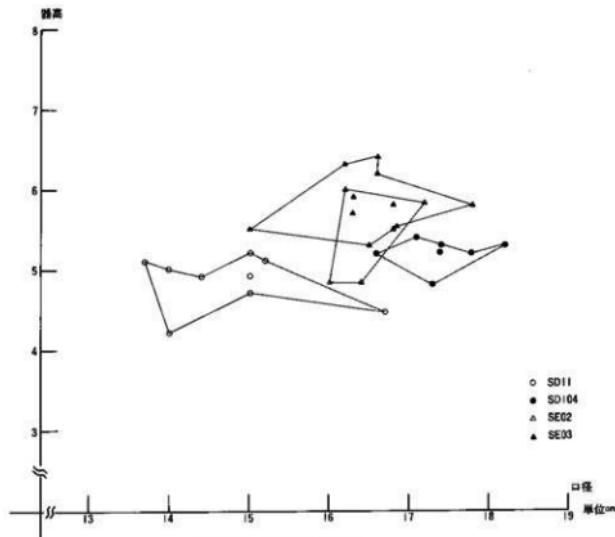
直線で結んだ形状は、SE03が横長の菱形を呈し、SE02は縦長で上の返が長い台形状、SE104は横長の逆三角形状を呈している。これらに比較して口径の差が大きいのがSD11であり、5cm前後の低い器高に集中しており、SD11以外のものとは接していない。

このような分布の形状から、各遺構の山茶碗の相互関係を法量からみてゆくとSE03とSE02が最も共存する範囲が広く、SE02の2点はSE03の最も集中する範囲に位置している。後述するが、手法においてもこの両者は糸切り痕を消すものが多く、体部が内湾し、大きく外反する口縁部の内側に稜が認められる等、共通した要素を多く指摘できる。これらの共通点が法量のうえにも反映されているとみるべきであろう。

SD104はSE02の下部に若干接してはいるが、大部分は他との共有関係ではなく一つのグループのありかたとして考えることができる。口径17.4cm、器高5.2cm付近に分布の中心がある。

SD104より尚、独自性をもつものがSD11の一群である。SE02の下部に近づいてはいるが法量分布のうえでは完全に独立している。口径の最も大きい1点を除けば、口径14～15cm、器高5cm付近に分布の中心がある。

以上、山茶碗の法量の傾向をみてきたが、同一遺構のなかで極端に法量の差をもつ数点のもの、例えば、SD11の右端、SE03の左右のものなどを除けば、比較的狭い口径、器高の範囲に納まる傾向がある。従って、口径はSD104、SE03・SE02、SD11と小型化し、また器高の変化は口径と同じではないが、SE



第2表 山茶碗法量表

03、SE02、SD104、SD11のように深いものから、浅いものへと変化している。

小皿の法量について

小皿はSD11、SE01、SE02、SE03、SE101の出土例を比較した。外枠を直線で囲み山茶碗と同じ作図をしてみたのが第6表である。これらの分布範囲は口径で、最大10.4cm、最小8cmを計り、器高では最大3.5cm、最小1.4cmを示す。各遺構の外枠線の形状は、器高の大きいものから、SE02は横長でやや斜位、SE03は横幅がやや短い三角形、SE101は縦長の矢印状の枠となり、SE01は極端に縦長の三角形状を呈している。SD11の場合、山茶碗でみてきたように、器高の差が少ないので比較して口径の差が大きく、横長の細長い平行四辺形のような形状である。

このように抽出した各遺構の小皿の法量について、先の山茶碗と同じ検討をくわえてみる。まず分布の傾向として、SE02とSE03が他と接してはいるが、ほぼ同じ範囲にあるといえる。かつ、SE02の右端の1点は極端に大きい法量をしめしており、SE02のなかでの一般的な傾向といえないものとするなら、山茶碗でも指摘された傾向であるが、SE02の小皿はよりSE03のものとの法量の類似性が強いといえる。

SE101のものは、器高の差が大きいが口径では、8.5cm～9cmの範囲に分布し、SE01がそれに近い法量の分布範囲をもっているが該当する資料はない。法量分布のうえでも比較的まとまった資料であり、かつ器高では、高いものと低いSD11の一群の間に位置し、中間といえる独自な器高を持っていることが特徴として挙げられる。

SE01の法量は口径の差がないのに対し、器高のばらつきが認められる。それは、器高の高いものから、低いものまでのすべての範囲に分布していることになるが、一方、口径では各々の遺構ごとの範囲の最小の範囲8.5cm前後に集中してみられる。このように口径が1cmの範囲内に集中しているのがSE01の小皿の法量の特徴といえる。

SD11は外枠が横に長く縦に短い形状で、山茶碗と類似することは先に述べた。小型化する部分がSE101、SE01のものと一部共有してはいるが、口径の差が大きく、器高差が少なく扁平であることにより独特の外枠線となっている。

このように小皿の場合、法量が小さいため山茶碗程には各々の相違は顕著ではないが、分布の集中する範囲にそれらの法量の傾向が抽出できる。従って小皿の場合、法量の小型化は器高に現れており、SE02・SE03、SE101・SE01、SD11のように推移するといえるだろう。

法量からみた検討をおこなってみたが、一部の突出した数点の資料を除外すれば、各々の遺構ごとにかなりの法量の集中化傾向がみてとれる。また、小型化してゆく法量の変化は、各遺構ごとの山茶碗、小皿に共通した推移をたどることが確認された。従って、これらは一括りの高い同時期のものと判断されるだろう。

では、もう一方の重要な要素である手法・形態から、主として遺構出土のものについて、みてゆくこととする。

底部手法について

本遺跡の山茶碗・小皿は、底部の手法、形状等の知れるものがかなりみられた。従って、以下の基準によって底部の切り離し、調整手法を検討してみた。しかし、結果的には第7表にみられるように全体的に多様な手法を併用しており、形態別、法量別の特徴を抽出することはできなかった。従って、表にまとめたものは全体の傾向をつかむための参考程度のものとなった。底部調整の手法の分類は次の基準によった。

山茶碗・小皿 I 燃り糸による切り離し

a・回転糸切り未調整

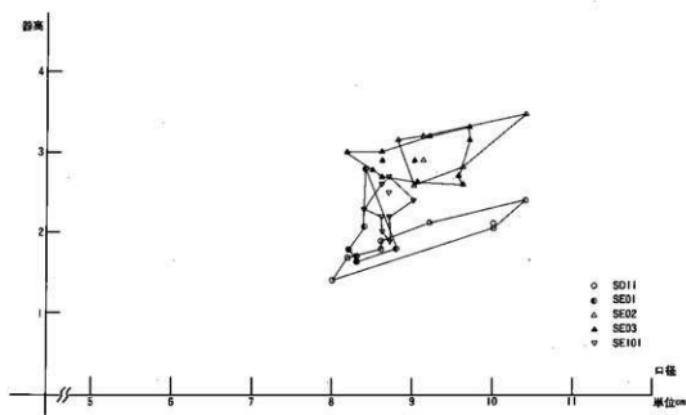
b・静止糸切り未調整

II 無燃り器具による切り離し未調整

III 切り離し後の調整により器具不明のもの

IV 破片のため手法が不明のもの

以上のような基準を設定して分析した。尚、静止糸切り未調整のものについては、多くの資料が高台の接合・調整時に高台内を約半分以上ナデているため的確な観察かどうか不安ではあるが、確実に静止



第3表 小皿法量表

糸切り手法によるものに限ってこの類に含めた。

形態について

山茶碗・小皿の形態、施釉について、図示した順序に従って遺構ごとに検討を加えることとする。

S D 0 1 (第8図83~87)

83は体部が大きく内湾し、口縁はやや外反、端部を尖せる。内面は底部との境がなく全体に丸みを帯びている。施釉されているが発色は悪い。小皿は4点を図示し、有高台(84、87)、無高台(85、86)の両者が認められる。

S D 1 1 (第8図89~108)

この溝からは、山茶碗9点(89~97)、小皿11点を図示した。山茶碗、小皿とともに、先の法量の検討で他の遺構のものとは異なることを述べたが、形態上からみても独自性が認められる。小型化が進んだ段階のもので、山茶碗では無高台化が顕著に現れ、小皿にいたっては高台は消失し、器高は低く扁平なものに規格化されている。これ以外でも気づいた点を列挙すると以下のようなである。

- 1・山茶碗・小皿ともに体部は直線的に開き、端部は肥厚し斜位に面取りされる。
- 2・山茶碗・小皿ともに、体部が丸みを帯びて高台をもつもの(89、105)、体部は直線的に開きがひしゃげた高台をもつもの(90~93)、無高台だが体部がやや丸いもの(94)等の相違はあるが山茶碗は95~97の体部形態に類似している。小皿でも、100・101・107・108にみられるような扁平な形態が主体となる。

S D 1 0 4 (第8図109~115)

第5表でみたように、口径が最も大きい一群の山茶碗であり、方形高台の輪花碗で施釉も認められる(109・112~115)。またこれらはいづれも内面の体部と底との境が明確でなく、丸みをもって底部に至っている。しかし、一方では高台が低くひしゃげ、体部が直線的に開くもの(111)、体部が丸みをもつもの(110)等の変化も認められる。全体的な傾向としては、口径は大きく、器高が低くなっているのが特徴的といえる。施釉されて、輪花をもつものが優位にあると言えるだろう。

S E 0 1 (第9図116~120)

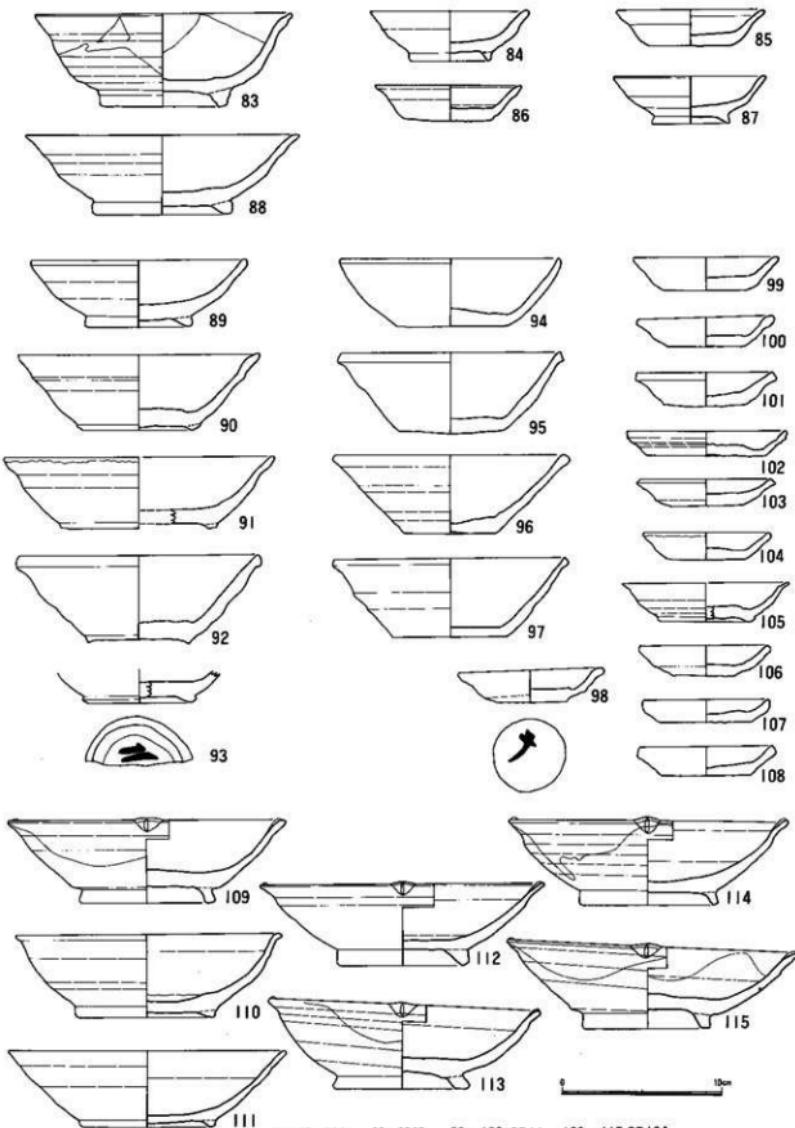
SE01からは15個の山茶碗の底部が出土しているが口縁部まで残存するものはみられない。小皿5点を図示した。法量からは最も近似した数値をもつ一群であり、無高台で体部がやや丸みをもっているものが多くみられるようである(116・119・120)。一方体部が直線的なものは、器高が低くなっている(117・118)。

S E 0 2 (第9図121~131)

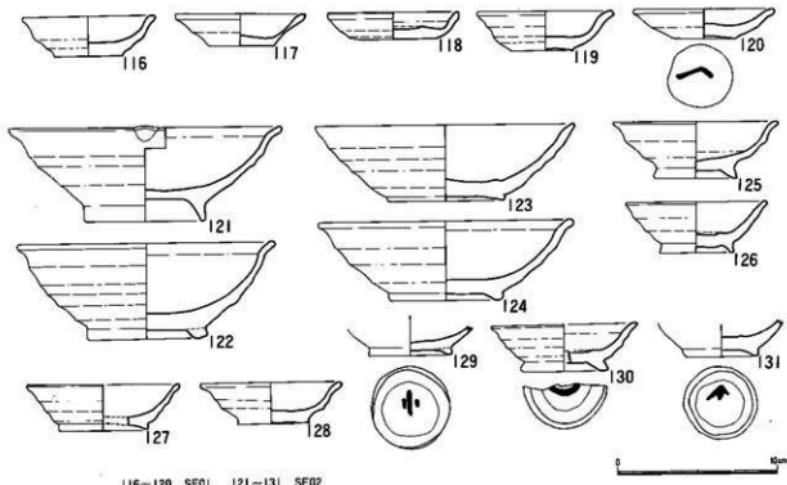
山茶碗では形状の判明するもの4点を図示した。121には輪花が認められ、この輪花手法は棒状、またはヘラ状工具を用いて、口縁部を僅かに弱い力で押したるものであり、注意しないと見落とす可能性もあるという程度のものである。この高台は他の山茶碗と比較して高いことが大きく相違している。123・124の2点は体部僅かに内湾、高台低く潰れたような形態をしている。また122は低くなっているが台形の高台をもっている。多様な要素をもった一群であり、第5表の法量分布にもその傾向はあらわれてきている。小皿では形態がSE03のものと類似しており、器高が高く、高台の付くもの(125・126・127・130)が多く、無高台(128)より優位となっている。従って、山茶碗では高台が退化した様相であるのに対し、小皿では高台、器高が高い等の古手の様相を示し、両者ではアンバランスな状況となっている。時期差が認められる一群の在り方と判断される。

S E 0 3 (第10図)

本遺跡のなかでは最も古い時期に位置付けられるものであり、一部の例を除くと一様に類似した形態と法量を持っている。共通する点を挙げると以下のようにまとめられる。



第8図 山茶碗・小皿実測図 I



第9図 山茶碗・小皿実測図II

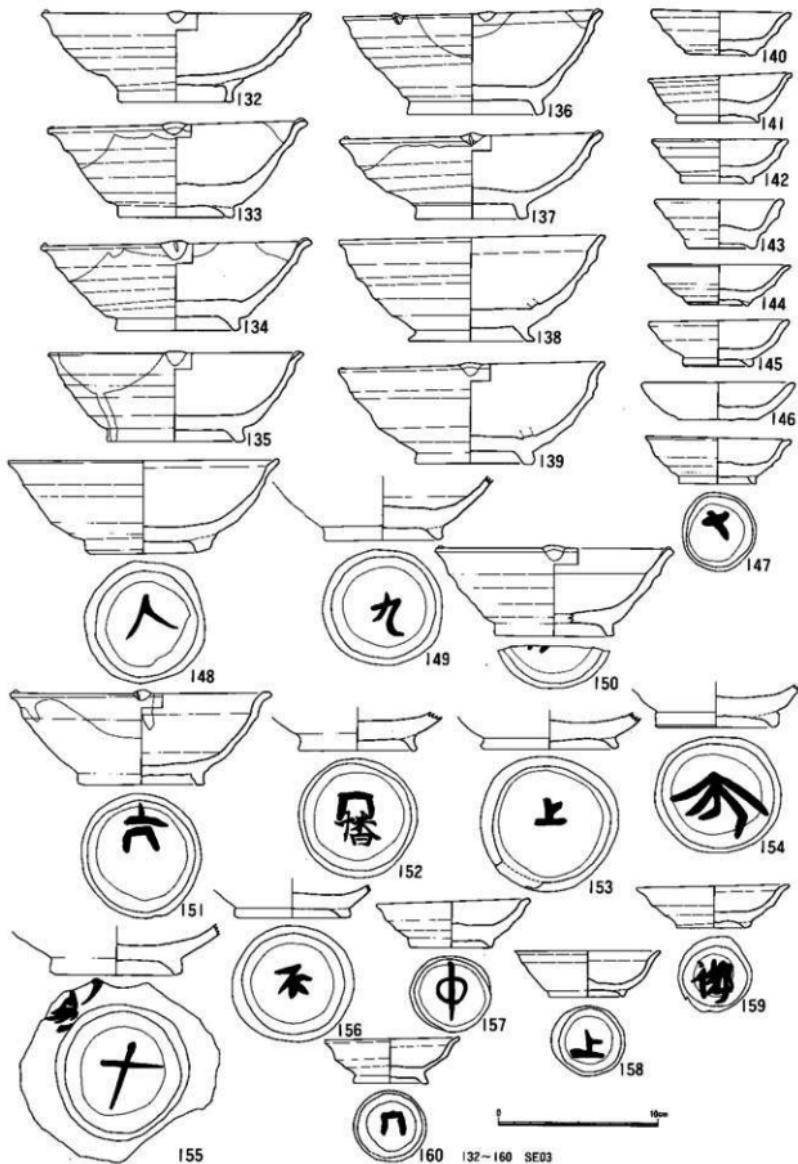
- 1・山茶碗では輪花を施すのが一般的であり、図示した11例中9点に認められる。
 - 2・体部の形態は山茶碗・小皿とともに内湾して立ち上がり、端部をやや外に引き出す。
 - 3・山茶碗では施釉率が高く、11点中少なくとも6点に明瞭な施釉が観察される。
 - 4・内面の体部から底部の移行が丸みをもち境が明確でないものが多くみられる。11点中で境目が明瞭なのは、134・137・139の3点である。
- このSE03からは他の造構とは比較にならない多くの墨書き土器が出土しており、これも特筆すべき事柄である。

SE101 (第11図161~184)

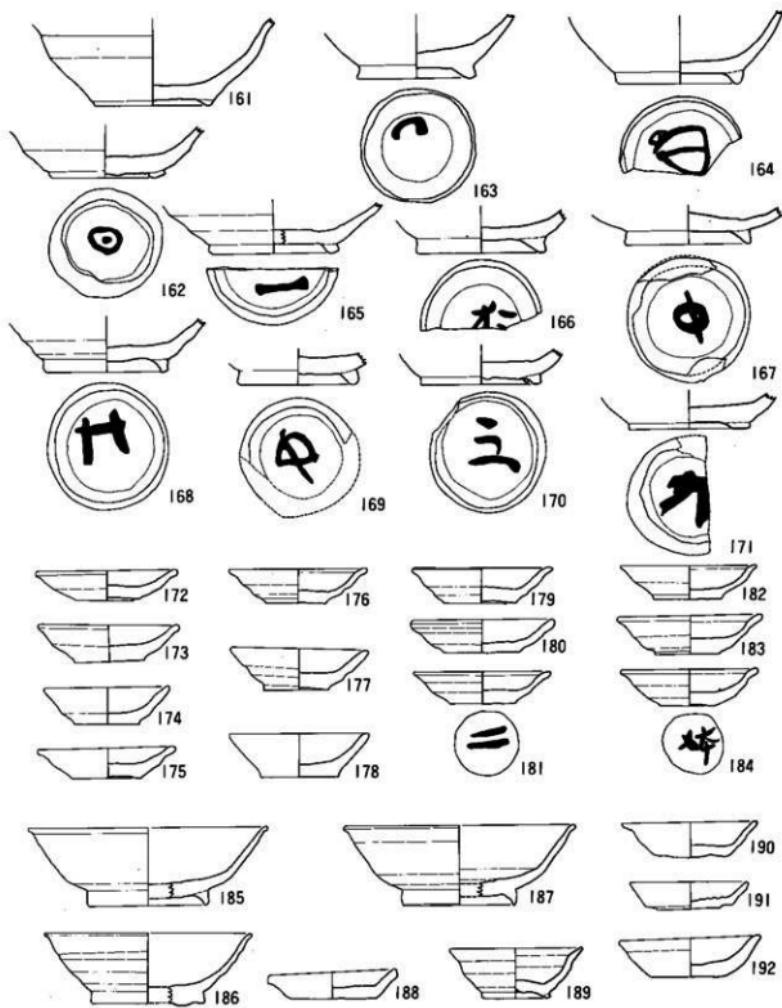
この井戸は、他の井戸・溝と比較して、土層の水平堆積が顕著であり、井戸枠上面から底まで7つに分層され、かつ各層に山茶碗・小皿を伴っていた。また各層間に明瞭な無遺物層が存在したため、時期差の検討に良好な資料となることを期待したが、結果的には山茶碗では底部から口縁部までの全体の形態を知り得るものはなく、底部切り離し、調整手法、高台の形態も検討に耐えうるものではなく、むしろ類似する点が多くみとめられた。従って、井戸の埋没は比較的短期間のうちにされたものであろうと判断された。このSE101も比較的墨書き土器が多く認められる。山茶碗は高台が低く潰れてひしゃげた段階のもので、台形や方形の丁寧なつくりの高台は認められない。小皿は器高が低く、すべて無高台のもので占められている。なかでも、175・177・178は体部が直線的なものに変化しSD11にみられる新しい様相をもつものが含まれている。

以上、山茶碗・小皿の様相について概要を述べたが、年代観は第IV章で扱うとして、その大まかな特徴についてまとめてみたい。

法量では器高が高く口径の大きいものを古い要素として、次第に小型化する。形態でみれば、体部が内湾し、内面は体部と底部の境がなく丸みをもち、高台は比較的丁寧に台形または方形に作られる。また、輪花を伴い、施釉されている。これらの特徴が古手のものに認められ、次第に体部が直線化し、内



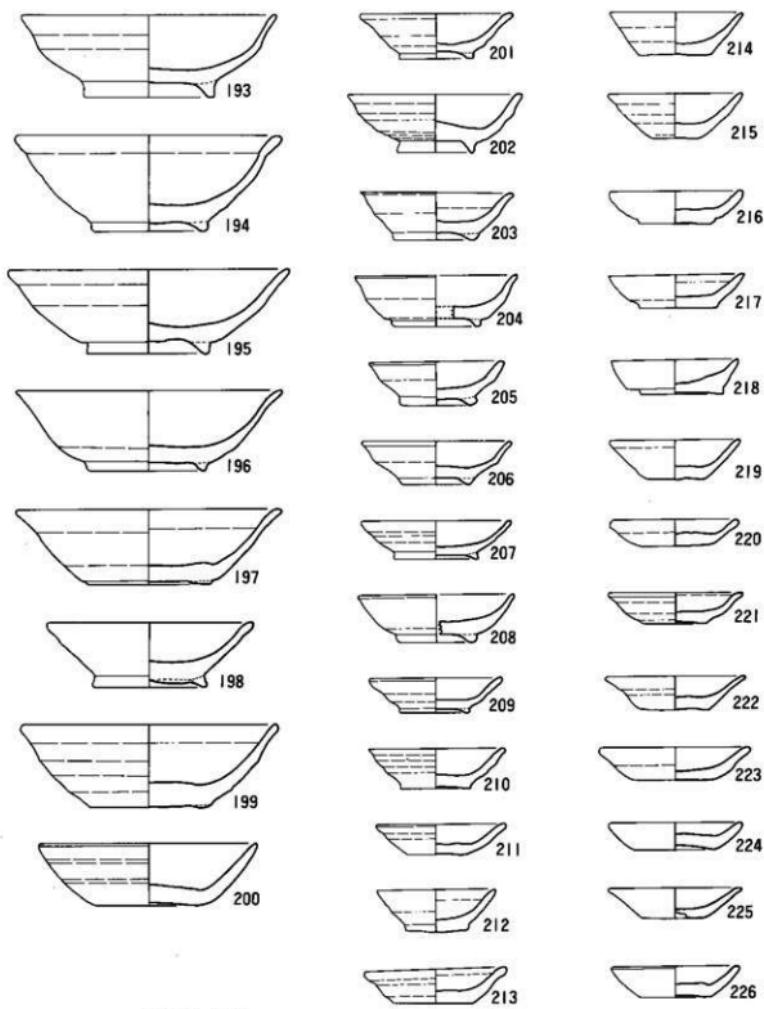
第10図 山茶碗・小皿実測図III



161～184 SE101
185～192 ピット

1mm

第11図 山茶碗・小皿実測図IV



193-226 包含層



第12図 山茶碗・小皿実測図 V

面では体部、底部の境が明瞭となってくる。輪花は消失し、高台は低く作りも難になり無高台となる。この新しい様相の顕著な形態はSD11に現れているが、特に口縁部を肥厚させ、斜位に面取りする手法は特徴的なものといえる。図の11・12にピット、包含層のものも図示しているが、今まで述べたなかでその様相が網羅されているため本分中の検討からは除外した。

墨書土器について

墨書土器と認められるもの、及び墨痕を残しているものは約50点程出土している。そして、墨書が認められるのは山茶碗・小皿に限られている。出土位置は井戸、溝が大部分を占めており、そのなかでもSE01・03から最も多く出土する。また、山茶碗、小皿の区別なく墨書されるが、量的には山茶碗が多く小皿への墨書は山茶碗の約半数強の比率を占めているようである。時期的には、古代末から中世のほん遺跡の存続期間のなかでの上限であるSE03と、下限のSD11及びその中間の時期の井戸、溝にも量の多少はあるものの出土がみられることから、山茶碗、小皿が用いられた期間中途切れることなく墨書が施されたものと推定される。

墨書の部位は底部、高台の内側であり、僅か1点のみ体部の下部に墨書する例が認められる。SE03の井戸から出土した155であるが、これは底部にも認められる。現状で確認されるのはこの1点のみではあるが、しかし、SE03・SE101の出土例でみると、体部まで全体が残るものは少ない。従って、体部墨書の例は出土の比率より大きい事が推定される。

墨書の内容は文字、及び記号と推定され、内容の類推可能な資料といえるものは数少ない。以下に内容についての所見をあげてみる。「」が訛文または記号の解釈である。

1・文字と思われるもの

- 136「九」、152「」異体字か、文字は鮮明だが判読できない。153・158「上」、159「御」、165「一」、
170「三」、181「二」

2・記号と思われるもの

- 129「漢字のりっしん辺のような記号か」、131「三方向からの矢印」、141「中心点から八の字状に広がる」、150・155「×」か、154・156「一点を中心として放射状に広がる」、157・167「丸と直線の組み合わせ」、163「半円か」、162「点と丸の組み合わせ」、168「三本の直線の組み合わせ」、169「半丸と直線の組み合わせ」

3・不明のもの

- 151は漢字のなべぶたと、門の崩し字のようなものとの組み合わせかとも思える。この門の崩し字のようなものは152、160にも認められる。また、150・155で「×」とした記号が、184の一部にも認められる。尚、151・152・184は複数の文字、記号が併記されていると思われる例である。

墨書の意味については、記号に関する限りその解釈の根拠をもたない。文字と推定したものの中では、一、二、三のような数値、あるいは順位を示すものとか、上のよう位置関係を示すと思われるものがある。しかし全体的には、意味する内容は不明の点が多く漠然としている。

これらの墨書は平安時代の、一文字とか記号を主体とする傾向を反映しており、記号化された文字、記号等であると推定され、極限られた集団のなかで目印のような機能を果たしていたのではないかと考えられる。本遺跡の性格に關係してくる事柄であるが、多量の布目瓦の出土から、周辺に寺院またはその付属施設の存在が推定される。従って、これらの墨書は、寺院で使用されていた可能性もあり、記号としたものの一部は僧侶の花押とも類推される。しかし、何の根拠も提示できる現状ではなく、今後の資料の増加を待ちたい。

B・大平鉢（第13図228）

SE01から一点出土している。直線的に開く体部をもち、高台はハの字に開き三角形を呈する。高台径

第4表 造構出土 山茶碗、小皿分類別点数一覧表

遺構名		分									
		I a			I b						
		無高台	高台の形状			無高台	高台の形状			無高台	
			台形	三角形	つぶれ		台形	三角形	つぶれ		
SE 01	山茶碗 小皿	0 1	1 0	1 0	1 0	0 0	0 0	1 0	0 0	0 3	
SE 02	山茶碗 小皿	0 1	4 0	0 1	0 1	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	
SE 03	山茶碗 小皿	0 1	2 2	0 1	0 1	0 0	2 0	0 0	1 0	0 0	
SE 101	山茶碗 小皿	0 6	6 1	2 0	3 0	0 0	3 0	0 0	0 0	1 8	
SD 01	山茶碗 小皿	0 1	1 0	1 0	1 0	0 0	0 0	0 0	1 0	0 3	
SD 02	山茶碗 小皿	0 -	0 -	0 -	0 -	0 -	0 -	0 -	0 -	0 -	
SD 05	山茶碗 小皿	0 -	1 -	0 -	0 -	0 -	0 -	0 -	0 -	0 -	
SD 11	山茶碗 小皿	4 6	0 0	0 0	7 0	0 0	1 0	0 0	2 0	0 3	
SD 12	山茶碗 小皿	- 0	- 0	- 0	- 0	- 0	- 0	- 0	- 0	- 0	
SD 102	山茶碗 小皿	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 1	
SD 103	山茶碗 小皿	0 -	4 -	1 -	1 -	0 -	0 -	0 -	1 -	0 -	
SD 104	山茶碗 小皿	0 -	2 -	1 -	2 -	0 -	2 -	0 -	0 -	0 -	
S P	山茶碗 小皿	0 2	0 0	3 0	0 1	0 0	1 0	0 0	0 0	0 2	
包含層	山茶碗 小皿	1 8	4 1	0 1	2 2	0 0	2 0	0 0	0 0	1 11	
総計		山茶碗 小皿	5 26	25 4	9 3	17 5	0 0	11 0	1 0	5 0	2 31

類														
II			III			IV								
高台の形状		無高台	高台の形状			無高台		高台の形状		台形	三角形	つぶれ		
台形	三角形	つぶれ	台形	三角形	つぶれ	台形	三角形	台形	三角形	つぶれ	台形	三角形	つぶれ	
1 0	3 0	1 0	0 0	1 1	1 0	3 1	0 0	0 1	0 0	0 0	1 0	15 6		
1 0	2 0	1 0	0 2	3 2	1 2	2 0	0 0	1 0	0 0	0 0	1 0	16 7		
3 1	1 0	1 1	0 0	6 1	0 1	5 3	0 0	1 1	0 1	0 0	0 0	22 13		
8 0	9 0	13 0	0 0	13 1	3 1	13 1	0 0	3 0	0 0	5 0	0 0	82 18		
1 0	2 0	2 0	0 0	1 0	0 1	0 1	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	10 6		
1 -	0 -	0 -	0 -	0 -	0 -	0 -	0 -	0 -	0 -	0 -	0 -	1 -		
0 -	0 -	0 -	0 -	0 -	0 -	0 -	0 -	0 -	0 -	0 -	0 -	1 -		
1 0	0 0	3 0	0 2	1 0	1 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	20 11	
- 0	- 0	- 0	- 0	- 0	- 1	- 0	- 0	- 0	- 0	- 0	- 0	- 0	- 1	
0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 1	
0 -	0 -	1 -	0 -	2 -	1 -	8 -	0 -	0 -	0 -	0 -	0 -	0 -	19 -	
1 -	0 -	0 -	0 -	0 -	0 -	1 -	0 -	0 -	0 -	0 -	0 -	0 -	9 -	
1 0	0 0	1 0	0 2	3 1	0 3	0 1	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	9 12	
1 0	1 0	0 0	0 2	2 1	1 3	5 3	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	20 32	
19 1	18 0	23 1	0 8	32 5	8 12	37 10	0 0	5 1	0 0	7 0	0 0	224 107		

第5表 山茶碗・小皿観察表(1)

器種	開版 No.	計測値(cm) (は寸定鏡)	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
山茶碗	83	口径 15.8 器高 5.7 底径 8.0	○体部は内湾して立ち上り口縁部を外反、端部は丸く収める。 ○高台は台形を呈する。	○釉薬付け掛け発色良、暗緑色。 ○底部ナデ調整。 ○高台にもみ痕を認める。	胎土 良選 焼成 堅 色調 灰色	S D01-5 258 1/2欠損
小皿	84	口径(10.0) 器高 3.1 底径 5.1	○体部は口縁部まで緩やかに内湾して口縁部をやや開き気味に端部を丸く収めている。 ○高台は三角形を呈する。	○底部ナデ調整。 ○釉、胴部内面に灰色に発色しているが、発色不良。	胎土 均一で密 焼成 堅 色調 灰白色	S D01-3 N176 1/2欠損
小皿	85	口径 9.3 器高 2.25 底径 5.1	○体部は直線的に立ち上り、口縁部を外反させ端部を尖り気味に収める。	○底部糸切り未調整。	胎土 精選 長石がみられる 焼成 堅 色調 灰色	S D01-5 258 2/3欠損
小皿	86	口径 9.2 器高 2.2 底径 5.6	○体部は直線的に立ち上り端部を尖り気味に収める。 ○高台砂痕有り。	○底部無燃り器具による切り離し未調整。	胎土 良選 焼成 堅 色調 灰色	S D01-2 4/5欠損
小皿	87	口径 9.6 器高 3.0 底径 4.8	○体部は内湾して立ち上り、端部を丸く収める。 ○高台は三角形を呈する。	○底部ナデ調整。 ○高台内に砂が付着。	胎土 良選 焼成 堅 色調 灰色	S D01 B.C-5 117 一部欠損 高台とその附近に墨が付着
山茶碗	88	口径(9.2) 器高 4.95 底径 8.8	○体部は緩やかに内湾して開き、端部を平らに収めている。 ○高台は台形を呈する。	○底部糸切り未調整。	胎土 良選 焼成 堅 色調 灰白色	S D05 738 1/2欠損
山茶碗	89	口径(13.6) 器高 4.2 底径 6.7	○体部は内湾して立ち上ると考えられる。 ○高台は台形を呈する。	○底部糸切り痕ナデ調整。 ○高台にもみ痕を認める。	胎土 良選 白い砂粒を含む 焼成 堅 色調 淡灰色	S D11 S側 741 約3/4欠損
山茶碗	90	口径(15.0) 器高 4.7 底径 7.8	○体部は緩やかに内湾して開く。 ○流れ高台。	○底部はナデしている。	胎土 良選 焼成 堅 色調 灰色	S D11 775 1/2欠損
山茶碗	91	口径 16.8 器高 4.45 底径(9.8)	○体部は緩やかに内湾して開き、口縁部を外反させ、端部を丸く収めている。 ○流れ高台。	○内面全体的に釉薬を流し掛けしているが、発色は不良。 ○底部静止糸切り未調整。	胎土 精選 黒色粒子含む 焼成 堅 色調 灰白色	S D11 775 3/4欠損
山茶碗	92	口径 15.0 器高 5.2 底径 6.2	○体部は直線的に立ち上り口縁部を外反させ肥厚する。 ○端部は平坦面をつくる。 ○流れ高台。	○口縁部及び内面に釉薬が淡緑色に発色。 ○底部糸切り未調整。 ○高台の調整不良。	胎土 長石、礫を含む 焼成 堅 色調 灰色	S D11 12 769 底部外側付近に墨が付着

第5表 山茶碗・小皿観察表(2)

器種	図版 No.	計測値(cm) ()は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
山茶碗	93	底径 7.0	○漬れ高台。	○高台比較的丁寧につくる。	胎土 良選 焼成 緩 色調 灰色	SD11 774 3/4欠損 高台内に墨書き有り
山茶碗	94	口径 14.0 器高 4.2 底径 6.8	○体部は直線的に立ち上り端部を丸く取める。 ○高台なし。	○口縁に自然釉暗緑色に発色。 ○底部余切り未調整。	胎土 良選 焼成 緩 色調 灰色	SD11 14 771 口縁部1/3欠損
山茶碗	95	口径 13.7 器高 5.1 底径 6.6	○体部は直線的に立ち上り口縁部は外反し、肥厚する。 ○端部は平坦面をつくる。 ○高台なし。	○底部余切り未調整。	胎土 良選 焼成 緩 色調 灰色	SD11 10 767 完形
山茶碗	96	口径(15.0) 器高 4.9 底径 6.0	○体部は底部から口縁部まではほぼ直線的に開き、口縁部を肥厚させ端部に平坦面をつくる。 ○高台なし。	○底部余切り未調整。 ○粘土付着。	粗く難、細砂 が顯著に見られるやや歎 焼成 灰色	SD11N側 752 1/2欠損
山茶碗	97	口径 14.4 器高 4.9 底径 7.2	○体部は直線的に立ち上り端部を肥厚させ平面端部をつくる。 ○高台なし。	○口縁部及び内面底部を除き自然釉が淡明緑に発色。 ○底部余切り未調整。	胎土 良選 焼成 緩 色調 灰色	SD11 15 772 1/2欠損
小皿	98	口径 9.1 器高 2.2 底径 4.3	○体部は、やや張り、稜線を持つ。 ○口縁部やわざかに肥厚。	○内側見込み端強いナデ。	胎土 良選 焼成 緩 色調 灰白色	完形 底部墨書き 記号か SD11 S個 790
小皿	99	口径(9.2) 器高 2.1 底径 5.0	○体部はやや直線的に立ち上る。口縁部は丸く收める。 ○高台なし。	○底部ナデ調整。	胎土 良選 微量の隕を含む 焼成 細 色調 明灰色	SD11 N側 742 1/4欠損
小皿	100	口径 8.6 器高 1.9 底径 5.1	○体部は口縁部までやや直線的に立ち上り端部を肥厚させる。 ○高台なし。	○底部余切り未調整。	胎土 良選 微量の隕を含む 焼成 細 色調 灰色	SD11 №1 758 完形
小皿	101	口径 8.4 器高 2.1 底径 5.2	○器高は低く口縁部がやや外反し肥厚する。 ○端部に平坦面をもつ。	○口縁一部に自然釉が暗緑色に発色。 ○底部余切り未調整。	胎土 良選 焼成 緩 色調 灰色	SD11 6 763
小皿	102	口径(10.0) 器高 2.05 底径 7.4	○体部は直線的に開き端部を丸く收めている。 ○底と脇の間、指ナデにより明瞭に凹む。	○底はナデ調整。	胎土 焼成 色調 やや堅 灰色	SD11 743 約1/2欠損

第5表 山茶碗・小皿観察表(3)

器種	図版 No.	計測値(cm) (は推定値)	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考	
小皿	103	口径 器高 底径	8.2 1.7 4.5	◦器高が低く口縁部が大きく外反する。 ◦高台なし。	◦口縁部に淡緑色の釉が発色。 ◦底部無施釉器具による切離し未調整。	胎土 良選 焼成 壓 色調 灰白色	S D11 13 770 口縁部一部欠損
小皿	104	口径 器高 底径	8.2 1.7 4.7	◦体部は底部から胴部中心まで僅かに内湾し、端部を肥厚。	◦底部糸切り未調整。 ◦釉、口縁部に施釉され、淡緑色に発色。	胎土 細緻を含む 焼成 壓 色調 明灰白色	S D11 S 例 753 完形
小皿	105	口径(10.4) 器高 底径(6.0)	8.2 2.4 4.7	◦体部は緩やかに内湾し、口縁部を外反させる。 ◦慣れ高台。	◦底部ナデ調整。 ◦内面全体に均一な明緑色の釉が発色している。	胎土 良選 焼成 壓 色調 灰白色	S D11 746 3/4欠損
小皿	106	口径 器高 底径	8.3 1.9 4.7	◦体部は僅かに内湾して立ち上り口縁部を肥厚させる。	◦釉、暗緑色に発色。 ◦底部糸切り未調整。	胎土 やや粗い 焼成 普通 色調 明灰色	S D11 S 例753 1/4欠損
小皿	107	口径(9.0) 器高 底径(5.8)	8.0 1.4 5.8	◦体部は僅かに内湾して開き口縁がやや肥厚する。	◦底部糸切り未調整。	胎土 やや粗い 焼成 砂粒、細謹等 色調 を多く含む やや堅 灰色	S D11 S 例 741 1/2欠損
小皿	108	口径(8.6) 器高 底径(5.4)	8.6 1.8 5.4	◦体部は底部より浅く直線的に立ち上がり口縁部を肥厚させる。 ◦高台なし。	◦底部糸切り未調整。	胎土 やや粗く謹を 含む 焼成 やや軟 色調 暗灰白色	S D11 S 例741 3/4欠損
山茶碗	109	口径 器高 底径	17.4 5.2 8.5	◦体部は内湾して口縁部をやや外反させ、端部を丸く收める。 ◦輪花有り。 ◦高台は台形を呈する。	◦数ヶ所に付け掛けが施された濃緑色に発色。 ◦底部糸切り未調整。 ◦高台にわら模を認める。	胎土 良選 焼成 壓 色調 明灰色	S D104 2797
I a 山茶碗	110	口径 器高 底径	16.6 5.2 8.5	◦体部は内湾して立ち上がり口縁部を外反させ端部を丸く收める。 ◦慣れ高台。 ◦底部内側が丸みをおびる。	◦高台外側へラナダ。 ◦底部糸切り未調整。 ◦高台の調整はやや不良。 ◦高台にのみ真が認められる。 ◦器面全体に濃緑色の釉が発色。	胎土 良選 焼成 壓 色調 暗灰色	S D104 2450 2452
IV 山茶碗	111	口径 器高 底径	17.3 4.8 8.5	◦体部は直線的に立ち上がり端部を丸く收める。 ◦慣れ高台。 ◦底部内側丸みをおびる。	◦内面全体的に緑色斑点状に自然施釉色。 ◦底部ナデ調整。 ◦高台砂痕有り。	胎土 やや粗く謹を 含む 焼成 やや堅 色調 明灰色	S D104 2442
I a 山茶碗	112	口径 器高 底径	17.8 5.2 8.5	◦体部はやや内湾し口縁部僅かに外反させ端部を丸く收める。 ◦輪花有り。 ◦高台は台形を呈する。	◦口縁部内面に施釉、発色不良。 ◦底部糸切り未調整。	胎土 良選 焼成 やや堅 色調 灰色	S D104 2438 全体の2/3欠損

第5表 山茶碗・小皿観察表(4)

器種	図版 No.	計測値(cm) ()は推定値	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
II 山茶碗	113	口径 5.4 器高 底径 8.4	・体部は緩やかに内湾して立ち上り、口縁部を外反させ端部を丸く收めている。 ・輪花を呈する。4ヶ所。 ・高台は流れ高台。	・無燃り器具による切り離し。 ・釉薬付け掛けが施されるが発色不良。 ・高台に砂擦痕、わら痕を認める。	胎土 やや粗い 焼成 普通 色調 暗灰色	S D104 2444 器形の焼きひずみがある 器面に墨が付着
I a 山茶碗	114	口径 5.3 器高 底径 8.7	・体部は緩やかに内湾して立ち上り口縁部を外反させ端部を丸く收める。 ・輪花4ヶ所。 ・高台は台形を呈する。 ・底部は内面丸みをおびる。	・口縁3ヶ所に付け掛け白色に発色する。 ・底部は静止系切り未調整。 ・高台にも痕を認める。	胎土 良選 焼成 やや堅 色調 灰色	S D104 2448 口縁部一部欠損
I b 山茶碗	115	口径 5.3 器高 底径 8.0	・体部はやや直線的に立ち上り口縁部を外反させ端部をやや尖り気味に收めている。 ・輪花有り。 ・高台は台形を呈する。 ・底部内面、中央がやや高い。	・口縁4ヶ所の釉薬付け掛けにより暗灰色に発色する。 ・底部静止系切り未調整。	胎土 やや粗く難を含む 焼成 普通 色調 灰色	S D104 南土層帶中 2751 器形の焼きひずみが大きい
II 小皿	116	口径 2.8 器高 底径 4.0	・体部はやや内湾して立ち上り口縁部を丸く收めている。	・底部無燃り器具による切り離し未調整。	胎土 精選 焼成 やや軟 色調 灰白色	S E01 276 L/4欠損
小皿	117	口径 1.8 器高 底径 3.8	・体部は内湾して開き、口縁部を外反させ、端部はやや尖り気味に收めている。	・内面に釉薬流し掛かる。 ・底部無燃り器具による切り離し未調整。	胎土 良選 焼成 やや軟 色調 灰白色	S E01 227 L/4欠損
小皿	118	口径 1.65 器高 底径 5.2	・体部は比較的直線的に開き、端部を丸く收める。 ・底から肩まで強い指ナゲで凹む。	・釉は底部のみ発色せず発色は弱いが淡緑色をしている。 ・底部系切り未調整。	胎土 焼成 堅 色調 灰色	S E01 西V248 S E01 V層北252 L/4欠損
小皿	119	口径 2.4 器高 底径 3.8	・体部は内湾して立ち上る。	・自然釉が内面と、口縁部付近に濃緑色に発色。 ・内面に三又ト子痕有り。 ・底部無燃り器具による切り離し未調整。	胎土 精選 焼成 普通 色調 明灰色	S E01 V層北252 L/4欠損
小皿	120	口径 1.8 器高 底径 4.0	・体部直線的に開き口縁部わずかに外反。 ・器高が低く扁平。	・釉が暗緑色に発色。 ・内面に擦付着。 ・底部系切り未調整。	胎土 焼成 堅 色調 暗灰色	S E01 N19 2208 底部墨書き記号か
山茶碗	121	口径(17.2) 器高 底径 5.85 7.6	・体部は緩やかに内湾して開き、口縁部を外反させ端部を丸く收めている。 ・輪花有り。 ・高台は高い台形を呈する。	・釉が暗緑色に発色自然釉。 ・底部ナゲ剥落。 ・高台一部に砂が付着。	胎土 良選 焼成 堅 色調 暗灰色	S E02 井戸枠外835 1/2欠損
山茶碗	122	口径(16.2) 器高 底径 6.0 7.6	・体部は内湾して立ち上り口縁部を外反。 ・高台は台形を呈する。	・底部内面中央から口縁部にかけて釉薬が濃緑色に発色。自然釉。 ・底部無燃り器具による切り離し未調整。	胎土 難を含むが良選 焼成 やや堅 色調 明灰色白色	S E02 北230 1/2欠損

第5表 山茶碗・小皿観察表(5)

器種	図版No.	計測値(cm) ()は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
山茶碗	123	口径 16.4 器高 4.85 底径 7.9	○体部は緩く内湾し、口線を直線状に開き、端部を尖らせて取める。 ○漬れ高台。	○底部無捺り器具による切り離し未調整。	胎土 精選 礫を含む 焼成 色調	S E 02 北230 1/2欠損
山茶碗	124	口径(16.0) 器高 4.85 底径(7.2)	○体部は内湾して立ち上り、口線部をやや外反させ、端部を丸く取めている。 ○高台は台形を呈する。	○底部糸切り未調整。	胎土 砂粒を含むが ほぼ均一 焼成 色調 暗灰色	S E 02 井戸内北側 レキ層上部890 1/2欠損
小皿	125	口径(10.4) 器高 3.5 底径 5.2	○体部は口線部まで内湾させて立ち上り端部を外反。 ○高台は三角形を呈する。	○釉が底部内面に明緑色に発色。 自然釉。	胎土 やや粗く、細砂、礫を含む 焼成 色調 灰白色	S E 02 北230 (抽) 1/4欠損
小皿	126	口径(8.8) 器高 3.15 底径 4.6	○体部是比较的直線的に開く。 ○高台は三角形を呈する。	○底部糸切り未調整。	胎土 良選 焼成 色調 灰白色	S E 02 北229 1/2欠損
小皿	127	口径 9.6 器高 2.8 底径 5.7	○体部は僅かに内湾して開き、口線部をやや外反させる。 ○漬れ高台。	○内面に流し掛け濃緑色に発色。 ○底部不明。	胎土 良選 焼成 色調 明灰色	S E 02 北半井戸外側665 3/4欠損
小皿	128	口径 9.0 器高 2.6 底径 4.3	○体部は内湾して立ち上がり口線部をやや外反させる。	○底部、糸切り未調整。 ○底部に綠黄色の釉が付着。 ○底部内面に釉が斑点状に発色。	胎土 良選 焼成 色調 灰白色	S E 02 井戸内北側疊層上面 890 1/2欠損
小皿	129	底径 5.2	○高台は三角形を呈する。	○底部ナデ調整。	胎土 良選 焼成 色調 灰白色	S E 02北229 S E 02 776 3/4欠損 底部、胴の一 部残存 底部に墨書き有り
小皿	130	口径 9.1 器高 2.9 底径 5.4	○体部僅かに突り出し口線部や や外反。 ○高台は台形状。	○全体に丁寧に作られる。 ○高台の内外、丁寧なナデ。 ○底部切り離しナデのため不明。	胎土 精選 焼成 色調 乳灰色	S E 02井戸内 北側疊層 上面 890 底部墨書き 記号か
小皿	131	底径 4.7	○高台は低い台形状。	○高台内側丁寧なナデ、高台外側のナデ粗雑。 ○釉、濃緑色に発色。 ○高台に粗縫が付着。	胎土 精選 焼成 色調 暗灰色	S E 02井戸内 843 底部墨書き 記号か
山茶碗	132	口径 16.8 器高 5.5 底径 7.2	○体部は内湾して立ち上り端部 を尖ら気味に取めている。 ○輪花4ヶ所施される。 ○高台は台形を呈する。	○高台接合痕明顯に残る。 ○底部無捺り器具による切り離し未調整。	胎土 やや良選 焼成 色調 暗灰色	S E 03井戸内 No.2957 完形

第5表 山茶碗・小皿観察表(6)

器種	図版 No.	計測値(cm) ()は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
山茶碗	133	口径 器高 底径 16.3 5.9 7.2	・体部は内湾して立ち上り、口縁部を外反させ端部を丸く收めている。 ・高台は台形を呈する。 ・輪花有り。	・釉、付け掛けで施され灰白色に発色。 ・底部未切り未調整。 ・高台にもみ痕を認める。	胎土 粗く疊を含む 焼成 色調 暗灰色	S E 03 951 1/2欠損 内面全体に墨が付着
山茶碗	134	口径 器高 底径 16.8 5.5 7.2	・体部は内湾して立ち上り、口縁部をやや外反。 ・輪花4ヶ所施す。 ・高台は台形を呈する。	・釉は暗緑色に発色し4ヶ所の付け掛け。 ・底部にもみ痕を認める。	胎土 やや粗く疊が 顯著 焼成 色調 暗灰色	S E 03 井戸枠内 No.905 完形
山茶碗	135	口径 器高 底径 (8.0) 5.55 (8.6)	・体部は内湾して立ち上り口縁部を外反させる。 ・輪花有り。 ・高台は台形を呈する。	・底部不明。 ・釉は付け掛け灰白色に発色。	胎土 精選 焼成 色調 暗灰色	S E 03 951 1/2欠損
山茶碗	136	口径 器高 底径 16.2 6.3 8.6	・体部は直線的にやや内湾して開き口縁部を外反させ端部をやや尖り気味に收めている。 ・輪花有り。 ・高台は台形を呈する。	・釉は淡灰色に発色。 ・4ヶ所の付け掛け。 ・底部静止未切り未調整。	胎土 疊を多く含む 焼成 色調 灰色	S E 03 井戸枠内 905 1/4欠損
山茶碗	137	口径 器高 底径 16.5 5.3 6.8	・体部は内湾して立ち上り口縁部を外反させ端部を丸く收めている。 ・輪花4ヶ所施されている。 ・高台は台形を呈する。	・口縁部に釉裏掛け掛け。 ・底部に重ね焼き痕有り。 ・底部無燃り器具による切り離し未調整。	胎土 良選 焼成 色調 暗灰色	S E 03 井戸枠内 No.8 959 1/4欠損
山茶碗	138	口径 器高 底径 16.6 6.4 7.8	・体部は内湾して立ち上り、口縁部を外反させ、端部を丸く收めている。 ・高台は台形を呈する。	・釉は濃緑色に発色、自然釉。 ・底部ナゲ調整。 ・高台・内面底部に重ね焼き痕有り。	胎土 精選 焼成 色調 暗灰色	S E 03 951 1/4欠損
山茶碗	139	口径 器高 底径 16.6 6.2 7.3	・体部は内湾して立ち上り口縁部をやや外反。 ・高台は台形を呈する。 ・輪花4ヶ所施される。	・内面底部を駆き釉が濃緑色に発色、自然釉。 ・内面底部に重ね焼き痕。 ・底部ナゲ調整。 ・高台にもみ痕を認める。	胎土 精選 焼成 色調 暗灰色	S E 03 井戸枠内 No.9 960 1/4欠損
小皿	140	口径 器高 底径 8.6 3.0 4.2	・体部は内湾して立ち上り、口縁部をやや外反気味に收めている。 ・滑れ高台。	・底部ナゲ調整。	胎土 良選 焼成 色調 滑乳白色	S E 03 951 1/4欠損 内側疊浮き出ず
小皿	141	口径 器高 底径 9.0 2.9 5.2	・体部は内湾して立ち上り端部を丸く收めている。 ・高台は台形を呈する。	・内面に部分的に濃緑色釉発色。 ・底部未切り未調整。 ・底部に重ね焼き痕有り。	胎土 精選 焼成 色調 灰色	S E 03 951 1/4欠損 外面にすずが付着
小皿	142	口径 器高 底径 8.6 2.7 4.4	・体部は内湾して立ち上り口縁部を外反させ、端部を尖り気味に收めている。 ・滑れ高台。	・暗褐色の釉、僅かに発色。 ・底部ナゲ調整。 ・高台にもみ痕有り。	胎土 精選 焼成 色調 黒色粒子含む 暗灰色	S E 03 951 1/4欠損

第5表 山茶碗・小皿観察表(7)

器種	図版No.	計測値(cm) (以推定値)	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
小皿	143	口径 8.15 器高 3.0 底径 4.5	○部は内湾して立ち上り、口縁部端をやや外反気味に收めている。 ○漬れ高台。	○灰白色に釉がかかる。 ○底部ナデ調整。	胎土 良選 礫を含む 焼成堅 色調乳白色	S E 03 井戸杵 内 905 光形
小皿	144	口径(9.0) 器高 2.6 底径 4.0	○部は僅かに内湾して開き端部をやや尖り気味に收めている。 ○高台は三角形を呈する。	○胸部内面に釉が僅かに見られる。 ○底部糸切り未調整。	胎土 良選 焼成堅 色調明灰色	S E 03 井戸杵 内 962 約3/4欠損 底部に墨書き
小皿	145	口径 8.6 器高 2.9 底径 4.4	○部は内湾して立ち上り口縁部端を丸く收めている。 ○高台は台形を呈する。	○釉、内面全体に発色は不良。 ○底部糸切り未調整。	胎土 良選 礫を含む 焼成堅 色調暗灰色	S E 03 951 1/4欠損
小皿	146	口径 9.6 器高 2.6 底径 4.9	○部はやや内湾して立ち上り口縁部端を丸く收めている。	○底部糸切り痕未調整。	胎土 良選 焼成軟 色調暗灰色	S E 03 井戸杵 内 約1/2欠損
小皿	147	口径 9.1 器高 3.2 底径 4.8	○部が張り口縁やや外反。 ○高台は三角形を呈する。	○内面に淡緑色。 ○高台の内外、丁寧なナデ。 ○底部回転糸切り痕あり。	胎土 良選 焼成堅 色調灰色	S E 03 951 黒褐色 底墨書き 記号か
山茶碗	148	口径(17.8) 器高 5.8 底径 7.8	○部は内湾して立ち上り口縁部を外反させる。 ○漬れ高台。	○底部無捺り器具による切り離し未調整。	胎土 砂礫を含むが 良選 焼成堅 色調灰色	S E 03 951 約3/4欠損 底部に墨書き有り
山茶碗	149	底径 7.6	○部は内湾して立ち上る。 ○高台は台形を呈する。	○底部無捺り器具による切り離し、のちナデ調整。	胎土 長石含む 良選 焼成堅 色調暗灰色	S E 03 951 体部上半欠損 内外ともに墨痕あり 底部墨書
山茶碗	150	口径(15.0) 器高(5.5) 底径(7.4)	○部は内湾して立ち上り、口縁部をやや外反させ縁部を丸く收めている。 ○輪花有り。 ○高台は台形を呈する。	○釉、内面一部斑点状に発色。	胎土 良選 焼成堅 色調暗灰色	S E 03 951 底部に墨書き有り 3/4欠損
山茶碗	151	口径 16.3 器高 5.7 底径 7.85	○部は内湾して立ち上り口縁部をやや外反させ縁部を丸く收めている。 ○輪花4ヶ所施される。 ○高台は台形を呈する。	○釉、口縁部から胴下部にかけて、3ヶ所付け掛け発色は弱くやや暗緑色。 ○高台の接合調整不良。 ○底部は無捺り器具による切り離し未調整。	胎土 1mm前後の礫 と細砂含む 焼成堅 色調暗灰色	S E 03 051 光形 底部に墨書き有り
山茶碗	152	底径 7.4	○口縁まで直線上に開く。 ○高台は台形を呈する。	○釉、内面底部に僅かに見られる。 ○底部ナデ調整。	胎土 精選 焼成普通 色調暗灰色	S E 03 951 側部欠損 底部に墨書き有り

第5表 山茶碗・小皿観察表(B)

器種	底版 No.	計測値(cm) ()は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
山茶碗	153	底径 8.6	○漬れ高台。	○軸、腹部に明緑色に発色。 ○底部内面に重ね焼き痕。 ○底部ナゲ調整。 ○高台に砂付着。	胎土 精選 焼成 普通 色調 灰色	S E 03 951 副部上欠損 底部に墨書き有り 「上」
山茶碗	154	底径 7.8	○高台は台形を呈する。	○底部糸切り未調整。 ○高台にもみ痕有り。	胎土 良選 焼成 堅 色調 灰色	S E 03 井戸枠内 副部欠損 底部に墨書き有り
山茶碗	155	底径 7.4	○高台は台形を呈する。	○底部糸切り未調整。	胎土 良選 焼成 やや堅 色調 灰色	S E 03 井戸枠内 No.1 956 副部欠損 内面に墨付着 底部と肩下部 に墨書き有り
山茶碗	156	底径 7.4	○高台は台形を呈する。	○内面底部を除き軸が暗緑色に 発色。 ○底部ナゲ調整。 ○高台にもみ痕有り。	胎土 良選 焼成 やや堅 色調 灰色	S E 03 井戸枠内 No.10 961 副部欠損 底部に墨書き有り 「不」
小皿	157	口径 9.7 器高 3.15 底径 5.0	○体部はやや内湾して立ち上り 口縁部を直線状に開き、端部 を丸く取めている。 ○高台は三角形を呈する。	○軸、暗緑色斑点に発色。 ○底部ナゲ調整。 ○高台にもみ痕有り。 ○内面一部に多量の細砂が付着 している。	胎土 精選 焼成 堅 色調 灰色	S E 03 951 完形 底部に墨書き有り
小皿	158	口径 9.0 器高 2.8 底径 4.6	○体部は大きく内湾し口縁部は やや外反する。 ○高台は低い漬れ高台。	○内面全体に軸がかかるが発色 不良。 ○底部糸切り未調整。	胎土 精選 焼成 堅 色調 灰白色	底部に墨書き有り 「上」
小皿	159	口径 9.55 器高 4.9 底径 2.7	○体部は内湾して立ち上り端部 は尖らせて收めている。 ○漬れ高台。	○軸、口縁部内面に緑色斑点状 に発色。 ○底部無燃り器具による切り離し未調整。	胎土 精選 焼成 やや堅 色調 灰色	S E 03 951 1/4欠損 底部に墨書き有り 「御」「郷」か
小皿	160	口径 8.5 器高 2.8 底径 4.7	○体部は内湾して立ち上り口縁 部を外反させ端部を丸く收め ている。 ○高台は台形を呈する。	○軸、底部内間に極弱いが茶褐色 に発色。 ○底部ナゲ調整。	胎土 良選 焼成 黒色粒子を含む 色調 墓灰色	S E 03 951 1/4欠損 底部に墨書き有り
山茶碗	161	底径 7.4	○体部は内湾する。 ○高台は低い漬れ高台。	○底部糸切り未調整。 ○高台にもみ痕を認める。	胎土 精選 焼成 堅 色調 灰白色	S E 1012371 体部外面に墨 が付着
山茶碗	162	底径 7.0	○体部は直線的に立ち上がる。 ○漬れ高台。	○底部無燃り器具による切り離し未調整。 ○底部高台内はヘラナゲ。	胎土 磨を含む良選 焼成 堅 色調 灰色	S E 101 底枠 上面 2779 底部に墨書き有り

第5表 山茶碗・小皿観察表(9)

器種	図版 No.	計測値(cm) ()は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
山茶碗	163	底径 7.4	◦体部直線的に立ち上る。 ◦高台は低い三角形状。	◦高台の内外、丁寧なナデ。 ◦底部無擦り器具による切り離し。 ◦高台に乾燥時の圧痕有り。 ◦重ね焼きの凹みあり。	胎土 良選 確少量含む 焼成 色調 やや堅い 暗灰白色	S E 101 No.88 2409 底辺1/2欠損 底部墨書き有り (記号か?)
山茶碗	164	底径 7.9	◦体部は直線的に立ち上がる。 ◦高台は三角形を呈する。	◦外周ノタ目が滑らかに調整される。 ◦底部ナデ調整。	胎土 良選 焼成 色調 堅い 灰色	S E 101 No.3 1962 底辺1/2欠損 底部墨書き有り (記号か?)
山茶碗	165	底径 8.1	◦体部は直線的に立ち上がる。 ◦高台は台形を呈する。	◦底部不明。	胎土 精選 焼成 坚い 色調 灰色	S E 101 No.46 2302 糸1/2欠損 底部に墨書き有り 「一」
山茶碗	166	底径 8.1	◦高台は台形を呈する。	◦底部ナデ調整。 ◦体部外面一部に釉薬発色、濃緑色。 ◦高台に砂が付着。	胎土 精選 焼成 坚い 色調 明灰色	S E 101 底辺上面 2779 底部に墨書き有り 体部内面墨が付着
山茶碗	167	底径 7.8	◦体部は直線的に立ち上る。 ◦高台は三角形を呈する。	◦底部ナデ調整。	胎土 確を含む 焼成 色調 堅い 暗灰色	S E 101 2778 底部に墨書き有り
山茶碗	168	底径 7.8	◦高い台形状の高台。	◦高台の内外丁寧なナデ。 ◦底部ナデ、切り離し痕不明。 ◦乾燥時の圧痕、高台に有り。	胎土 良選 焼成 やや軟 色調 灰色	S E 101 112 2511 底辺墨書き 記号か
山茶碗	169	底径 7.5	◦高台は台形を呈する。	◦底部はナデ調整。	胎土 良選 焼成 色調 堅い 灰色	S E 101 2375 底部に墨書き有り 高台1/2欠損 記号か
山茶碗	170	底径 7.6	◦高台は台形を呈する。 ◦体部内面中心部はやや凹む。	◦底部高台の内側はヘラナデ中 心部をヘラ削り。 ◦底部無擦り器具による切り離し未調整。 ◦体部内面底部を除き、釉薬発 色、濃緑色。	胎土 精選 焼成 色調 堅い 灰色	S E 101 No.63 2386 体部外面に墨 付着 底部に墨書き有 り 「三」
山茶碗	171	底径 7.5	◦濃れ高台。	◦底部ナデ調整。	胎土 良選 焼成 色調 堅い 灰色	S E 101 2271 高台に砂礫が 付着 底部に墨書き有 り
小皿	172	口径 8.9 器高 1.8 底径 4.0	◦体部はやや内湾し、端部を丸く収める。 ◦接地面は中心に向いやや凹む。	◦内面全体に釉が暗緑色に発色。 ◦底部糸切り未調整。	胎土 良選 焼成 色調 堅い 灰色	S E 01 No.19 2208 口縁1/5欠損 底部に墨書き有 り

第5表 山茶碗・小皿観察表(1)

器種	図版 No.	計測値(cm) ()は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考	
小皿	173	口径 器高 底径	8.7 2.5 4.3	・体部は直線的に立ち上り端部 は丸く取める。 ・接地面は平。	・底部は無撚り器具による回転 切り離し未調整。 ・体部内面、黄緑色釉が僅かに 発色。	胎土 良選 焼成 堅 色調 暗灰色	S E 101 No.15 2204 体部外面にす すが付着 墨書き有り 不明
小皿	174	口径 器高 底径	8.4 2.3 4.0	・体部は直線的に立ち上り端部 は丸く取める。 ・接地面は平。	・底部糸切り未調整。	胎土 白色多く含 む 焼成 堅 色調 明灰色	S E 101 No.66 2389 底部に墨書き有 り 不明
小皿	175	口径 器高 底径	8.7 1.9 4.3	・体部は直線的に立ち上り端部 は丸く取める。 ・接地面はやや凹む。 ・体部内面にノタ目が明瞭に残 る。	・内面底部の上より端部まで釉 が暗緑色に発色。 ・底部無燃り器具による回転切 り離し未調整。	胎土 精選 焼成 堅 色調 暗灰色	S E 101 底桿上面 2779
小皿	176	口径 器高 底径	8.7 2.2 3.8	・体部はやや内湾し、端部は丸 く取れる。 ・体部内面にはノタ目が強い模 が見られる。	・底部は無撚り器具による回転 切り離し未調整。	胎土 良選 焼成 堅 色調 暗灰色	S E 101 No.53 墨書き有り
小皿	177	口径 器高 底径	8.6 2.6 4.2	・体部は直線的に立ち上り端部 は丸く取れる。 ・接地面はやや凹む。	・底部は無撚り器具による切り 離し未調整。	胎土 良選 焼成 堅 色調 灰色	S E 101 No.38 2294 口縁1/3欠損 底部に墨書き有
小皿	178	口径 器高 底径	8.7 2.7 4.7	・体部は直線的に立ち上り端部 は丸く取れる。 ・接地面は平。	・底部無燃り器具による回転切 り離し未調整。	胎土 良選 焼成 堅 色調 灰色	S E 101 2413
小皿	179	口径 器高 底径	8.8 2.1 4.6	・体部はやや内湾し、端部は丸 く取れる。 ・接地面は中心に向いやや凹ん でいる。	・底部ナデ調整。	胎土 良選 焼成 堅 色調 灰色	S E 101 No.37 2293 底部1/2 口縁は1/2欠損 墨書き
小皿	180	口径 器高 底径	9.0 2.1 4.8	・体部は直線的に立ち上る。	・底部糸切り未調整。	胎土 精選 焼成 堅 色調 灰褐色	S E 101 2780
小皿	181	口径 器高 底径	8.6 2.0 4.0	・体部はやや内湾し、端部を丸 く取める。 ・接地面は平。	・糸ぬき取り痕有。 ・糸切り痕未調整。	胎土 白色多く含 む 焼成 堅 色調 灰色	S E 101 2777 LJ縁1/2欠損 底部に墨書き有 り 「二」
小皿	182	口径 器高 底径	8.6 2.2 4.3	・体部はやや内湾し、端部は丸 く取れる。 ・接地面は平。	・外面、体部中より端部及び内 面底部を除き、淡緑釉が発色。 ・底部、無燃り器具による回転 切り離し未調整。	胎土 精選 焼成 堅 色調 明灰色	S E 101 No.7 1958 底部に墨書き有 り

第5表 山茶碗・小皿觀察表(1)

器種	図版 No.	計測値(cm) ()は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考	
小皿	183	口径 器高 底径	9.0 2.4 4.1	○体部はやや内湾し、端部を丸く収める。 ○接地面は平。	○底部糸ぬき取り痕の段有。 ○糸切り痕未調整。	胎土 良選 焼成 堅 色調 灰色	S E 101 2203 口縁1/2欠損 底部に墨痕有り 「口」
小皿	184	口径 器高 底径	8.7 2.2 4.0	○体部は内湾し、端部を丸く収める。 ○接地面は中心に向いや凹む。	○底部糸切り未調整。 ○内面全体に釉が濃緑色に発色。	胎土 良選 焼成 堅 色調 暗灰色	S E 101 2781 底部に墨痕有り ほぼ完形
山茶碗	185	口径(15.0) 器高 底径(7.6)	4.9	○体部は底部から肩下部まで、僅かに内湾し、口縁部まで直線的に開き、端部を外反させ丸く収めている。 ○高台は三角形を呈する。	○内面に釉発色(白色)。	胎土 良選 焼成 堅 色調 灰色	S P 11N側 751
山茶碗	186	口径(13.0) 器高 底径(7.1)	4.4	○体部はやや内湾して立ち上り端部は丸く収める。	○内面に斑点状の釉発色。 ○底部切り離し不明。	胎土 精密 焼成 堅 色調 灰白色	S P 367 823 2/3欠損
山茶碗	187	口径 14.6 器高 5.0 底径(7.2)	4.2	○体部は内湾して立ち上り、口縁部をやや外反させる。 ○高台は三角形を呈する。	○内面全体に斑点状の釉発色。 ○底部切り離し未調整。	胎土 精選 焼成 堅 色調 灰白色	S P 11N側 751 2/3欠損
小皿	188	口径 8.1 器高 4.2 底径 5.4	4.1	○体部は口縁部まで開き端部を肥厚させる。	○釉、一部淡緑色に発色、自然釉。 ○底部糸切り未調整。	胎土 やや粗 焼成 やや堅 色調 暗灰色	S P 13 479 約1/2欠損
小皿	189	口径(8.4) 器高 3.3 底径 4.3	4.2	○体部は内湾して立ち上り、口縁部を外反させ端部を尖り気味に収めている。 ○高台は三角形を呈する。	○底部ナデ調整。	胎土 良選 焼成 やや堅 色調 明灰色	S P 02 № 3 496 約3/4欠損
小皿	190	口径 8.4 器高 2.2 底径 4.2	4.1	○体部は内湾して立ち上り端部を丸く収めている。	○底部ナデ調整。	胎土 良選 焼成 堅 色調 灰白色	S P 283 柱668 1/4欠損
小皿	191	口径 7.5 器高 1.7 底径 4.0	4.0	○体部是比较的直線的に開き、端部をやや尖り気味に収めている。	○底部糸切り未調整。 ○内面底部にロクロ回転痕有り。	胎土 良選 焼成 やや軟 色調 暗淡赤褐色	S P 168 548 約1/4欠損
小皿	192	口径 8.9 器高 2.6 底径 4.6	4.6	○体部は内湾して立ち上り口縁部を丸く収めている。	○底部ナデ調整。	胎土 良選 焼成 やや堅 色調 灰色	C Z IV層153 完形

第5表 山茶碗・小皿観察表(1)

器種	図版 No.	計測値(cm) ()は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
山茶碗	193	口径 16.0 器高 5.15 底径 8.2	・体部はやや内湾して立ち上り 口縁部を外反させ、端部を丸く収める。 ・高台は台形を呈する。	・底部静止糸切未調整。 ・付け掛けによる灰白色の輪が見られる。	胎土 精選 焼成 堅 色調 灰白色	C5 IV層053 (抽)
山茶碗	194	口径 16.7 器高 6.0 底径 7.3	・体部は内湾して立ち上り口縁部をやや外反させ端部を丸く収めている。 ・高台は高台。	・高台にのみ痕を認める。	胎土 均一だが穢を含む 焼成 色調 黄灰色	B6 S788 1/4欠損
山茶碗	195	口径(17.6) 器高 5.2 底径 7.6	・体部は、やや直線的に立ち上り端部は丸く収める。 ・高台は三角形を呈する。 ・体部内面中央部はやや凸んでいる。 ・輪花有り。	・体部内外に釉薬が発色、淡緑色。 ・底部糸切り未調整。	胎土 精選 焼成 堅 色調 灰色	C8 V層上面 223 全体の2/3欠損
山茶碗	196	口径 16.7 器高 5.0 底径 7.2	・体部は、やや内湾して立ち上り端部は丸く収める。 ・高台は台形を呈する。	・体部内面に釉薬が暗緑色の斑点状に発色する。 ・底部ナデ調整。	胎土 精選 焼成 堅 色調 灰白色	C6 V層上面 201
山茶碗	197	口径(16.7) 器高 4.7 底径 7.8	・体部は口縁部から脣部にかけて内湾し、口縁部を外反させ端部を丸く収めている。 ・底と脣の間の指ナゲが明瞭に凹む。 ・潰れ高台。	・釉、口縁部外面と脣部一部に施され、淡緑色に発色。 ・底部はナデ調整。 ・底部に細砂付着。	胎土 均一だが穢を含む 焼成 やや堅 色調 明灰色	B5 IV層 039 約3/4欠損。
山茶碗	198	口径(12.7) 器高 4.1 底径 6.8	・体部はやや直線的に立ち上り、端部を丸く収める。	・底部糸切り未調整。	胎土 良選 焼成 堅 色調 灰白色	V層 1016 約2/3欠損 底部に墨が付着
山茶碗	199	口径(16.2) 器高 5.2 底径 7.4	・体部はやや直線的に立ち上り口縁を丸く収める。 ・潰れ高台。	・底部は無燃り器具による切り離し未調整。 ・高台にのみ痕を認める。	胎土 良選 焼成 堅 色調 明灰色	1084 口縁部1/2欠損
山茶碗	200	口径 13.8 器高 3.9 底径 6.6	・体部は脣部から口縁部にかけて直線的に立ち上り端部をやや丸く収めている。 ・高台なし。	・底部無燃り器具による切り離し未調整。	胎土 精選 長石を含む 焼成 堅 色調 灰白色	018 口縁1/2欠損
小皿	201	口径 9.6 器高 3.2 底径 4.5	・体部は内湾して立ち上り口縁部をやや外反させ、端部を丸く収めている。 ・高台は台形を呈する。	・釉、内面部を餘り施す淡緑色に発色、自然釉。 ・底部ナデ調整。 ・底部一部に細砂が付着。 ・底部に重ね焼き痕有り。	胎土 良選 やや堅 焼成 堅 色調 灰白色	C8 V層下 784 1/4欠損
小皿	202	口径 11.0 器高 3.6 底径 4.9	・体部はやや内湾して立ち上り端部を丸く収める。 ・高台は台形を呈する。	・底部ナデ調整。 ・高台にもみ痕有り。	胎土 精選 焼成 堅 色調 灰白色	019 口縁1/2欠損

第5表 山茶碗・小皿観察表①

器種	図版 No.	計測値(cm) ()は推定値	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
小皿	203	口径 9.5 器高 3.0 底径 5.4	・体部はやや直線的に立ち上り ・端部を丸く収める。	・体部の内面底部にロクロの回転痕有り。 ・高台底部に砂痕有り	胎土 精選 焼成 壓 色調 灰白色	B6 IV層 059 ほぼ光形
小皿	204	口径 10.2 器高 3.2 底径 5.6	・体部はやや内湾して立ち上り ・端部は丸く彎めて収める。 ・高台は台形を呈する。	・内面には緑黄色の釉が発色する。 ・底部余切り痕未調整。	胎土 精選 焼成 壓 色調 灰白色	C5V層上106
小皿	205	口径 8.5 器高 2.7 底径 4.8	・体部はやや内湾して立ち上り ・口縁部を外反させ、端部を厚く収める。 ・高台は台形を呈する。	・内面底部を除き一部に暗灰色の釉がかかる。 ・底部ナデ調整。	胎土 精選 焼成 壓 色調 灰白色	B7V上113 (抽) 口縁1/2欠損
小皿	206	口径 9.4 器高 2.7 底径 4.4	・体部はやや内湾して立ち上り ・口縁部を外反させ、端部を厚く収める。 ・流れ高台。	・全体に濃緑色の釉が斑点状に発色。 ・底部ナデ調整。	胎土 精選 焼成 壓 色調 灰白色	1094 約2/3欠損
小皿	207	口径 9.4 器高 2.4 底径 5.3	・体部はやや内湾して立ち上り ・端部は丸く収める。 ・高台は三角形を呈する。	・底部ナデ調整。	胎土 精選 焼成 壓 色調 灰色	B8IV144 約2/3欠損
小皿	208	口径 9.8 器高 3.0 底径 4.6	・体部は内湾して立ち上り端部は丸く収める。 ・高台は台形を呈する。	・底部不明。 ・高台に砂付着。	胎土 精選 焼成 壓 色調 灰白色	表採 845 約1/2欠損
小皿	209	口径 8.2 器高 2.2 底径 4.3	・体部は直線的に立ち上り端部は丸く収める。 ・高台は台形を呈する。	・底部ナデ調整。	胎土 精選 焼成 壓 色調 灰白色	表土 052 約2/3欠損
小皿	210	口径 8.5 器高 2.5 底径 4.3	・体部は内湾して立ち上り口縁部をやや外反させ端部を尖り収める。	・体部内面全体に釉が濃緑色の斑点状に発色。 ・底部余切り未調整。	胎土 精選 焼成 壓 色調 灰白色	B C11VI層 1378
小皿	211	口径 8.1 器高 1.9 底径 3.4	・体部はやや内湾して立ち上り ・口縁部を外反させ端部を平めて収める。	・底部余切り未調整。	胎土 精選 焼成 壓 色調 灰白色	表土 (抽) 074 約2/3欠損
小皿	212	口径(7.4) 器高 2.7 底径 3.6	・体部は削部中心まで直線的に立ち上り、口縁部を丸く収めている。	・底部余切り未調整。 ・釉、内面口縁部一部に緑黄色に発色、自然釉。	胎土 やや粗い 焼成 壓 色調 暗灰白色	C8IV層149 (2) 1/4欠損

第5表 山茶碗・小皿観察表(1)

器種	図版 No.	計測値(cm) ()は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
小皿	213	口径 8.9 器高 2.37 底径 4.95	・体部はやや直線的に開き、端部を肥厚させる。	・釉薬灰白色に発色、自然釉。 ・底部無燃り器具による切り離し未調整。	胎土 良選 焼成 堅 色調 灰白色	B6V745 元形
小皿	214	口径 8.3 器高 2.7 底径 4.5	・体部は直線的に口縁部をやや外反させ、端部を尖り気味に收めている。	・体部内面全体に暗緑色の釉が発色している。 ・底部無燃り器具による切り離し未調整。	胎土 精選 焼成 堅 色調 灰白色	B6 164IV層 約1/2次損
小皿	215	口径 8.5 器高 2.8 底径 2.8	・体部はやや直線的に立ち上り、端部はやや尖り気味に收める。	・底部無燃り器具による切り離し未調整。	胎土 精選 焼成 堅 色調 灰白色	C8IV層149 ①
小皿	216	口径 8.4 器高 2.1 底径 4.6	・体部は腰やかに内湾し口縁部端をやや尖り気味に收めている。	・底部無燃り器具による切り離し未調整。	胎土 やや粗く微量 の砂を含む 焼成 色調 明灰白色	C6C7混V747 1/4次損
小皿	217	口径 8.5 器高 2.1 底径 4.9	・体部はやや直線的に開き口縁部端を尖り気味に收めている。	・底部糸切り調整。	胎土 良選 焼成 やや軟 色調 灰白色	C8IV層154 1/4次損
小皿	218	口径 8.0 器高 2.1 底径 6.0	・体部はやや内湾して立ち上り ・口縁部端を丸く收めている。 ・高台なし。	・底部糸切り未調整。	胎土 精選 焼成 やや軟 色調 横褐色	C6V層492 1/4次損
小皿	219	口径 8.4 器高 2.5 底径 3.7	・体部は直線的に立ち上り端部は丸く取める。	・内面に緑色の釉が斑点状に発色。 ・底部ナゲ調整。	胎土 精選 焼成 堅 色調 灰白色	表土027 約1/2次損
小皿	220	口径 8.1 器高 1.65 底径 4.5	・体部は直線的に開き端部を肥厚。	・底部糸切り未調整。 ・内面の底部から肩部にかけての一部に釉が発色、淡緑色自然釉。	胎土 良選 焼成 堅 色調 灰白色	B6V489 1/4次損
小皿	221	口径 8.3 器高 1.9 底径 3.9	・体部はやや内湾して立ち上り ・口縁部を外反させ、端部を丸く收める。	・底部糸切り未調整。	胎土 精選 焼成 堅 色調 灰白色	C8IV層152 口縁2/3次損
小皿	222	口径 8.8 器高 2.1 底径 4.4	・体部は中位よりやや外反させ、端部を丸く收める。	・底部無燃り器具による切り離し未調整。 ・内面一部に釉が緑色に発色。	胎土 精選 焼成 堅 色調 灰白色	排水溝 1007 約1/3次損

第5表 山茶碗・小皿観察表⑨

器種	図版 No.	計測値(cm) (注)は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考	
小皿	223	口径 器高 底径	9.2 2.0 4.8	○体部は、胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上り、端部は丸く収める。	○底部無燃り器具による切り削し未調整。	胎土 精選 焼成 堅 色調 灰色	018
小皿	224	口径 器高 底径	8.2 1.7 5.0	○体部は胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上り端部は丸く収める。	○底部糸切り未調整。	胎土 精選 焼成 堅 色調 灰白色	C6IV082 口縁1/2次損
小皿	225	口径 器高 底径	8.4 2.1 4.95	○体部はやや直線的に開き口縁部端を丸く収めている。 ○軸、口縁部に濃緑色の斑点状に発色。	○底部無燃り器具による切り削し未調整。 ○軸、口縁部に濃緑色の斑点状に発色。	胎土 精選 焼成 堅 色調 灰白色	B8IV層145 1/4次損
小皿	226	口径 器高 底径	8.0 1.9 4.4	○体部は胴部より口縁部にかけて直線的に立ち上り端部は丸く収める。	○底部無燃り器具による切り削し未調整。	胎土 精選 焼成 堅 色調 灰白色	C4V層053 (抽) 約3/4次損

第6表 灰釉陶器観察表

器種	図版 No.	計測値(cm) (注)は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考	
碗	77	口径 器高 底径	15.2 4.9 6.6	○体部は、胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上り端部を丸くや削めて収める。 ○高台は台形を呈するが、やや潰れている。 ○底部内面は丸味をおびる。	○底部糸切り未調整。 ○底部内面に重ね燒痕有り。 ○モミ痕が認められる。 ○口縁部に胎が見られるが発色不良。	胎土 精選 焼成 堅 色調 灰白色	B7V層上消拂 184
碗	78	口径 器高 底径	13.5 4.3 6.4	○体部はやや内湾して立ち上り端部を丸くや削めて収める。 ○高台は三角形。 ○底部内面は丸味をおびる。	○底部内面に重ね燒痕有り。 ○底部糸切り未調整。 ○灰緑色に胎が発色。 ○付け括れ。	胎土 精選 焼成 堅 色調 灰白色	B6IV層164 口縁3/4次損
碗	79	口径 器高 底径	13.3 4.2 6.4	○体部は緩やかに内湾して立ち上り口縁部を外反させ丸く収める。 ○高台は低い三角形を呈する。 ○底部内面丸みをおびる。	○底部静止糸切り。 ○底部内外部共、重ね焼き痕有り。	胎土 良選 焼成 堅 色調 暗灰色	B6IV層089
碗	80	口径 器高 底径	12.9 3.4 7.0	○体部は直線的に立ち上り口縁部を外反させている。 ○高台は三角形を呈する。	○口縁部及び内面部付近に濃緑色の斑点状に自然動が差色。 ○底部糸切り未調整。	胎土 良選 焼成 堅 色調 灰色	表土 D52 1/2次損
碗	81	口径 器高 底径	13.7 3.8 6.6	○体部は内湾して立ち上り口縁部をやや外反させる。 ○高台三三角形を呈する。 ○底部内面丸味をおびる。	○糸切り未調整。	胎土 長石、隕合む 焼成 良 色調 灰色	B ~ 10 S F J112 1031
碗	82	口径(11.6) 器高 底径	3.35 6.5	○高台は低い三角高台。 ○口縁部を外反させ端部を丸く収める。	○底部糸切り未調整。 ○体部内面に胎素が淡緑色に発色。 ○体部内面底部に重ね焼き痕。	胎土 良好 焼成 堅 色調 暗灰色	D7 113 2/3次損

は10.5cmを計る。体部上位に2本の太い並行沈線を巡らしている。胎土、色調ともに山茶碗・小皿に類似している。無高台化した最初の段階の小皿に伴うものと思われる。

第2節 施釉陶器

A・灰釉陶器（第7図77～82）

灰釉陶器も須恵器と同じく包含層からの出土であり、遺構からのものは認められなかった。79を除いて77・78・80～82が底部に回転糸切り痕を残す。80を除き、色調は暗灰色で、内面には重ね焼の温度差によって生じた焼成痕が明瞭に残る。11世紀代の灰釉陶器であろうと推定される。

B・中世陶器（第13図227・229～231）

中世の施釉陶器といえるものは僅かであり、図示したのは破片も含め4点であった。227はSD01の底から出土した渥美窯産の大型壺であり、胴上部の半分が出土している。口縁部径が37.8cmであり、頸部で口縁部と胴部を接合している。口縁部が大きく外反し、胴上部は球状を呈している。胴表面には叩目が残り、頸から口縁にかけて横ナデ調整がみられ、内面には輪積み痕を調整した指頭圧痕が明瞭に残っている。

胴上位には、焼成前のヘラによる線刻があり、漢数字の「七」や、花・草木をモチーフとした文様が施されている。頸部には全周しないが横位のヘラによる沈線と、それに直行する櫛描きが3～5mmの間隔で刻まれている。

229は古瀬戸中期の鉄釉で、印花文を施し、230・231は灰釉で、231は見込部に櫛描文が認められる。229・230は古瀬戸中期の印花文壺の破片である。

中世陶器といえるのは極僅かであり、かつ破片を接合しても全体の形状が知れるものはなかった。

第3節 磁器

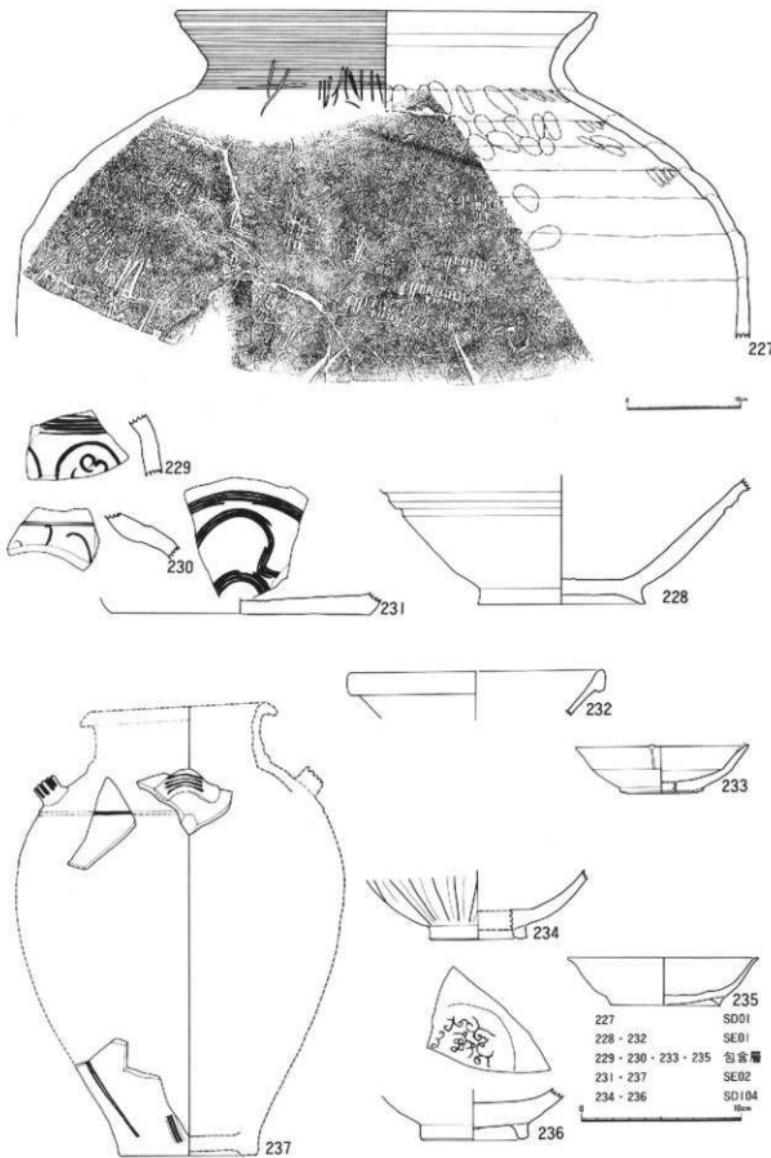
本遺跡から出土した磁器は、中国からの輸入磁器であり、12世紀前半～16世紀に比定されるものである。出土量は極僅かであり、井戸と包含層からの出土である。232は井戸SE01から出土した口縁部が肥厚する白磁碗で12世紀前半と思われる。またこれと同一時期と思われるのが白磁四耳壺の237であり、井戸SE02の底から出土している。破片であり実測図として図示できないため、全体の形態を破線で推定し、出土したものを置いた。4本の沈線をもつ耳と、その付近と思われる横位の沈線をもつ肩部片、2本の垂下する沈線のある底部破片が出土している。233・235も白磁の皿で、233は口唇部を尖り気味にし輪花を施す瓈皿で、12世紀に比定される。235は16世紀のものである。

青磁は、12世紀～13世紀前半の同安窯に比定される画花文、櫛描文の碗の破片も出土している。龍泉窯系の蓮弁文碗もみられる。234は12世紀に位置付けられるものである。また、236は元～明初期の清磁碗で、見込部に画花文をあしらう。

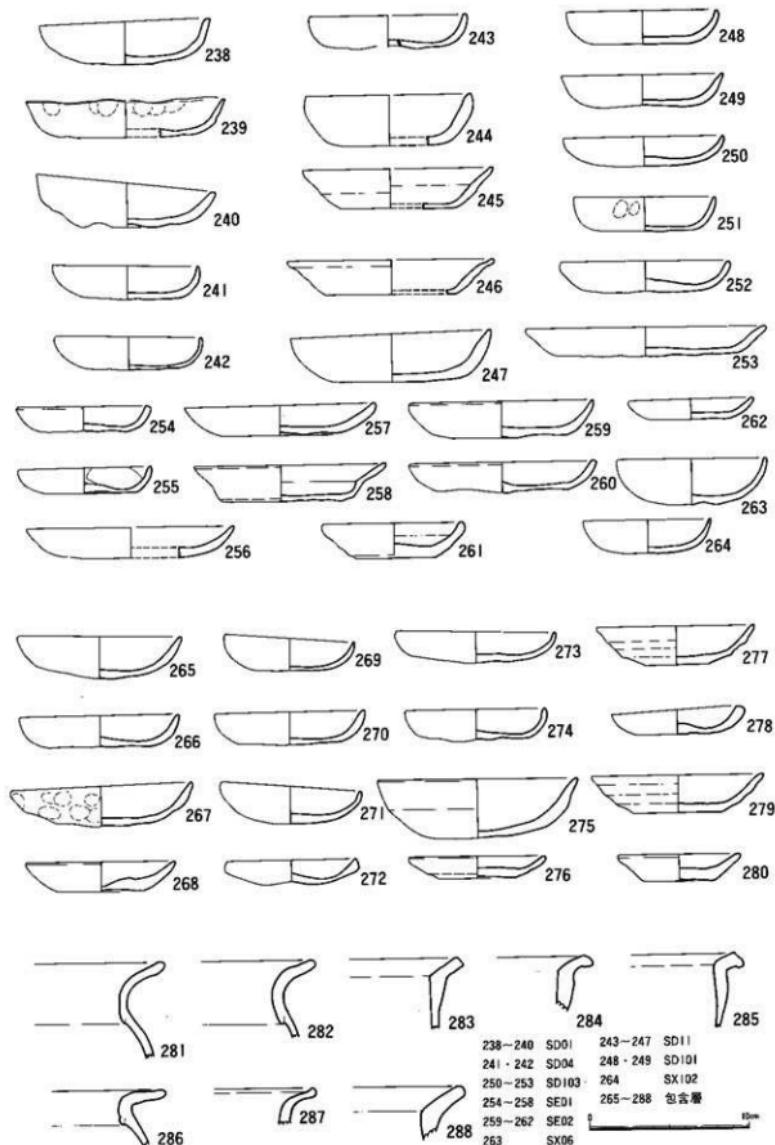
以上のべてきたように、磁器では図示可能なものは少なく殆どが細片であった。大部分が包含層からの出土であり、約40点程が認められる。また、遺構出土の232・234・236・237は共伴する山茶碗の年代とも合致するようである。特に白磁四耳壺は出土例が少なく、また年代的に最も古い形態のものと推定される。

第4節 土師質土器

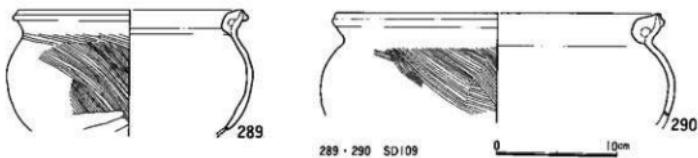
土師質の素焼きの土器をこのなかに含めた。最も多いのが一般的に「かわらけ」と呼称される土師質小皿で、甕、内耳鍋が少量認められる。包含層出土が大半であり、山茶碗等の他の土器類に伴うものは少なかったため図示したものの概略を述べる程度とする。



第13図 施釉陶器・磁器実測図



第14図 土師質土器実測図 I



第15図 土師質土器実測図II

A・土師質小皿 (第14図238~280)

土師質小皿は、指成形による手づくねのものと、ロクロ成形によるものの二種類があり、さらに調整では以下のような特徴が認められた。

指成形のもの

- 1・体部が内溝してたちあがり、底部、体部の境が明確でない。内面はヘラにより丁寧な器面調整がされるが、外面は指頭押圧痕を僅かにナデるといった程度の荒い調整で内外の調整の差が大きいもの。土師質小皿のなかでもこれに属するものが最も多くを占めている。外面調整は個々に差が認められ、239・240・251・267のように指の圧痕を明瞭に残し、器面の凹凸もそのまま調整されないような粗い作りのものは少なく、指の凹凸をさらに細かい押圧によって平坦に整えている。
- 2・体部が直線的に開き、底部と体部の境が明瞭なもの。口唇部が尖り気味で、体部の内外に稜をもつもの(245)、口唇部をやや下に引き出すもの(246)、口唇部は丸く体部内外の稜が強いもの(258)等があり、一部に指頭押圧痕が認められるが、全体を丁寧にナデて仕上げている。

ロクロ成形によるもの

図示した、261・277・279がこれに該当する。成形、調整等が山茶碗小皿に類似し、なかには焼成方法を変えれば山茶碗小皿となるものもある。この類のもので、成形、調整手法を山茶碗のそれと比較しても、相違は殆どないといえる。

275は、大型で深く、253は口径が大きく浅い。法量的な検討はしていないが口径ではかなりのばらつきが認められるようである。また、井戸、溝とかの遺構から出土し、山茶碗と共に伴するものもあるが最も古い時期と思われる井戸SE03の出土ではなく、また全体的に量も少ないので今後の検討の課題としたい。いづれにしても、土師質小皿の法量が規格化する過程の資料として考えたい。

B・壺 (第14図281~288)

壺も少ない出土ではあったが、第14図にみるように口縁部形態の変化は大きい。全体の形状、法量等が判明する資料は皆無であった。281・282・286・287は古代の遠江から駿河地域に分布する水平の口縁部をもつ長胴壺であり、281・282では胸部と口縁部の接合時の粘土処理の痕跡が認められる。283~285と288は口縁部が「く」の字になるもので、285では口唇部が尖っている。いづれも在地の壺ではないかと推定される。前者の水平口縁の壺と比較して、胎土に混入物がおおく、色調は暗く、調整も粗雑である。

C・鍋 (第15図)

球形を呈する胸部、「く」の字に外反する口縁部をもち、端部が肥厚し内耳がみられる。器壁は薄くつかれ、胸部は刷毛目調整、口縁部は横位のナデが施される。289は胴下位を板状工具により削る。289・290とともに、同一の成形手法によるものと思われるが、前者は口径18.4cm、後者は26.6cmと大きい口径をもっている。色調は淡褐色を呈し、胎土は精選され、焼成は良好である。伊勢型の鍋といわれているものである。

第7表 土師質小皿觀察表(1)

器種	圓版 KN	計測値(cm) ()は推定値	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
小皿	238	口径 10.7 器高 2.6	○体部は緩やかに内湾して立ち上がり端部を丸く収めている。	○体部内面はナデ調整、外面は荒いナデ調整を施す。	胎土 軟 焼成 やや堅 色調 乳白色	SD01 N170 1/2欠損
小皿	239	口径 (12.8) 器高 (2.3) 底径 (6.0)	○体部は僅かに内湾して立ち上がり口縁部を尖らせて収めている。	○体部内面は横ナデ調整、外面は荒いナデ調整を施す。	胎土 良選 焼成 乳灰白色 色調 やや軟	S D01-2下層 N160 約3/4欠損
小皿	240	口径 11.3 器高 2.8	○体部は僅かに内湾して立ち上がり、端部を丸く収めている。	○体部内面ナデ調整、外面は荒いナデ調整施す。 ○底部の凹凸美しい。	胎土 精選 焼成 やや軟 色調 乳白色	S D01-2 下層 N69 約1/2欠損
小皿	241	口径 9.1 器高 2.2 底径 5.8	○体部はやや内湾して立ち上がり端部を尖り気味に収めている。	○体部はヘラによる横ナデを施し外側は荒いナデを施すが底部は凹凸少なく、「丁寧」に調整される。	胎土 精選 焼成 砂粒 色調 やや堅 乳白色	約1/5欠損 T-30か?
小皿	242	口径 9.3 器高 2.1 底径 6.0	○体部は大きく内湾し端部を尖らせる。	○内面はナデ調整を施し、外面は荒くナデ調整される。	胎土 やや粗く疊を 含む 焼成 乳灰白色 色調	S D04 1090 A-08
小皿	243	口径 9.7 器高 2.1 底径 不明	○底部から丸みをもってほぼ直立する体部に統く。	○内側丁寧な手持ちナデなめらか。 ○外側は指頭圧痕残す。体部上半側に凹。 ○口縁部不規則な波状。 ○手捏ね成形。	胎土 良選 焼成 砂粒含む 色調 良 淡明褐色	S D11 2061 2/3欠損
小皿	244	口径 10.4 器高 3.2 底径 6.0	○体部は僅かに内湾して立ち上がり端部を尖りぎみに収めている。	○体部中位より内側にかけて横ナデ調整。	胎土 良選 焼成 軟 色調 明赤褐色	S D11 S側 754 1/4欠損
小皿	245	口径 13.0 器高 2.5 底径 6.0	○体部は直線的に開き、端部を尖りぎみに収めている。	○高台なし。 ○体部中位より外面にかけて横ナデ調整が施される。 ○器面は横撫で調整が施されている。	胎土 細緻雲母多く 含む 焼成 やや粗い 色調 やや軟 明淡褐色	S D11 N側 751 1/4欠損
小皿	246	口径 13.0 器高 2.2 底径 8.2	○体部は直線状に立ち上がり口縁部を外反させ端部を把厚させる。	○器面はナデ調整が施されているが付着物が多い。 ○体部内側共横ナデ調整。 ○口縁部内側はナデにより段を形成させる。	胎土 やや粗い 焼成 やや軟 色調 淡褐色	S D11 N側 751 1/4欠損
小皿	247	口径 12.6 器高 3.0 底径 6.7	○体部は僅かに内湾して立ち上がり端部を尖りぎみに収めている。	○器内外共横ナデ調整。 ○底の内面はナデが弱い。	胎土 粗い 焼成 砂粒を多量に 含む 色調 敏 赤褐色	S D11 751 754 1/4欠損

第7表 土質小皿観察表(2)

器種	図版 No.	計測値(cm) ()は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
小皿	248	口径 器高 底径 9.4 2.1 5.9	・体部はやや内湾して立ち上り、 端部を尖り気味に收めている。	・内側にヘラナデが施してある。 ・外側には、指頭圧痕がみられる。 ・体部外側はヘラによる荒いナ デ調整。	胎土 良選 砂粒、石粒、 微小雲母 焼成 色調 やや堅 乳白色	S D101 1029 約1/2欠損
小皿	249	口径 器高 底径 10.2 2.0 6.0	・体部はやや内湾して立ち上り、 端部を尖り気味に收めている。	・内側にヘラナデ調整を施し、 外側には荒いナデを施す。 ・底は調整が荒く凹凸がある。	胎土 精選 砂粒、石粒含 む 焼成 色調 やや堅 乳白色	S D101 1041 約1/3欠損
小皿	250	口径 器高 底径 9.8 1.8 不明	・底部から丸みをもって立ち上 り口縁部は直立する。	・内側丁寧なナデ一部に工具痕 有り。 ・外側比較的丁寧なナデ。 ・手捏ね成形。	胎土 精選 長石わずかに 含む 焼成 色調 良好 淡暗灰褐色	S D103 下層 B10N 1119 1/2強欠損
小皿	251	口径 器高 底径 8.7 2.1 不明	・底部から丸みをもって立ち上 り口縁部は直立する。 ・口縁部不規則な波状。	・内側丁寧な手持ちナデ(使用 のため磨滅激しい)。 ・外側に指頭圧痕残す。 ・手捏ね成形。	胎土 焼成 色調 精選 良 淡明白褐色	S D103 下層 1120
小皿	252	口径 器高 底径 10.4 1.9 不明	・底部から丸みをもって立ち上 り口縁部は直立する。	・内側工具による丁寧な手持ち ナデ。 ・外側指頭圧痕底部によく残る。 ・手捏ね成形。	胎土 焼成 色調 精選 良好 淡赤黃褐色	S D103 下層 B10N 1119 2/3欠損
小皿	253	口径 器高 底径 14.7 1.8 11.4	・全体に扁平で体部は直線的に 開き口縁部は、わずかに外反 する。	・内側丁寧な回転ナデ。 ・外側は体部回転ナデ。 ・手捏ね成形。	胎土 焼成 色調 精選 良好 淡明黄褐色	S D103 B- 105 下1112 1/2欠損
小皿	254	口径 (8.4) 器高 底径 (4.6) 1.6 (4.8)	・体部は僅かに内湾して開き、 端部は平らめて收めている。	・体部内面はナデ調整、外面は 荒いナデ調整を施す。	胎土 焼成 色調 良選 堅 暗赤褐色	S E01 V層 N252 約1/2欠損
小皿	255	口径 器高 底径 8.4 1.5 5.6	・体部は内湾して立ち上る。	・体部外側は指ナデされている。	胎土 焼成 色調 均一であるが 軟質でもろい やや軟 乳白色	S E01 V層 N 252 1/4欠損
小皿	256	口径 (13.0) 器高 底径 (1.9) (6.0)	・体部は内湾して立ち上り端部 を丸めて取める。	・体部内面ナデ、外面は荒いナ デ調整を施す。	胎土 焼成 色調 良選 やや軟 明赤褐色	S E01 755 3/4以上欠損
小皿	257	口径 器高 口径 11.8 1.9 8.0	・体部は僅かに内湾して立ち上 り、口縁部端が平坦となる。	・体部内面はナデ調整。 ・外面は荒いナデ調整を施す。	胎土 焼成 色調 良選 軟 明赤褐色	S E01 276 (抽) S E01 西V248 1/4以下欠損

第7表 土師質小皿觀察表(3)

器種	図版 No.	計測値(cm) ()は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
小皿	258	口径 12.1 器高 2.6 底径 7.7	・体部は大きく外反させ、端部を尖らせている。内側下位に明顯な段をもつ。	・体部内側横ナデ、外側はやや荒いがナデ調整を施す。 ・底はほぼ平坦。 ・高台なし。	胎土 良選 焼成 緩 色調 灰白色	SE01 276 完形
小皿	259	口径 11.6 器高 2.3 底径 7.1	・体部は内湾して立ち上り端部を尖り気味に收める。	・体部内面は横ナデ調整。 ・外面は荒いナデ調整を施し底は凹凸が多い。	胎土 良選 焼成 緩 色調 淡赤褐色	SE02 N230 完形
小皿	260	口径(11.8) 器高 1.35 底径 (7.8)	・体部は緩やかに内湾して立ち上がり端部を平坦に收める。	・内面はなめらかにナデ調整が施されているが、外面は荒い横ナデ調整。	胎土 良選 焼成 緩 色調 淡赤褐色	SE02 N230 1/2欠損
小皿	261	口径 9.0 器高 2.15 底径 5.1	・体部は内湾して立ち上がり端部を丸く收める。	・底部静止糸切り未調整。 ・ロクロ成形。	胎土 良選だがやや おどる 焼成 緩 色調 暗赤褐色	S E02 井戸枠内北側 レキ層上面B90 1/4欠損
小皿	262	口径 7.7 器高 1.3 底径 5.0	・体部は確かに内湾して立ち上り端部をやや尖りぎみに收めている。	・内面は横ナデ。 ・外面は荒いナデ調整を施す。 ・底は凹凸が大きい。	胎土 良選 焼成 緩 色調 暗赤褐色	SE02N230 完形
小皿	263	口径(9.4) 器高 2.8 底径 3.0	・体部は大きく内湾し口縁部で内側に縮まり気味である。	・体部内面ナデ調整、外面は荒いナデが施される。	胎土 精選 焼成 緩 色調 赤褐色	S X06 795
小皿	264	口径 8.0 器高 2.1 底径 3.0	・体部はやや内湾して立ち上り端部を尖り気味に收めている。	・内側は丁寧な横ナデ、外側は荒いナデを施す。	胎土 精選 焼成 砂粒、石粒、 微小窓母 やや堅 乳白色	S X102 1029 約2/3欠損
小皿	265	口径 10 器高 2.6 底径 不明	・底部から丸みをもって立ち上り口縁部は直立する。	・内側丁寧なナデ。 ・外側ナデにより指頭痕をナデ 器皿面比較的なめらか。 ・手捏ね成形。	胎土 精選 焼成 細 色調 大きめの糠合 む 堅 淡明黄褐色 一部ピンク色 帯る	B5IV層051 1/3欠損
小皿	266	口径 9.8 器高 1.9 底径 不明	・底部から丸みをもって立ち上り口縁部は直立する。	・内側工具によりなめらかにナデする。 ・外側指頭圧痕明瞭。 ・手捏ね成形。	胎土 精選 焼成 良好 色調 淡明黄褐色一部 ピンク色 帯びる	表土052 1/2欠損
小皿	267	口径 11.1 器高 2.5 底径 不明	・底部から丸みをもって立ち上り口縁部はやや開く。 ・口縁部は不規則な波状を呈する。	・内側もちナデ表面なめらか。 ・外側指頭圧痕明瞭に残る。 ・内形成形。	胎土 良選 焼成 細 色調 少量含む 良好 明黄褐色	V層1018 1/5欠損

第7表 土質質小皿観察表(4)

器種	図版 No.	計測値(cm) 〔は推定値〕	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
小皿	268	口径 器高 底径 9.2 1.8 5.3	○体部下端丸みをもって立ち上る。 ○口縁部は不規則な波状を呈する。	○内側クロコ形成、回転横ナデ。 ○底部静止糸切り。	胎土 良選 焼成 堅 色調 淡黄褐色	B6IV層078 1/3欠損
小皿	269	口径 器高 底径 8.1 2.0 不明	○底部から丸みをもって立ち上り口縁部は直立する。 ○口縁部は不規則な波状を呈する。	○内側工具による手持ちナデ。 ○外側ナデにより器面なめらかに調整。 ○手捏ね成形。	胎土 精選 焼成 堅 色調 淡乳褐色	表探 022 1/2欠損
小皿	270	口径 器高 底径 9.2 2.0 不明	○底部から丸みをもって立ち上り口縁部は直立する。	○内側丁寧なナデ、工具痕有り。 ○外側指頭痕をナデて、なめらかに調整する。 ○手捏ね成形。	胎土 精選 焼成 堅 色調 赤褐色	C9~10 V層1034 2/3欠損
小皿	271	口径 器高 底径 8.7 2.3 不明	○底部を含め全体に球形を呈する。 ○口縁部は直立する。 ○口縁部ほぼ水平。	○内側なめらかなナデ。 ○外側は指頭圧痕をナデて、なめらかに調整。 ○手捏ね成形。	胎土 精選 焼成 堅 色調 淡乳褐色	C9 V層 019 外側全体に煤付着 完形
小皿	272	口径 器高 底径 7.9 1.3 不明	○体部やや丸みをもち大きく開いて口縁部に続く。 ○口縁部肥厚する。 ○口縁部不規則な波状を呈する。	○内側工具による粗いナデ。 ○外側指頭圧痕を粗くナデる。 ○手捏ね成形。	胎土 良選 焼成 やや軟 色調 淡褐色 (白味が強い)	C8IV層 154 1/2欠損
小皿	273	口径 器高 底径 9.8 1.9 不明	○底部から丸みをもって立ち上り口縁部は直立する。 ○口縁比較的の水平。	○内側なめらかにナデる。 ○外側指頭痕をなめらかに、ナデる。 ○手捏ね成形。	胎土 良選 赤色粒子、細 繊含む 焼成 良好 色調 淡乳褐色 (白味が強い)	810V層 1023 口縁部1/3欠損
小皿	274	口径 器高 底径 8.5 1.8 不明	○底部から丸みをもって立ち上り口縁部は直立する。 ○口縁部ほぼ水平。	○内側工具による、丁寧な手持ちナデ。 ○外側指頭圧痕明瞭に残る。 ○手捏ね成形。	胎土 良選 赤色粒子、細 繊含む 焼成 堅 色調 淡明乳褐色 (白味が強い)	B4 V層 1008 完形
碗	275	口径 器高 底径 12.4 3.7 7.6	○底部から丸みをもって立ち上り体部で後をもじ口縁部やや外に開く。	○内側回転ナデ。 ○外側底部から体部縁まで粗いナデ。 ○口縁部回転ナデ。 ○手捏ね成形。	胎土 細纖などの混 入物多い 焼成 軟 色調 淡明乳褐色 (白味が強い)	C8 V層上 189 1/3欠損
小皿	276	口径 器高 底径 8.4 1.3 4.9	○体部わずかに丸みをもって大きく聞く、扁平。	○内外共に回転ナデ。 ○底部回転糸切り未調整。 ○クロコ成形。	胎土 良選 長石等多く含 む 焼成 堅 色調 明赤褐色	B6 645 1/2欠損
小皿	277	口径 器高 底径 9.9 2.4 4.0	○体部はやや内湾して立ち上り口縁部端を丸く収めている。	○器面はやや粗くナデ調整が施されている。 ○底部糸切り未調整。	胎土 良選 焼成 色調 やや軟 赤褐色	C5IV層059 完形

第7表 土師質小皿觀察表(5)

器種	図版 No.	計測値(cm) ()は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
小皿	278	口径 8.3 器高 1.8 底径 5.0	・体部はやや内湾して立ち上り ・口縁部端を平らに収めている。	・体部内面横ナデ外面は浅いナデを施す。	胎土 良濃 焼成 やや堅 色調 淡褐色	表採 968 完形
小皿	279	口径(10.8) 器高 2.75 底径 5.8	・体部はやや内湾し、口縁部を やや開き気味に端部を丸く收 めている。	・底部糸切り未調整。 ・器面は比較的なめらかでナデ 調整が施されている。 ・ロクロ成形	胎土 良濃 焼成 やや軟 色調 赤褐色	C4排水溝130 1/2欠損
小皿	280	口径 7.5 器高 1.6 底径 4.4	・体部は直線的に大きく開く。	・磨滅のため細部觀察不能。 ・底部回転糸切り未調整。 ・ロクロ成形。	胎土 赤色粒子多く 含む 焼成 軟 色調 赤褐色	表上025 2/3欠損

第5節 土 製 品

瓦と土錐が出土する。瓦の一部は遺構に伴うものであるが、土錐を含めて殆どが包含層から出土している。

A・瓦

瓦は軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦があるが、全体の形状、規格のしれるものはなかった。出土状態からみて、割れて使用済みのものが破棄されたと推定される。種類ごとに分けてその概略を述べることとする。

軒丸瓦 (第16図291~296)

6点出土する。いずれも瓦当文様は巴文で、細長く延びて圓錐に接している。外区は珠文が施され、周縁は約1cmである。外径が14.5cmの大きいものと、13cmのものとの2種類が認められる。外径の大きいものからみてゆくこととする。

291・292は、丸瓦との接合部を欠損するが残存状態は良好であり、外径14.5cm、珠文は291が26個、292は30個と推定される。内側を指ナデして、瓦当に接合しているが、この際、接合部外の上面にも粘土を追加している。従って、丸瓦の接合位置は瓦当上面よりやや下位となる。291・293にこの手法が認められる。291は、乳灰色を呈し長石、細縫が多く含み、瓦当面には特に細縫が顯著にみられる。292は、赤褐色を呈し、縫を微量含み、291と同様、瓦当面に細縫が多く付着する。破片で明確ではないが、295・296も同じ手法でつくられていると思われる。

外径の小さいものでは293がある。13cmであり、珠文の数は少ないようであるが、瓦当文様、手法には前者との差はみられない。色調は暗灰色、焼成はやや軟質であり、瓦当面に細縫が微量付着する。

軒平瓦 (第16図297~300)

小破片であり、文様等にも差がみられないが、瓦当に接合する平瓦の厚みが、3.5cmと、2.2cm前後の、厚さの違いが認められる。297と300が厚いもの、299が薄いものである。

瓦当文様をみると、唐草文が緩やかな曲線を描き、先端の膨らみが大きい。成形・調整の手法は、凹面の瓦当部は粘土を追加し、広端部に平行してヘラナデを施している。平瓦部分は綱ナデで調整する。300は本遺跡出土の瓦のなかでは最も全体が判明するものであるが、大きさ等の計測をするのは不十分である。これらは、胎土にやや大きめの細縫を微量含み、瓦当面では297・300に細縫が付着する。色調、焼成は、297・300が青灰色を呈し、硬質である。

薄いものは、299があり、凹面に布痕がみられ、凸面の端部は横ナデをして調整する。赤褐色で、やや大きめの細縫を含み焼成は軟質である。

丸瓦（第17・18図）

丸瓦は有段の玉縁式のもので、凹面の調整に滑らかなナデを施すものと、繩の叩き目を残すものがある。しかし、両者ともに成形上での相違はなく、凹面の布目が玉縁の先端まで連続し、丸瓦本体と玉縁部の同時成形が認められる。従って、凹面の布目は玉縁部の内径の変化により、たるみを生ずるためそれを一ヶ所に集めており、その部分は凹凸の大きい「しわ」が認められる。端部の調整はヘラ削りであり、側端で直角に一度で削るもの及び、これに凹面の布目痕までをもう一面と、二面のヘラ削りとするものがある。尚、凹面の布目痕は未調整である。以下に凸面をナデ調整するものから細部をみてゆくこととする。

まず滑らかにナデ調整されるものとして、301～304の3点がある。小さい破片ではあるが丁寧にナデられており、おそらく全体的に均一な調整がされていたものと思われる。302は中央部と思われ、内径が、9.5cmと最も大型のもので、この径からみると軒丸瓦291の接合痕と一致する。乳褐色で、長石を少量含み、焼成は軟質である。4点とともに、端部は二度の面取りによっている。

一部繩による叩き目を残すもので、全体にナデているため、繩痕も沈線のように凹んだような状態を呈している。305、306の2点に認められる。しかし、繩の痕跡は僅かであり、ナデの頻度および、強弱の相違と考えられる状態である。基本的にはナデ調整されたものとの相違はないものと考えられる。303・305は青灰色で堅く焼き締まり、胎土は精選されている。

繩の叩き目が残るものは307であるが、繩で叩いた時点で凹みが生じたと思われ、繩目が見られない上下ではナデしているのが観察される。従って、繩目を意図的に残したものではなく、凹みとなる低い部分はナデると更に低くなるために繩目がそのまま残ったものと考えられる。凸面に残される繩の叩き目の巾は4.5cmで、繩は無撫りである。青灰色の色調で、胎土精選、焼成は堅く焼き締まっている。

丸瓦の内径は5.6cm～9.5cmの間で、大まかに3種類の大きさが認められる。大きいものは9.2cm～9.5cmに集中し、中間で7.9cm～8.2cm、小型のものは5.6cm～6.4cmとなる。青灰色で堅く焼き締まった303・305・307は大型のものにはみられない。

平瓦（第19図～23図）

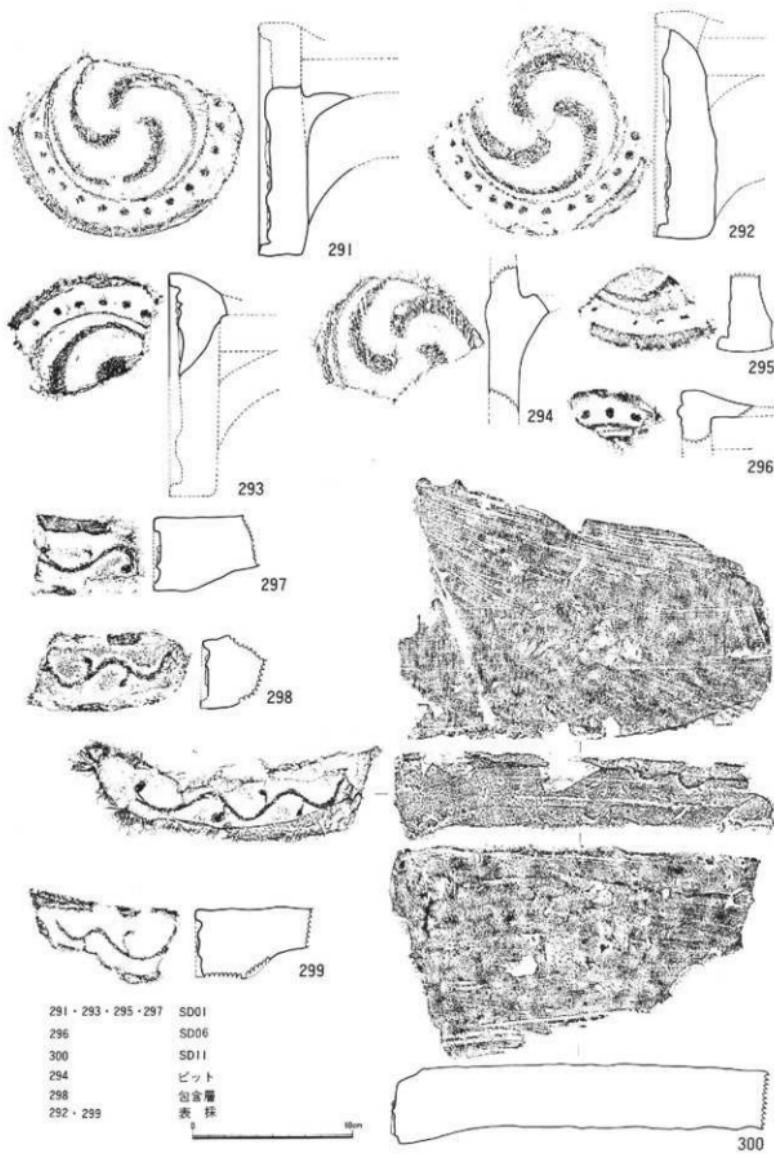
出土した瓦のなかで平瓦が大部分を占めており、丸瓦と同じく叩き目の様相から大きく3種類に分けることができる。しかし、先の丸瓦でみたように叩き目の強弱、頻度によっては一部に叩き目が残されたり、また意図的な手法としてでなく、凹みの部分に叩き目が残ったというような事例も推定されるため、ここでは一応分けてはみたが手法の傾向を知る程度の分類である。平瓦の叩き目も丸瓦同様に繩によるものであり、1・叩き目をそのまま残すもの、2・叩き目をヘラ削りし、一部に繩目を残すもの、3・繩目の後ヘラ削りするものが認められる。また、側端部の処理もヘラによる一面と二面取りの両者が認められる。

平瓦の大きさを知る資料としては、308一点があり、長辺が31cmであった。広端部は一方が、2面のヘラ切り、もう一方をナデ調整して仕上げている。基本的には、広端部の処理は平瓦すべてに共通する手法と考えられる。繩の叩き目は連続して重なっており、明確に工具の巾を確認できるものではなく、繩の、一本の巾は3mm前後の粗いものを用いている。

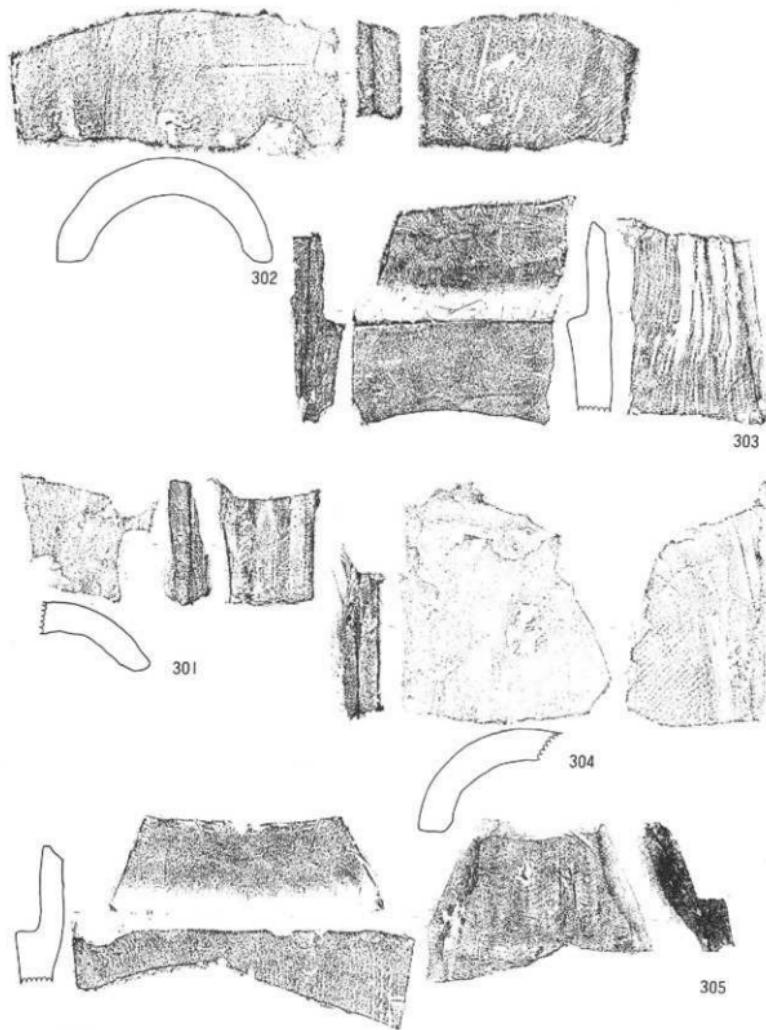
先に分類した叩き目の調整手法に、端部のヘラ切りを加味して本遺跡出土平瓦の概要を述べてみる。

1・繩目痕未調整のもの

308が最も全体の形態を残しているもので、広端部巾131.5cmを計る。図の上下面ともに一面のヘラ削りで、上端のヘラ削りの面には乾燥段階での下敷きの圧痕が残される。凹面は布目はみられず、ヘラのようなものでナデた痕跡が残る。図中央の側端部は一面のヘラ削りで、先端を丸くし、浮いた粘土を凹面に押し付けて仕上げている。繩の叩き目は一様でなく強弱がみられるが、繩痕は未調整である。色調は



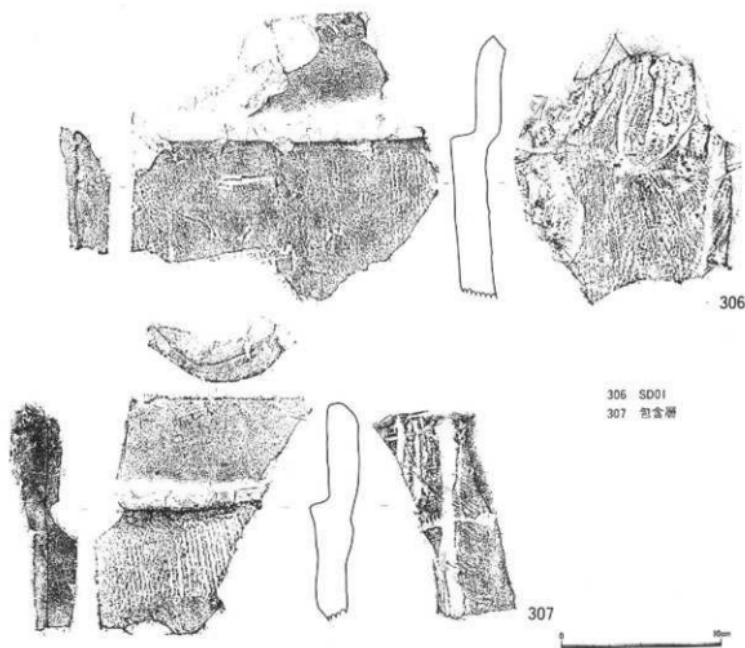
第16図 瓦拓影図 I



301・304 SE02
302・303・305 包含層

0 10cm

第17図 瓦拓影図II



第18図 瓦拓影図III

青灰色、焼成は堅く焼き縮まり胎土は精選されている。

310は凸面の剥落が大きいが、繩目痕未調整と思われるものであり、広端部の一方は一面のヘラ削り側端部も一面のヘラ削りで、端部は丸く凹面側に粘土を押し付けたままである。赤色の縫、細縫が混入し、焼成は軟質、淡赤褐色を呈している。

311は、縫の叩き目が良好に観察されるものであり、広端部のヘラ切りは2面、側端部は一面であり浮いた粘土も丁寧にその痕跡を残さずに処理されている。凹面も布目は残さずヘラナデされるが、細縫は付着が多く明確には観察できない。堅く焼き縮まり青灰色を呈し、細縫を少量含んでいる。全体に丁寧な調整がされている。

312は、縫の叩きの方向が平行でなく、交差するものも認められる例であり、広端部のみ一部が残っている。凹面は布目の上に棒状工具によるやや斜位の沈線が認められる。大小の縫を多く含み焼成はやや軟質、淡灰褐色である。側端部はほぼ直角に面取りされている。

313は、焼成が弱く赤褐色で、軟質のため全体が摩滅している。縫目は交差しているが、凹面は摩滅し観察できない。側端部の粘土は未処理のままである。

314は広端部が広く残されている例である。縫目は上下方向に平行で均一に残されるが、図の上部に斜位の平行する擦痕が認められる。凹面は多少の押圧を受けるが、布目が良好に残されている。広端部は2面に面取りされ、側端部は丸みを持つが、ヘラにより先端部の調整が行われている。先端の粘土処理は

比較的丁寧に行われている。拓影でみると上部の端部には乾燥段階の大きな圧痕がみられる。焼成は弱く、灰白色で、細緻、大きい疊を含んでいる。井戸SE03から出土したものである。316にも縄の叩き目の上に斜位の擦痕跡が認められる。

315は308と同じ、縄目痕に粗密が認められるものであり、凹面は布目を消し、広端部は一面取りでヘラ切りの面は鋭角になっている。焼成やや軟質、灰白色で、胎土には大小の疊を多く含み、両面ともに砂が付着している。319も擦痕の認められるもので、凹面はヘラナデにより完全に布目痕を消失している。

317、318は擦痕がみられず、縄目の交差も認められないものである。318では広端部の面が乾燥段階での圧痕により面が乱れヘラ削りの痕跡は全く観察できない。また側端部では、丁寧な粘土処理が行われ、ヘラによる2面削りがされている。凹面には布目の痕跡は認められず、棒状の工具による斜位の擦痕がみられる。表面は灰白色であるが、焼成は軟質、胎土中には大小の疊が混入している。表面の砂の付着は認められない。

2・縄目痕一部ヘラ削りするもの。

320～323の4点がこの類に含まれる。最も大きい破片の320をみると、縄目へのヘラ削りは、巾が一定せず2cmと4.5cmの割りが縄目と平行に施される。特に、巾の広いものは器面調整のための削りといつたものではなく、成形上で凸面の盛り上がった部分を削り取ったような状況とも推定される。また、縄目未調整のものでみたような、棒状工具による斜位の密な擦痕も認められる。凹面はナデのため布目痕を消失し、砂が付着している。広端部のヘラ切り面は直角よりやや鋭角的であり、側端部はヘラによる1面取りではあるが、端部の浮いた粘土処理は、上下に振り分けている。従って先の1の類にはみられない手法を採用している。焼成は硬質、青灰色を呈し、胎土は精選されている。

321も、320の凸面同様、上下方向のヘラ削り、斜位の擦痕がみられ、凹面の布目は完全にナデにより消失している。焼成は軟質で白味が強い色調である。322は斜位の擦痕が広い範囲に認められ、縄目と、ヘラ削り痕は僅かに観察されるものである。これは、広端部のヘラ切りの面が直角であり、かつまた側端部のヘラ切りの角度も直角に近い。321と類似した色調、胎土、焼成である。

323は斜位の擦痕はなく、縄目とヘラ削りが半々程度の割合でみられる。ヘラ削りも、320でみたような巾の広い大きなものではなく、器面調整といった程度の手法とおもわれる。広端部のヘラ切りの角度は鋭角で、尖っている。側端部は1面取りで、丸くナデられ、丁寧に仕上げられている。凹面は不規則なナデ、押圧により布目が僅かに残っている。色調、胎土、焼成は、先の2点と類似している。

3・叩きの布目痕を消失するもの。

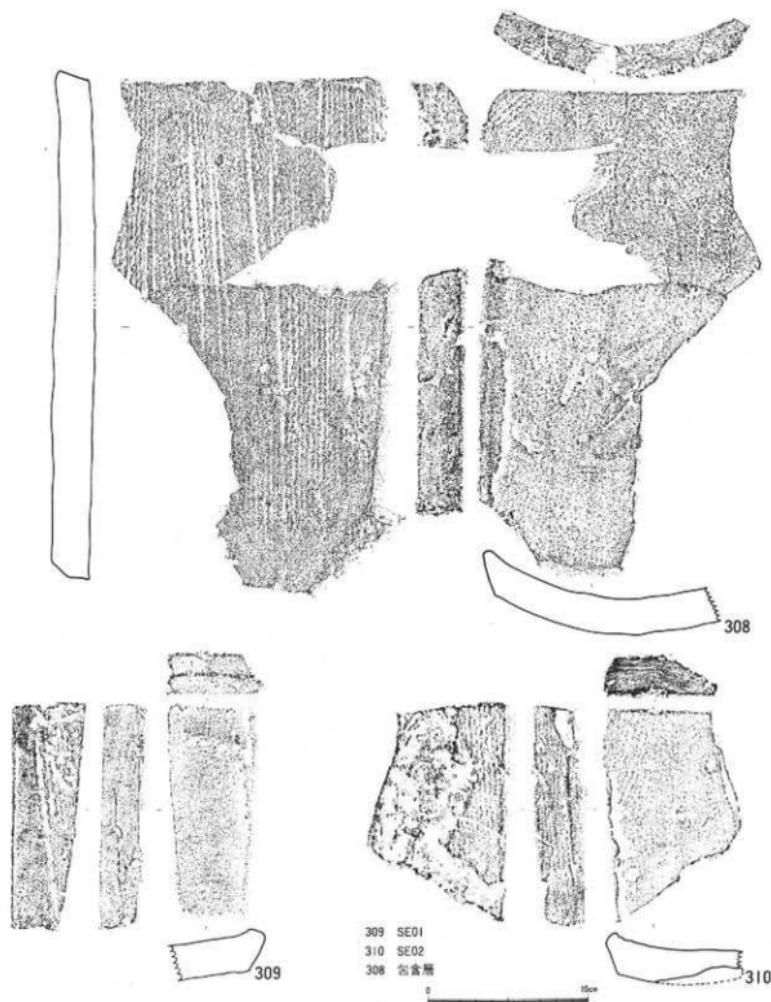
布目痕をヘラ削りしているものであるが、ほぼ全面を削るもの、一部ヘラ削りとナデにより布目痕を消失するものがあり、凹面でも布目痕の調整がおこなわれるが、規則性をもったものとは思えない。

まず全面を削るものは、327・330・321の3点である。削りは、ほぼ上下であるが、327ではやや斜位に削られている。しかし、凹面の調整手法は相違があり、327では、ナデと曲線の擦痕がみられ、331はナデ調整、330は一部に不規則なナデあり、布目痕を残している。端部のヘラ切りも他のものとの相違は認められないが、331では、側端部が2面取りとなっている。

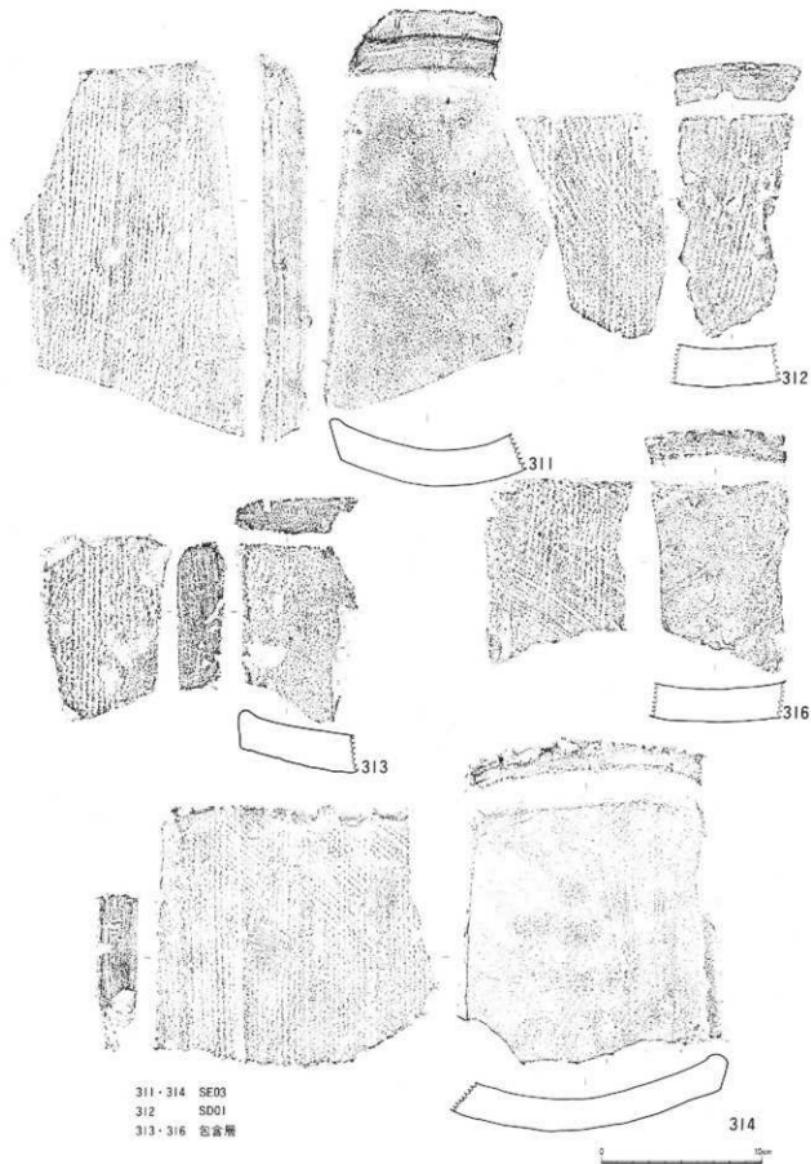
ヘラ削り、ナデを併用するものとしては、324～326・329であり、324は広端部が直角の面取り、側端部も、322と同様に直角に近い面取りをしている。326では、凸面に砂が付着し、側端部の面取りの角度が強く、端部の粘土は凹面側が未処理のままである。

この類の平瓦は焼成がやや軟質としたものが多く認められ、色調も灰白色を呈している。しかし、324・331では赤褐色で、硬質な焼成となっている。

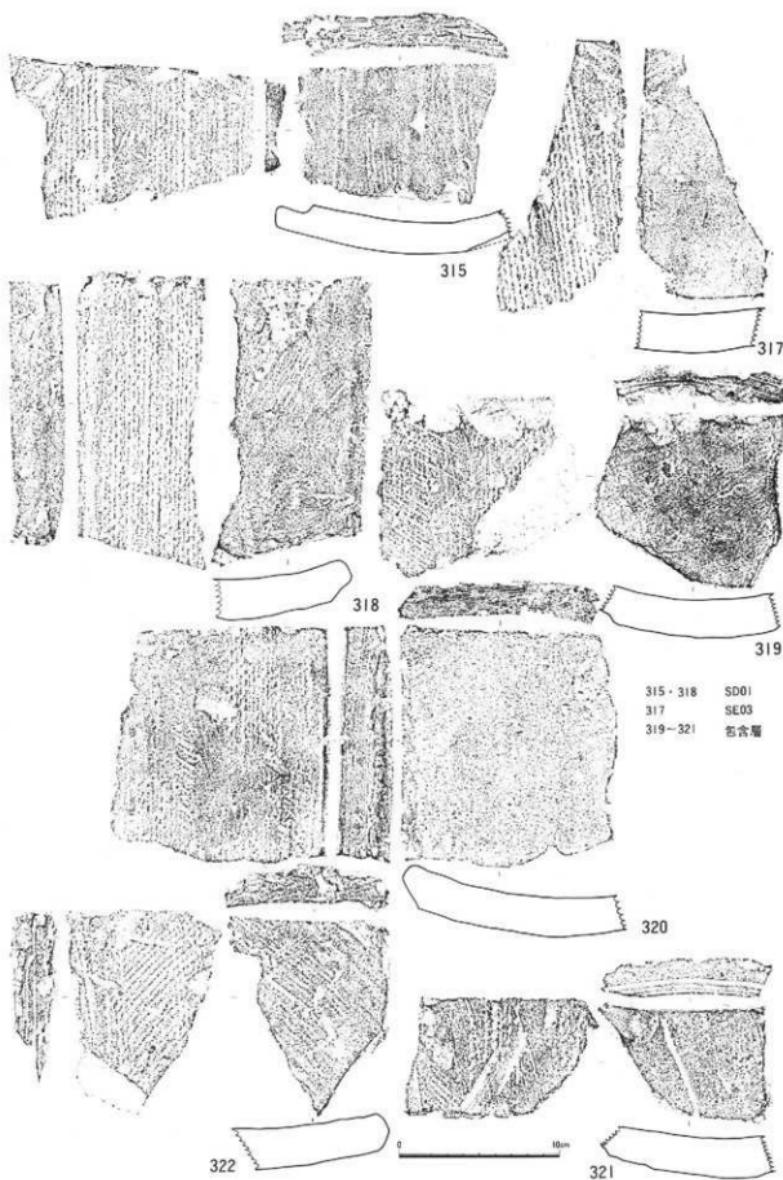
以上、平瓦をみてきたが、凸面の叩きは縄目のみであり、かつ調整手法にも規則的な手法が認められず、分類した瓦相互の特徴とか規則性は認められなかった。これは、丸瓦にも該当している。



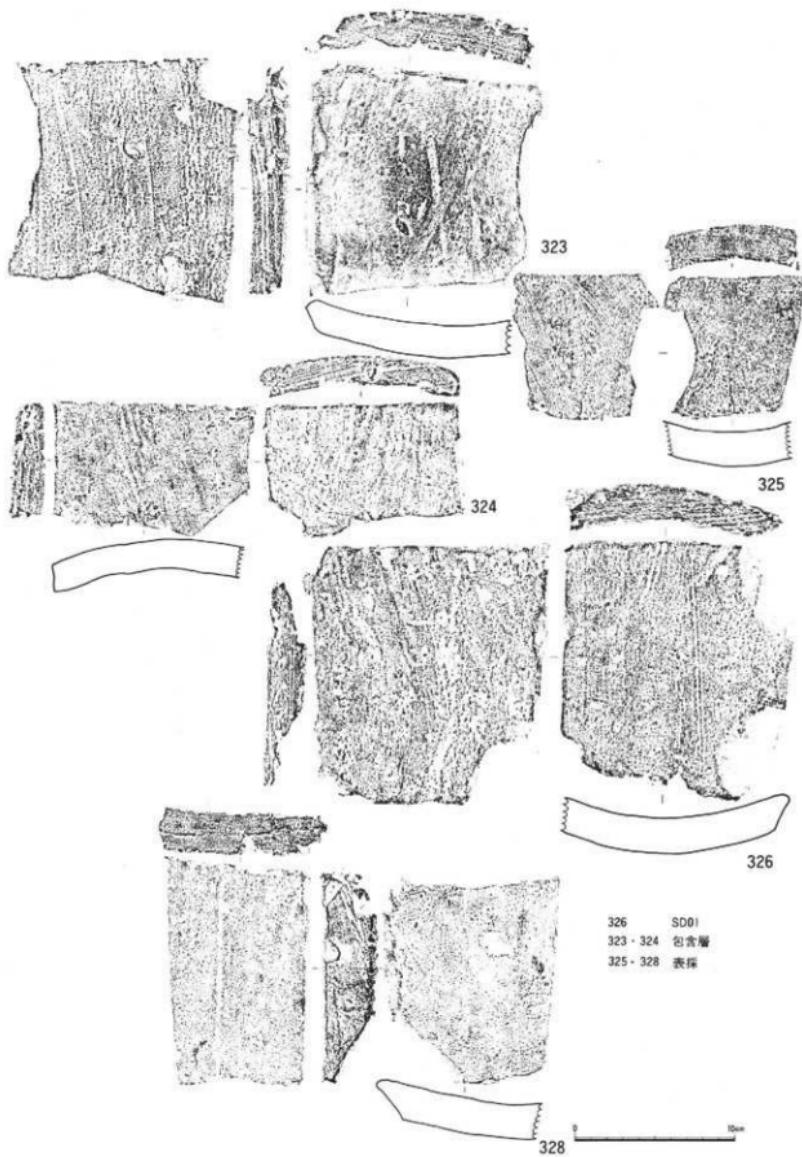
第19図 瓦拓影図IV



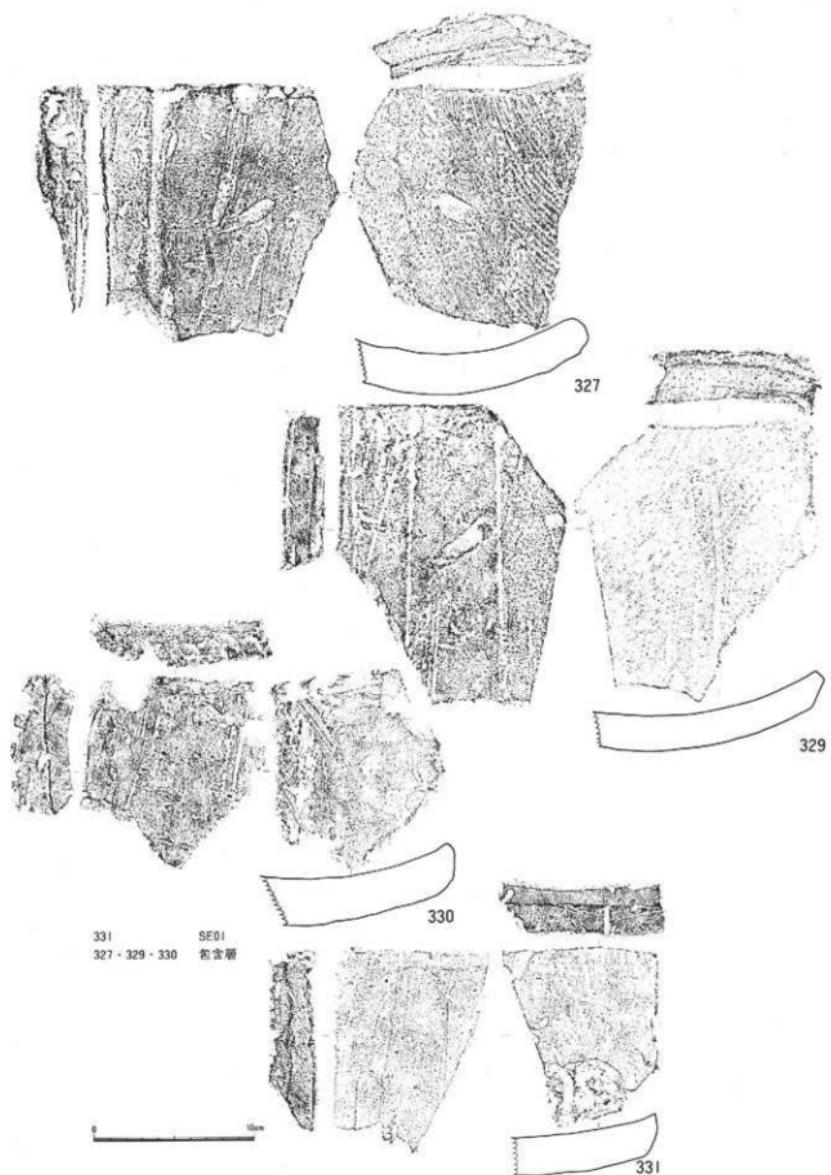
第20図 瓦拓影図V



第21図 瓦拓影図VI



第22図 瓦拓影図VII



第23図 瓦拓影図VII

平瓦の厚さは、1.5cm～3.5cmに及び2cm前後の厚さが最も多くみられる。厚手のものは、縫目を消すものに多く認められ、薄いものは縫目痕未調整・一部ヘラ削りするものに集中して認められる。

基本的に他の遺跡からの出土例にも乏しく、比較資料も少ないが成形、調整ともに手法上では単純な様相といえる。

本遺跡の瓦は、軒平瓦に2種類の規格があること、また丸瓦にも内径の差から3種類が認めらることから、小型化してゆくのを時期差の指標とすれば2～3の時期が推定される。数少ないが、溝、井戸出土の共伴する山茶碗の年代からみれば、12世紀代と考えられる。周辺遺跡の調査例の増加を期待し、ここでは資料の概要を述べる程度とした。

B・土錐（第24図）

土錐は多く出土しており、大小さまざまなものが認められるが、そのうち40点を図示した。全て土質のもので、最長は346の4.8cm、最小は354の3.0cmであった。調整は器面にやや凹凸が認められるが指痕をのこすものは全くみられず、比較的滑らかな面をもつ。各々の土錐の計測値は第9表に示した。両端の手法と形態から大きく3つに分けてみた。

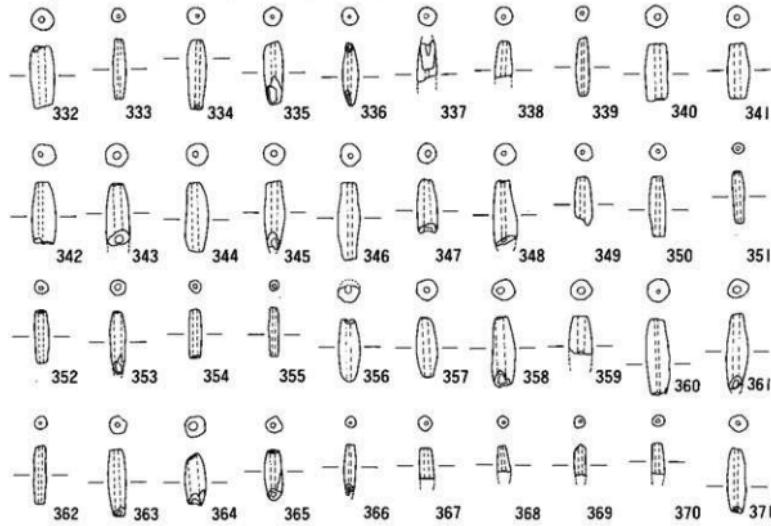
- 1・両端をヘラ切りした棒状の管。
- 2・両端をヘラ切りし、中央部に最大巾をもつもの。
- 3・両端が細くすぼまり、全体に丸みをもつもの。

以下に分類した種類ごとのべる。

1は、332・340・350～352・355・362等が典型的なものであり、このなかで細いもの352・353・362と、332・340のように太いものがあり、形態の差が認められる。しかし、手法とかの差は認められない。

2としたものは、341・342・345・346～358・361がこれにあたる。押圧により、中央部に最大巾がぐるよう形成されている。最大巾をもつのは342であり、1.4cmを計測する。

3は、343・347・348・368等であり、先端が先細りのまま穴に連続するもの、やや丸みをもつものが



第24図 土錐実測図

第8表 土錐計測表()は推定値

挿図番号	長さ(mm)	最大径(mm)	重さ(g)	挿図番号	長さ(mm)	最大径(mm)	重さ(g)
332	39	14	7.2	352	34	8	2.6
333	36	8	2.5	353	39	9	2.5
334	44	11	5.6	354	30	7	1.9
335		11		355	31	6	1.5
336		10		356	39	13	4.4
337		12		357	36	13	6.3
338		10		358		14	
339	36	7	2.6	359		14	
340	33	14	7.5	360		13	
341	33	13	6.9	361		13	
342		14		362	36	7	2.5
343		14		363		11	
344	44	13	8.0	364		13	
345		13		365		10	
346	48	13	8.5	366		7	
347		12		367		(8)	
348		14		368		(7)	
349		10		369		(7)	
350	38	10	2.5	370		(7)	
351	33	7	1.6	371		(11)	

ある。1・2と比較してやや細長く、太いものが多い。

以上のように土錐は実測する位置でも形態が相違するものとか、欠損するものがあるため、どの形態に属するかの判断が容易ではなかった。いずれにしても全体的には類似する重量と思われかつ、紐等で縛ったような痕跡もなく、流れの緩やかな場所での網の錐に用いられたものであろうと推定される。時期としては、出土する遺構の年代からみて、古代末から中世の時期と考えられる。

第6節 石製品

石製品の出土は極少なく、4点を図示した。372～374が砥石で、375は硯である。本遺跡からは、溝とか井戸から多量の角礫が伴ったが、明瞭な使用をもつものは図示したもののみであった。373・374は方形を呈したと思われ、372は不定型である。大きさは、373が縦10.7cm、横6.1cmである。

砥石の使用痕は3～4面に認められ、3点ともに表裏、側面を使用している。なかでも、372は平坦な面に断面三角形の溝をもち、限定した目的に使用されたものとも考えられる。

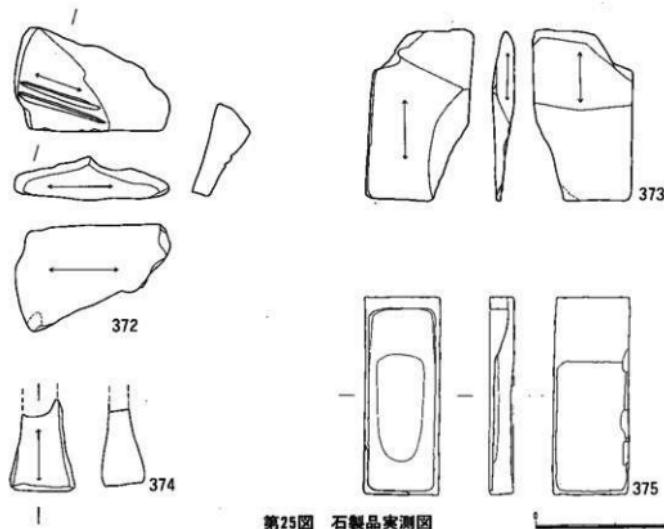
375は硯で、縦12.3cm、横4.7cmを計る。硯巾よりも長さが極端に長く、裏面の下半に浅い方形の抉りをもつ長方硯である。この硯は本章で扱う時期のものではなく、近世と考えられる。

第7節 金属製品

錢貨

祥符元寶1点、寛永通寶3点が出土した。祥符元寶はピットから、寛永通寶のうち1点はSD103の覆土中、1点はSX01から出土したものである。祥符元寶は磨滅が激しく、寛永通寶のうち3点は遺存状態は良好である。錢貨は出土点数が少なく、本節で一括した。

また図示してはないが、近世の土坑から日常生活に用いたと思われるキセル等の金属製品が、近世陶磁器、鍋・釜の蓋等の木製品と共に出土している。



第25図 石製品実測図

第8節 木製品(第26図)

木製品は漆器椀2点、下駄2点、箸1点、曲物1点を図示した。これらの他に木組み井戸の部材が多く発見され、また近世の土坑からも椀、下駄等が出土している。樹種同定の結果、古代末～中世の井戸枠は全てヒノキであった。

380の曲物が井戸SE02の水溜部に使用されていたもので、他のものは井戸の覆土中より出土した。以下に木製品の特徴について技法を中心としてみてゆくこととする。

376の漆器椀はSE02出土であり、トチノキを用いている。低い高台で体部は緩く湾曲して立ち上がっていいる。口径15.2cm、器高6.3cm、底径7.7cmを計る。全面に黒漆が施され、体部と見込部に朱で草木が描かれている。遺存状態は良好である。

下駄、377はSE01出土、鼻緒が右寄りにつけられる。腐朽が進み細部の観察は容易でないが、歯は直立に削りだし根元を抉っている。長さ9.5cm、巾9.2cm、高さ4.8cmが残されている。

378の下駄は鼻緒がやや左に寄っている。SE03出土で、欠損と使用による磨滅が著しい。長さ19cm、巾9.7cm、高さ2.5cmが遺存している。歯の削り出しと側面に加工痕が認められる。歯の前後に鋸によると思われる4本の溝があり、後歯は根元に鋸の溝が位置するのに対し、前歯では、1.2cmと、0.5cm離れている。この4本の溝は、歯を作り出す段階の最初につけられたと考えられるが、前歯との間隔があくことから、歯の削りだし以外の目的もあったのだろうか。上下端の断面は先細りとなり、前で1面後ろで2面の面取りをし、先の鋸による溝は、この面取りの始まる位置にある。

379の箸はSE101から出土しヒノキ製である。全体の加工は粗く、先端を尖らせ断面は丸い。形態、加工痕からは上下の区別はできない。長さ31.3cmである。

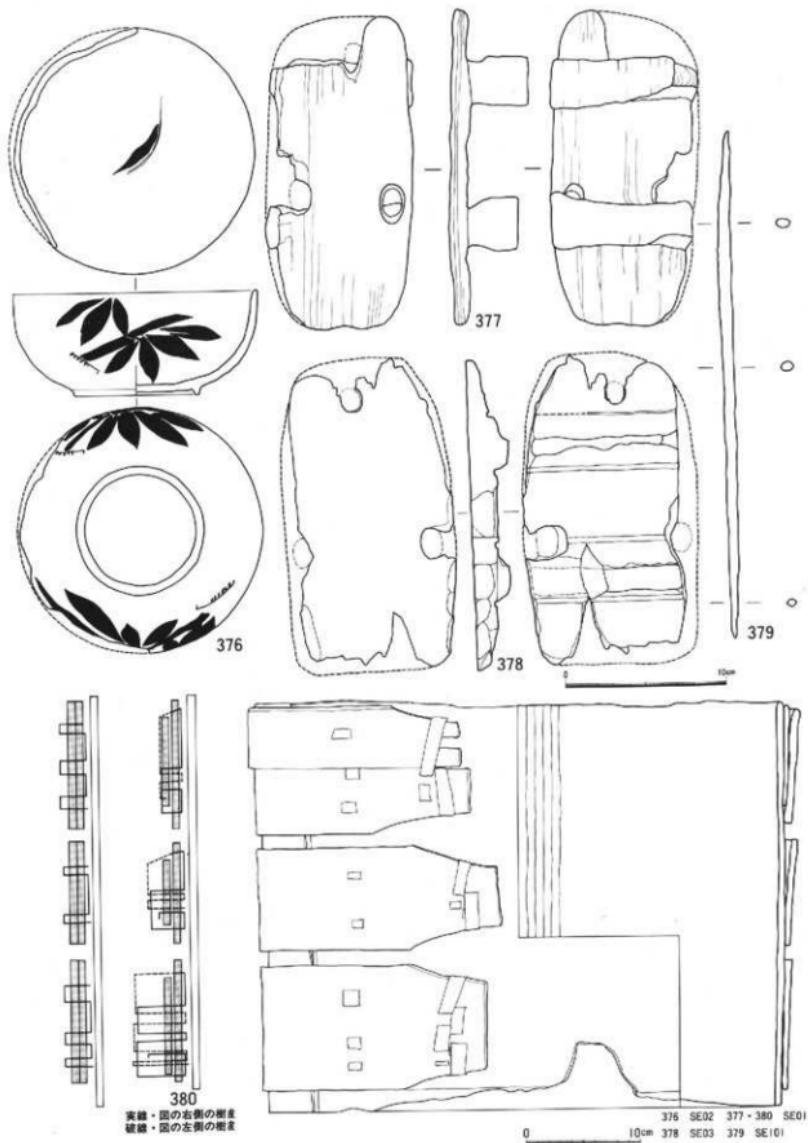
曲物の380はSE02の水溜部に転用されていたもので、底板はないが側面部はそのまま残されていた。外径47.8cm、高さ36.1cmを示し、内側の一枚板を円形に曲げて端部を樹皮で固定し、また外側は巾11cm～9cmの細長い板を3段に巡らし、本体を補強している。内側の本体と外側の補強部を固定するのは上段のみであり、木製の釘を本体に打ち込んでいる。木釘は3～4本単位で、本体の上端部を巡るように打たれ、合計23本が確認された。本体を円形に保つために上から挿入された材もあるが、中段と下段に及ぶものはない。本体には縦の細い刻みが6～7mm間隔に施される。

補強材への樹皮による結束方法を図のなかに模式化して示した。結束法は、先端部を約16cm程重ねて各段ごとに、先端部を二列に、内側を一列に結束している。

このような観察から、この曲物の製作工程は、上・中・下段を本体にめこみ、形を整える板を挿入し、上段を木釘により本体に固定するという順序によっていることがわかる。

これらの木製品は、それぞれの井戸の年代に属するものと推定され、12～13世紀に位置付けられる。

出土した木製品の他に、近世の土坑から下駄、椀、鍋・釜の蓋等の様々な日常生活用具が出土している。これらの一端は樹種同定をおこなっている。また、井戸枠は点数が多いため図示せず、木製品の台帳に略測図をとり、それに注記を付け加えて処理をした。



第26図 木製品実測図

第Ⅳ章 まとめ

第1節 山茶碗・小皿の年代観

すでに第Ⅲ章1節で山茶碗・小皿の形態、法量の検討を行い、遺構出土のなかに年代を検討するうえでの良好なグループが認められることを述べた。本遺跡の山茶碗・小皿は、渥美・湖西窯群から持ち込まれたものと考えられ、大型壺、大平鉢も胎土に砂粒を含み、焼成も良好であることから同一産地のもとのと推定される。以上のことから、当該地域の窯出土資料に対比させて年代観を考えてみたい。第27図に検討の結果抽出した代表的なものを遺構ごとに並べてみた。

最も古く位置付けられるものはSE03の資料であり、山茶碗は漬け掛け施釉され、高台も高いことから渥美の大アラコ期に比定される。大アラコ窯は、四輪花、漬け掛けの山茶碗であり、高台が台形状に開き、体部が張り、口縁部は外反気味につくる。SE03に伴う小皿も高台がつき、体部から口縁部に至る形態は山茶碗に類似している。これらの特徴をもって、SE03のグループを大アラコ期に比定する。

SD104は図27に示したように、二つの時期にわけられる。年代の下がる一群については、後に扱うこととする。この古手の一組は、口径が大きく、器高が低いという特徴をもち、SE03とは大きく相違する。形態では体部がやや直線的に開き、輪花をもち、台形状の高台は高く「ハ」の字を開く。発色は不良ではあるが施釉の痕跡が認められる。以上のような形態、手法上の特徴からみて、大アラコ期の後出の要素と考えられるが、一応、大アラコ期のなかに包括されるものとしたい。

SD01のものは、輪花はないが器高は高く、施釉され口縁部がやや外反し、SE03のものに類似する点が多く認められる。小皿でも、高台付きで形態も類似している。このSD01は山茶碗の共伴資料にとぼしいが、小皿の形態、手法からSE03と同時期としておく。

以上、大アラコ期に比定される一群は、器高が高く、体部が張り、輪花、施釉されるものが圧倒的に優位である。

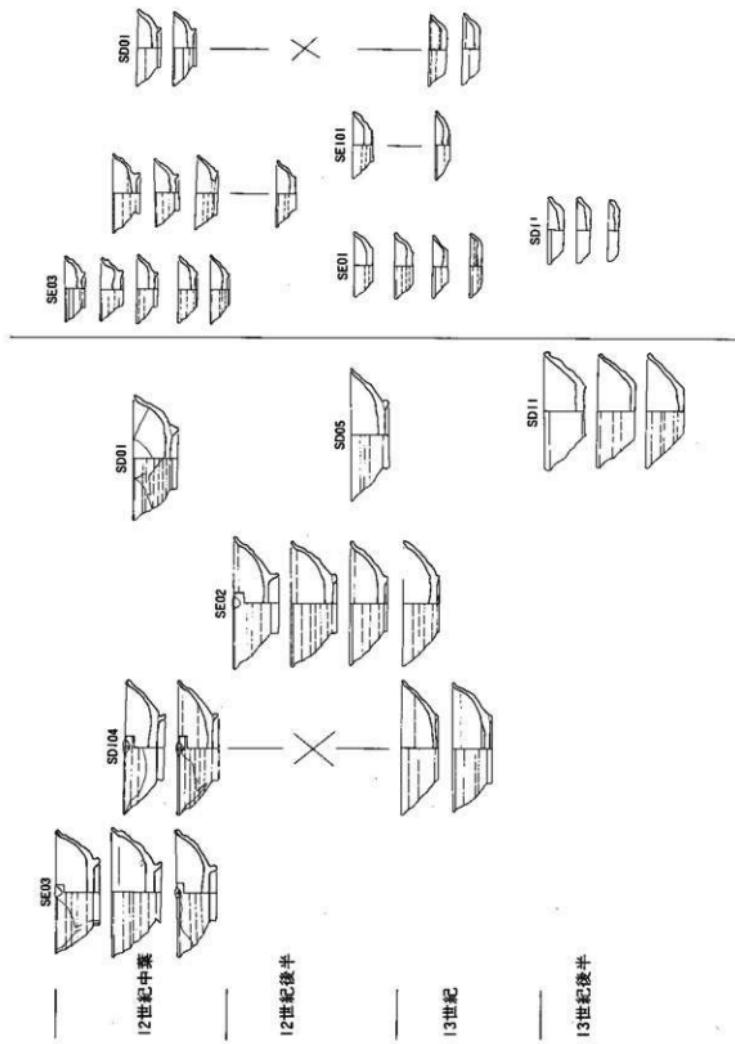
次の段階と思われるものがSE02であり、高台の高いものと、低く不定型のものとがあり、両者ともに、体部は直線状を呈する。輪花も少量残るようである。一方、小皿では無高台のものは極少なく、むしろ前段階の小皿に類似している。従って、この小皿の一群は山茶碗と共に置いた。山茶碗は、高台が退化し、体部は直線となるものを含み、SD104の新しい様相をもつ一群と形態等が類似する。従って、輪花を残すものを惣作古窯期に、高台退化・体部直線的のものを東大寺瓦窯期に比定したい。惣作古窯期の一部には輪花が残り、東大寺瓦窯期の特徴は、輪花ではなく、高台は低く、不定型であるという。

出土した山茶碗、小皿のなかで最も下限に位置付けられるのがSD11の山茶碗と小皿のセットである。両者ともに小型化が顕著に認められ、山茶碗無高台が一般的であり、退化した高台は底端部に突起状につけられる程度である。法量・形態とともに、個々の製品が最も類似する一群である。これらは渥美窯ではなく、湖西窯に求められる。

湖西窯の宿北、新古IV・V号窯では、退化した高台と無高台があり、体部直線となるものが認められる。小皿は器高が低く、全体が扁平化している。これら湖西窯のなかにSD11の一群が納まるものと推定した。

最後に実年代であるが、大アラコ期に比定されるSE03・SE104の古手・SD01が12世紀中葉に、SE02の古手・SD05・SE01の一部が惣作古窯期で12世紀後半、SD104とSE02の新手・SE01・SE101の小皿を東大寺瓦窯期で13世紀に、SD11の湖西窯に比定されるものは、渥美窯廃絶後の時期に置き13世紀～14世紀

第21図 遺構出土山茶碗・小皿相関図



前半としたい。

第 2 節 古代末から中世の祝田遺跡の性格について

祝田遺跡の性格を考えるとき、今回の調査地点の遺構・遺物からなにが言えるか、周辺遺跡及び遺物の分布地域という、特に山茶碗の分布地域である東海地方のなかでどのような位置を占めているのかという両方からの検討が必要となる。

本遺跡の遺構には大型の溝、素掘りの井戸、木組み井戸、掘立柱建物等があり、なかには柱根が残っているものもあった。時期は12世紀から14世紀に営まれたと考えられるものである。大型の溝は巾が広く深く、特にSD01としたものは再掘削の可能性もあり、SD11は末端を検出し、両者ともに自然流路とは考えられない状態である。溝の機能としては、区画、防御、排水等は勿論、小型の船による運搬用の水路のような用途も推定される。

遺物のなかで基本的な日常雑器として、山茶碗・小皿、伊勢型鍋は、静岡県西部の掛川市あたりまでが、一般的な土器組成のなかに組み込まれてくる地域であろう。現在調査が行われている掛川市原川遺跡からも多くの中出土が認められる。本遺跡の土器類はこれらと、土師質小皿が大半であるが、一方日常雑器ではなく供給先、用途の限られた古瀬戸、12世紀代に比定される輸入磁器があり、特に井戸SE02から出土した白磁四耳壺は、12世紀から国内で出現し、青白磁の合子と同様に、経塚とか墳墓の遺跡から出土する例が多いといわれる（平出 1983）。

また、日常雑器である山茶碗・小皿に多量の墨書き土器がみられることも注意しなければならない。これは付近で使用されていたものが偶然に入りこむとか、極一部の者が必要とし使用したものではなく、これらを保有する構成員のなかで用いられ、機能したのではないかと推定される。文字とか、記号風のものが主体であり、特に記号は識字層でなくても認識は容易であり、一定の集団内で機能し用いられたものと解釈したい。

瓦については、基本的に寺院用に用いられたものと理解したい。時期的にみて12世紀～14世紀代の遺構から少量出土しており、出土状態は井戸、溝に破棄したとか、包含層では不規則にチリばめたような状態であった。しかし、遺構は寺院そのものではなく、その周辺の付属施設、及び日常生活での不要品等を集積するような場所としての機能が推定される。以上のような各種遺構の検討を経て遺構・遺物の様相から寺域の一部との推論に達した。では周辺の遺跡の在り方を検討する。

浜松市都田町、細江町に広がる都田川下流域には、椿野・田米寺・茂塚・川久保といった遺跡が自然堤防上に立地している。これらには少量ながら当該期の土器が散布するという（辰巳 1981）。これらのうち調査例として、浜松市椿野遺跡（川江・鈴木 1982、足立 1984）では井戸、溝、ピットが検出され、1982年の報告では室町時代以降とした遺物のなかに、行基焼（山茶碗）・青磁・白磁・常滑焼・瀬戸焼・地元の窯である初山焼が出土している。また昭和58年度の静岡埋蔵文化財調査研究所の調査では、土坑のなかから鎌倉時代の山茶碗が出土している。時期的には本遺跡と共存するがしかし、椿野遺跡では地域の主要な位置を示すような様相は伺えない。

本遺跡の下流の川久保遺跡（堀田・栗原 1982）では、12～17世紀の土器が混在するII層から、本遺跡に併行する山茶碗・小皿と輸入磁器が出土し、なかでも寛永通寶を除く17種類53点の銭貨の出土は注目される。この川久保遺跡は弥生時代から古墳、奈良、平安時代と連続する遺跡であり、都田川下流域での歴代にわたる主要遺跡として位置付けられる。

また、表探資料ではあるが、先の川久保遺跡に近接する森遺跡の対岸から「寺」と判読される山茶碗の墨書き土器が発見されている（辰巳 1981）。このように都田川の下流地域の遺跡の在り方は、上流と下流では遺構・遺物に相違が認められるようである。

磐田市鎌田遺跡も本遺跡と同時期であり、遺構・遺物の状況も類似しているといわれているが、詳細は不明である。また同市野際遺跡、袋井市土橋遺跡、浅羽町馬場第1・第2遺跡、浜松市越前遺跡からも本遺跡とほぼ同時期の区画を示す大小の溝が検出され、掘立柱建物も伴っているが、いづれも部分的な調査のため規模等は不明確である。

祝田遺跡は以前からの周知の遺跡で、特に伊勢神宮の御厨のひとつである「祝田御厨」の比定地といわれてきた。細江町内では他に「刑部御厨」の名があり、また本遺跡の上流部の浜松市都田町は「都田厨」の比定地といわれている。

遠江地域の莊園分布を、竹内理三編『莊園分布図』でみると、河川の流域に集中する傾向が認められる。以下にその分布の特徴を西からまとめてみる（第28図）。

三ヶ日町と細江町を中心とした奥浜名湖の周辺

尾奈厨・北原蔭・浜名厨・大崎厨が三ヶ日町の周辺にあり、都田川流域には氣賀庄・刑部厨・祝田厨・都田厨・井伊庄が存在する。いづれも中小河川が形成した平野部である。浜名湖の入り口の西岸にあたる湖西市及び、湖に突き出た岬の端の浜松市村櫛にも僅かに莊園が存在する。

天竜川流域

下流から主なものを拾うと、頭陀寺庄・飯田庄・大墓厨・蒲厨・池田厨・美國厨等が、現在の浜松市浜北市、豊田町、竜洋町に位置している。

太田川流域

現在の磐田市、福田町、浅羽町といった太田川下流の周辺に中島蔭・鎌田厨・浅羽庄が存在するが、広い平野部を有する地域のなかでは、むしろ散在する状態である。

菊川流域

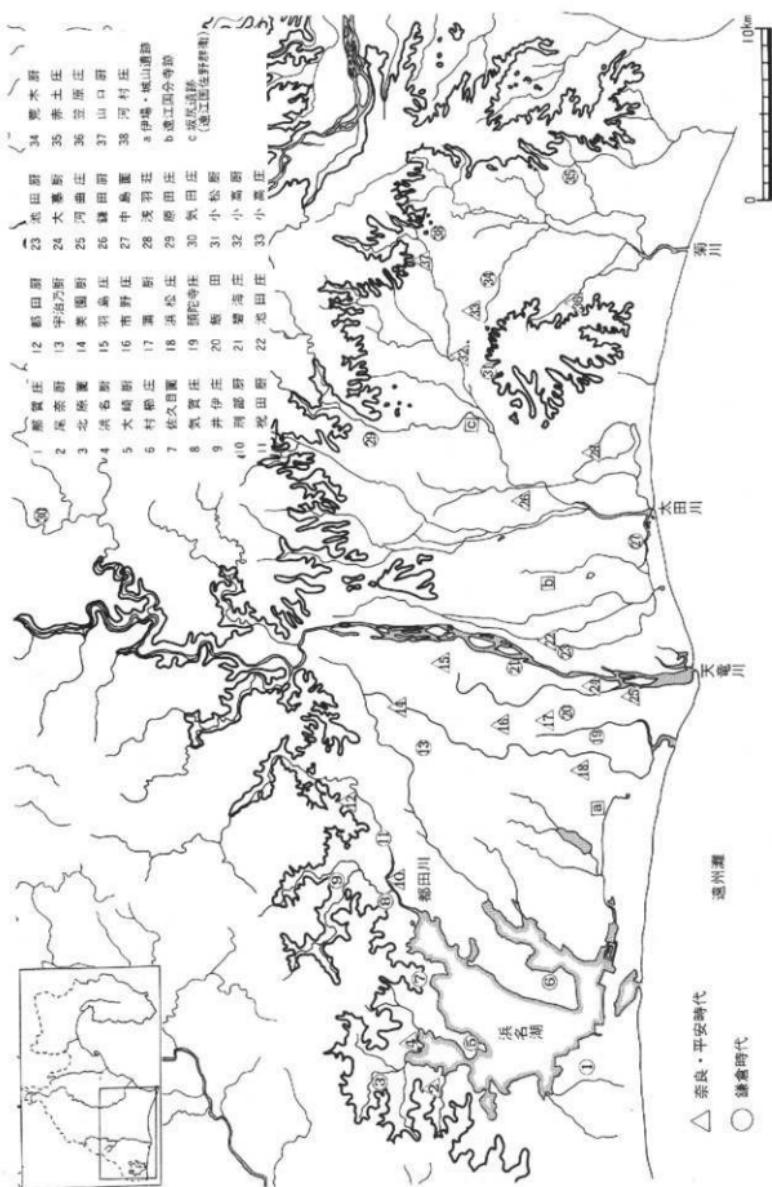
現在の菊川町を中心に、他の地域と比較して多くの莊園が集中している。下流から赤土庄・笠原庄・小高庄・荒木厨・河村庄・山口厨が菊川の支流添いに分布している。

伊勢神宮の所領を記載した「神鳳抄」の中に、今まで述べた地域の莊園名が「厨」として記載されており、各々の集中地域にもいくつかの存在が確認される。また、第28図には、鎌倉時代以後に成立した莊園は除いたが、その後の増加は太田川流域の上流に顕著にみられる。

分布からなにがいえるか今まで検討してきたが、これらの莊園の分布の特徴は、沖積平野の微高地、及び、平野の丘陵寄りの地域、浜名湖の岸に寄った平地という点にあり、船による交通・運搬を前提とした在り方を示しているといえるだろう。これらの莊園は米は勿論、多様な物資を莊園領主に納めており、律令制度の解体・変質とともに、陸を主体とした律令政府の交通、官物輸送の方針に対し、主として莊園の管理・運営者の側の要請により、遠江の平野部を網の目のように走る河川を利用することで、合理的な交通、交易、運搬の体系が整えられていったものと推測される。在地での選択のなかで、交易、輸送手段として多少の危険、損害はあるにしても船を用いたと考えるのは容易であろう。古代律令制においても水上交通は考慮されていたと考えられるが、平安時代における寄進地系莊園の拡大のなかで、遠江地域のなかでも、古代末以降陸よりさらに水上という、船に依存した交通、交易、運搬の体系化が計られた結果が、莊園分布の傾向にあらわされていると考えたい。しかし、第28図は先の『莊園分布図』をもとにし、遺跡の在り方から莊園所在地の比定を行ったものでなくまた、莊園に対しての国衙領の分布は欠如している。この遠江の国衙領については、地域別にみるとその大半は太田川、菊川流域の中遠地域に集中しているという（秋元）。また袋井市史では袋井市域の国衙領の占める割合の高いことが指摘されている。従って、検討の根拠としては不十分なものであることを前提にしている。祝田遺跡をめぐる問題として、現状でどんなことがいえるか考えてみた結果である。

最後に祝田遺跡の位置付けをしてみたい。本遺跡は伊勢神宮の所領である「祝田厨」の一部であるこ

第28図 遠江の莊園分布（掛川市以西・鎌倉以降は除く。）



△ 奈良・平安時代
○ 鎌倉時代

とは疑いなく、古代末から中世において、伊勢湾から遠江地域までの東海地方西部における水上交易圏に属していた。そして、下流に所在する川久保遺跡での銭貨の多量出土からみて、川久保遺跡は交易に深くかかわり、祝田遺跡は寺域という特殊な場所として「祝田厨」の機能を一方で支えていたものと考えられる。川久保遺跡は距離的には「祝田厨」よりむしろ「刑部厨」に近いかもしれないが、ここでは論ずる資料が不足している。しかし、川久保遺跡がどちらに属しても、狭い微高地上では施設・空間域の範囲が、「厨」の經營を一括して扱う能力に欠けるため、いくつかの微高地に「厨」の機能が分散していたことは推定できる。

以上、後半の荘園の分布については、遺跡での遺構・遺物からの具体的検討ではなく、立地からみた推論となってしまった。全国的に荘園が拡大し、広域的な流通・交易圏が拡大するなかでの一地域における様相を念頭において考えてみた。

おわりに

昭和57年度からの作業がようやく終了した。本報告が、今後の調査及び研究に微量なりとも生かされるよう祈りつつ筆を閉じることとする。最後になったが、調査委託者の静岡県浜松土木事務所、調整をされた地元細江町教育委員会、及び現地調査で御協力頂いた地元の方々に感謝申し上げ終りとする。

第 V 章 特 論

静岡県祝田遺跡出土の木製品の樹種について

国立科学博物館 山内 文

樹種の同定を行った木製品は、井戸枠（3）、井戸枠横木（4）、漆椀（4）、下駄（2）、および箸である。（ ）内数字は調査数。

遺物と樹種名および出土地点は次の通りである。

遺物名	樹種名	出土地点
井戸枠 W-1, W-2	ヒノキ	SE 01
井戸枠 3	ヒノキ	SE 02
横木 (W-1の)	ヒノキ	SE 01
横木 (Eの中), (Sの下)	ヒノキ	SE 02
横木 229	ヒノキ	SE 01
漆椀	トチノキ	SE 02
漆椀	クリ	SX 104
漆椀A	トチノキ	SX 104
漆椀B W-104	ブナ属ノ種	SX 104
下駄 007	ヒノキ	SE 03
下駄 W-103	ヒノキ	SX 104
箸	ヒノキ	SE 101

材の解剖学的特徴

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Sieb. et Zucc.

樹種細胞は夏材部付近に散在し、その水手膜に結節状の肥厚を持っている。分野膜孔は、外縁形で開孔は斜めのレンズ状で外縁を越えない所謂ヒノキ型で一分野に、中間部では1~3、縁部では1~4個完存する。井戸枠、井戸枠の横木、下駄、箸のすべてがヒノキであった。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc.

環孔材、輪初の道管は大径、最大接円径380μm、同放射径450μm、小道管は少量。これは年輪幅がきわめて狭いことによる。填充体がきわめて多い。柔組織はとくに黒色に染まっている。このための材全体が肉眼では黒色に見える。

放射組織一列

ブナ属ノ種 *Fagus* sp.

散孔材。複合管孔が多く2~5個各方向に複合する。放射組織は1~数列 (~30μm) のものと250μmに達する広いものとが存在する。ブナとイヌブナとがあるが、材組織での識別は困難であるが挽物に利用するのはイヌブナより材質の優れたブナであろう。

トチノキ *Aesculus turbinata* Bl.

散孔材、道管の接線径50~60 m、単独道管が多いが時に2個主として放射方向に複合する。穿孔板は

单一、内壁に螺旋肥厚が存在する。放射組織は同性、単列で層階状配列をする。道管および放射組織に褐色物質を含有する。

漆椀以外はすべてヒノキで賄われている。井戸枠および横木については、静岡県下出土のものは

	井戸枠	横木
細江町祝田遺跡 (室町時代)	ヒノキ	ヒノキ
浜松市椿野遺跡 (室町時代)	クリ (2)	
同市 梶子遺跡 (弥生時代)	ケヤキ (くりぬき)	
富士市三新田遺跡 (平安時代)	ヒノキ	スギ、ヒノキ

地域あるいは時代での使用樹種の相違は調査例が少ないこともあるが特別に認められない。漆椀はブナ属ノ種、クリ、トチノキ (2) の4点である。調査した数が少ないので一概に断定することはできないが、挽木地に最も實用されているケヤキが1点もない。挽物などは各々定まった職人によって作られ流通する商品であるから、どのような挽があってもその点では問題にならない。むしろ使用者側の生活の程度あるいは好みが問題となるのであろう。

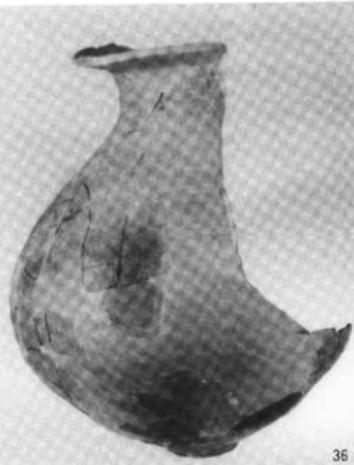
参考文献

- 秋元 太二 『遠江における守護領国支配の権限』『地方史静岡』2号 静岡県中央図書館編
足立 順司 『東笠子（H K）第27地点遺跡発掘調査報告書』 嵐西市教育委員会 1982
足立 順司 『椿野遺跡I』（財）駿府博物館付属静岡埋蔵文化財調査研究所 1983
荒木 伸介・小野 真一 『伊豆堇山願成就院発掘調査概報』 堇山町教育委員会 1971
歌川 学 『遠江引佐郡における条里制の遺構』『愛知大学文学会・文学論叢第30輯』 1965
漆畠 敏・太田 好治 『国鉄浜松工場内（梶子）遺跡第VI次発掘調査概報』 浜松市遺跡調査会 1983
漆畠 敏・太田 好治 『国鉄浜松工場内遺跡第VII次発掘調査概報』 浜松市遺跡調査会 1983
小野田 勝一他 『渥美半島における古代・中世の窯業遺跡』 1971
川江 秀孝・鈴木 敏則 『椿野遺跡』 浜松市教育委員会 1982
佐野 五十三 『祝田遺跡I』（財）駿府博物館付属静岡埋蔵文化財調査研究所 1983
柴垣 勇夫 「尾張における平安末期の瓦生産」—その分布と史的背景—『愛知県陶磁資料館研究紀要
1』 1982
柴田 稔 『青木、馬場第1・第2号遺跡』 浅羽町教育委員会 1984
渋谷 昌彦 『千葉山智滿寺庭園発掘調査報告書』 島田市教育委員会 1984
鳴 竹秋・川江 秀孝・鈴木 敏則 『湖西市埋蔵文化財発掘調査概報』 湖西市教育委員会 1980
鳴 竹秋 『湖西市内出土の土器館』『町ノ坪遺跡・町ノ坪古窯跡・殿田古窯跡・北早稻川古窯跡』 湖
西市教育委員会 1979
鈴木 一守・鈴木 敏則 『西鴨江中平遺跡』 浜松市教育委員会 1982
鈴木 節司・伊藤 美鈴 『野際遺跡』 磐田市教育委員会 1984
竹内 理三編 『莊園分布図』上巻 吉川弘文館 1975
辰巳 和弘 『郡田川流域の遺跡』 細江町教育委員会 1981
寺田 義昭・永井義博 『土橋遺跡』 袋井市教育委員会 1985
平出 紀男 「白磁四耳壺について」『古代文化』35 （財）古代学協会 1983・11
堀田 良雄・栗原 雅也 『川久保遺跡ほか、発掘調査概報』 細江町教育委員会 1982
堀田 義雄・川江 秀孝 『越前遺跡発掘調査報告書』 浜松市遺跡調査会 1982
松井 一明 『掛の上遺跡II』 袋井市教育委員会 1983
湯ノ上 隆 『鎌倉時代の袋井』『袋井市史』通史編第三編四章 袋井市 1983

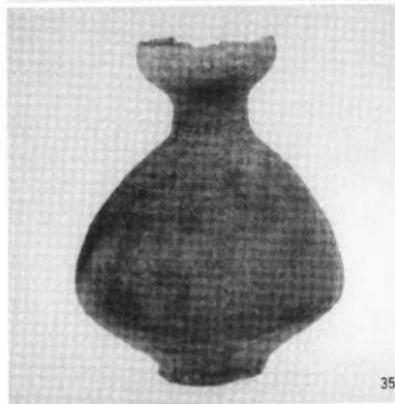
図 版



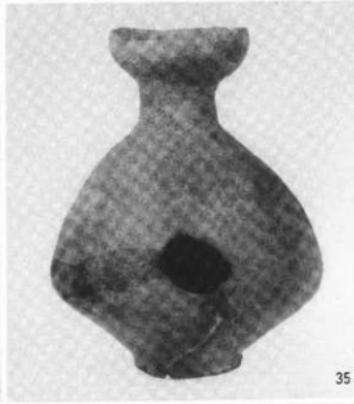
36



36



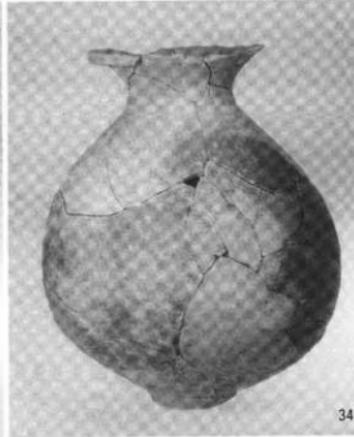
35



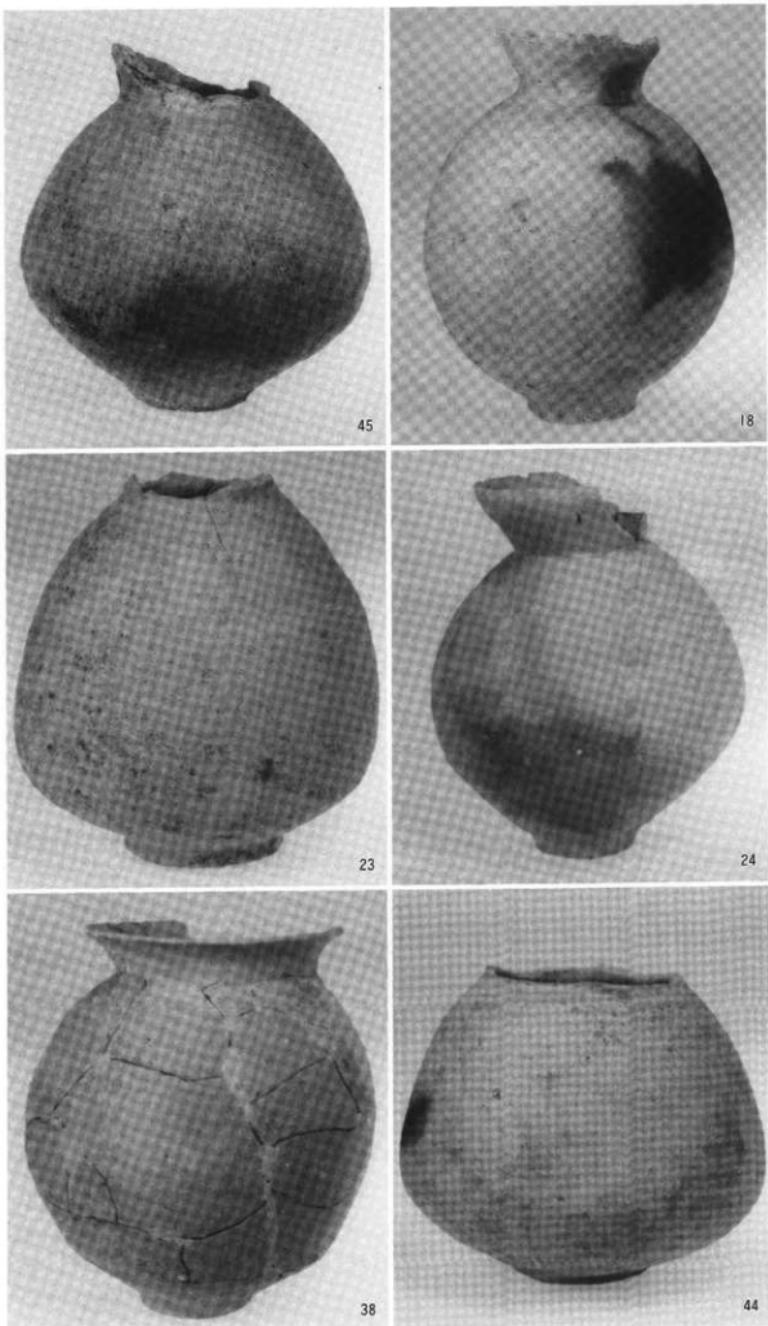
35



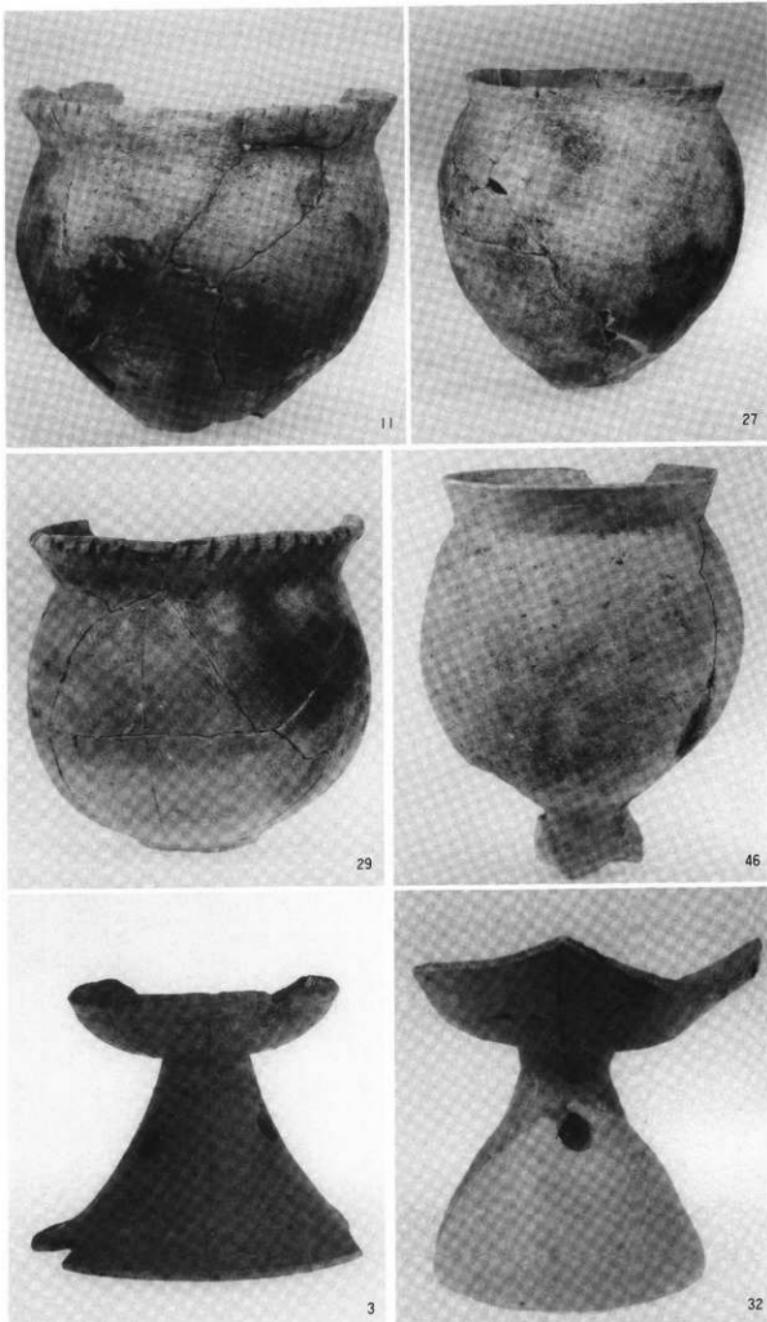
37



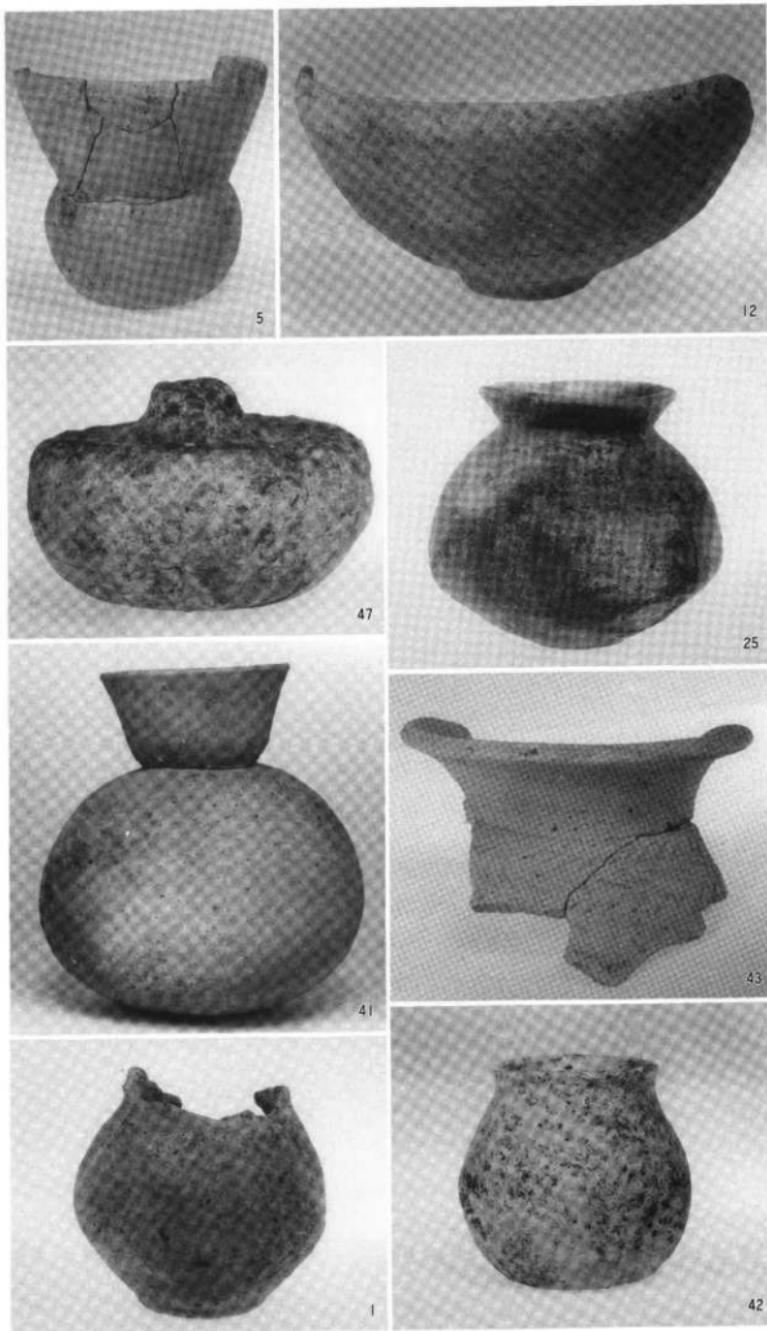
34



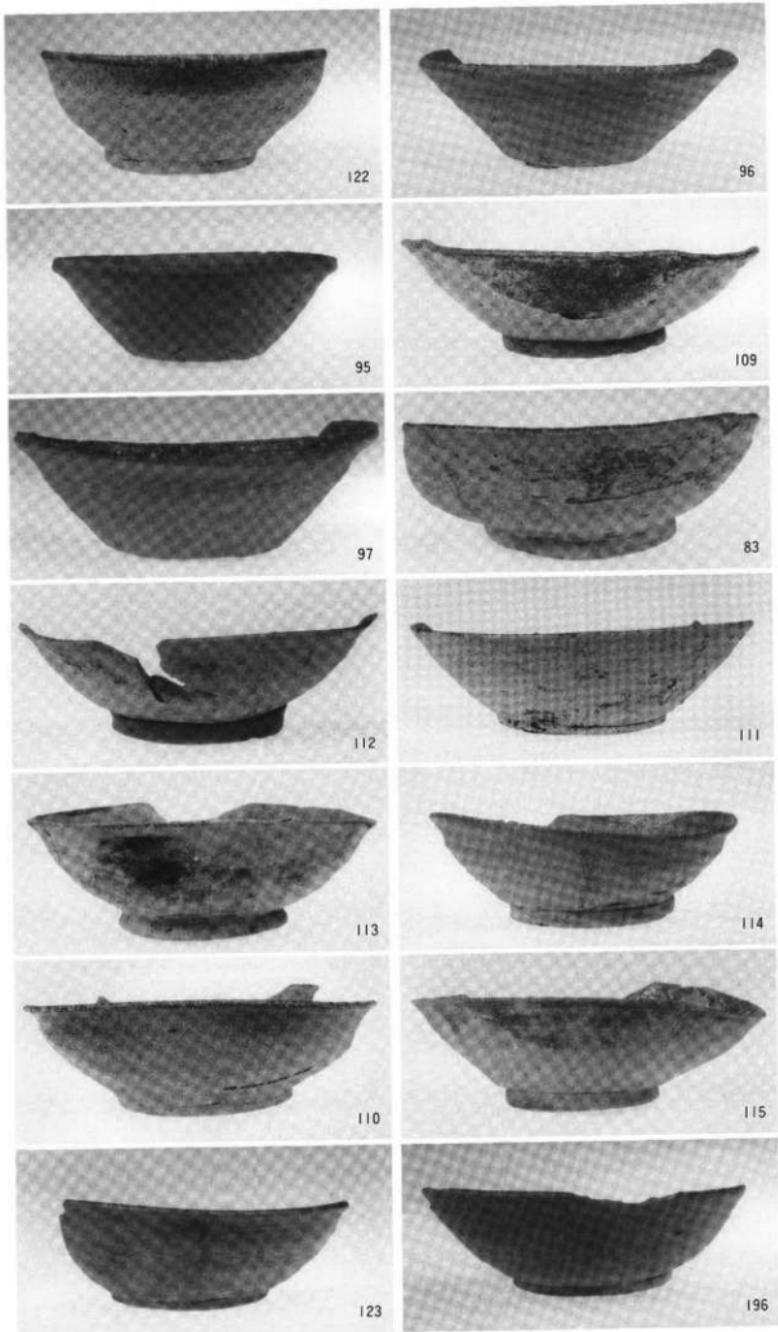
弥生土器・土師器II

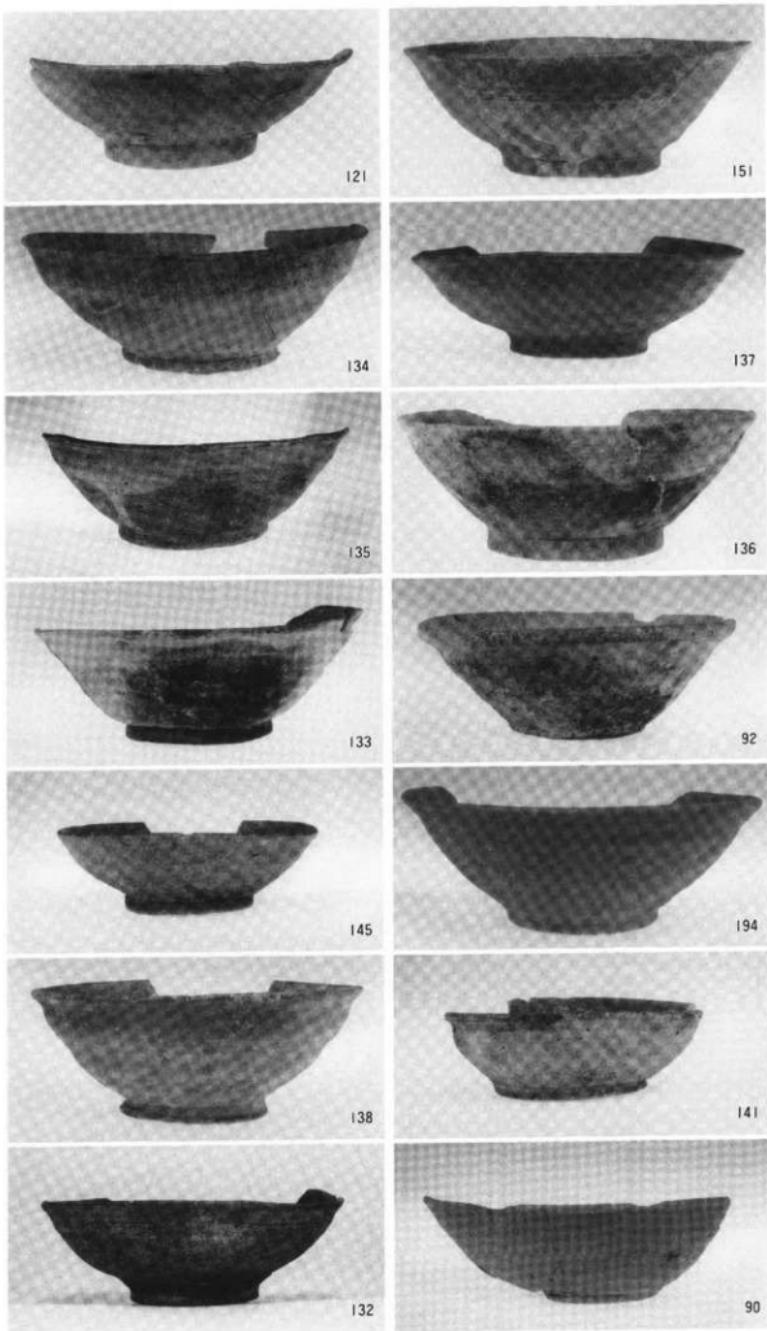


弥生土器・土師器III

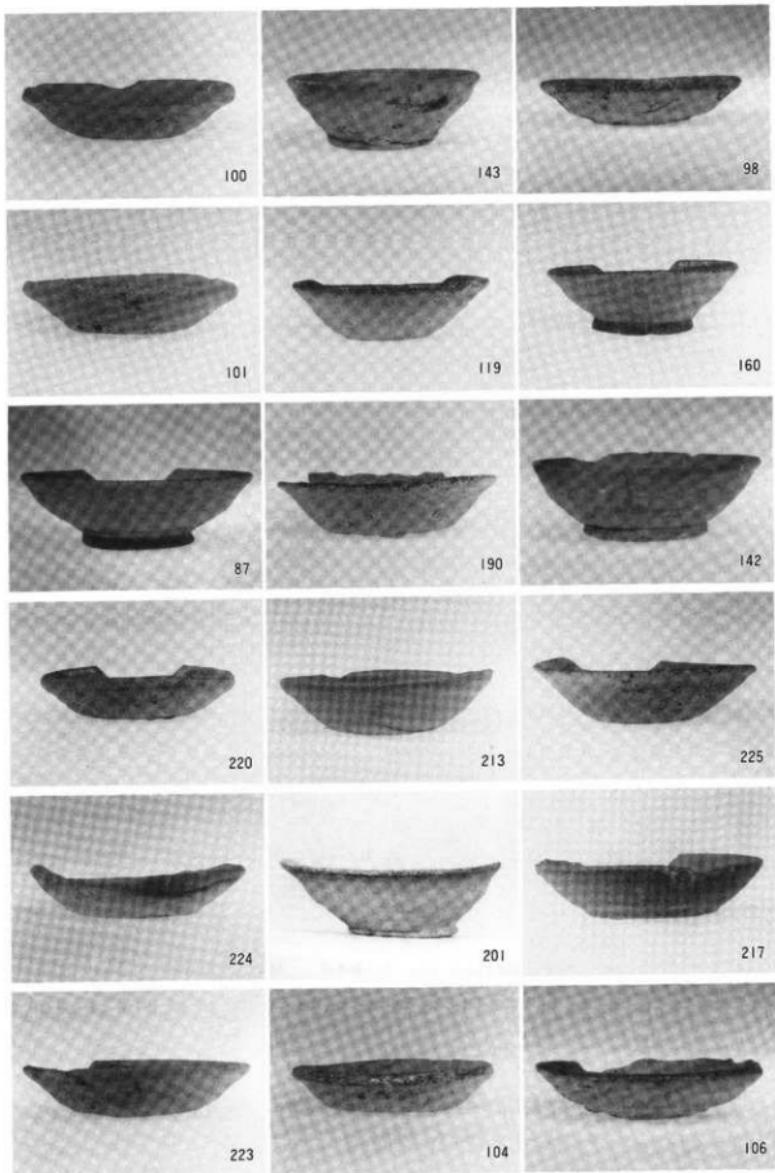


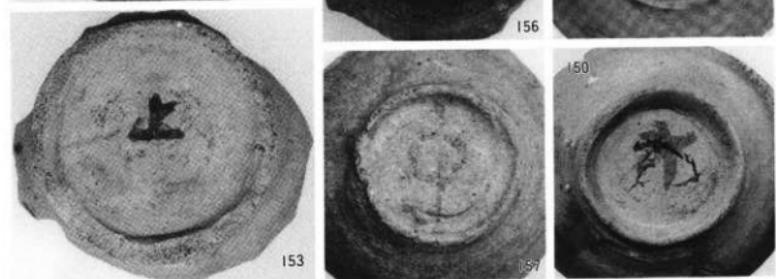
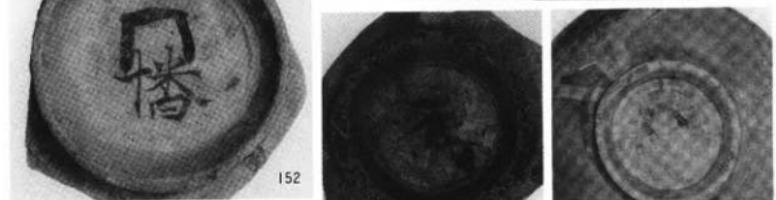
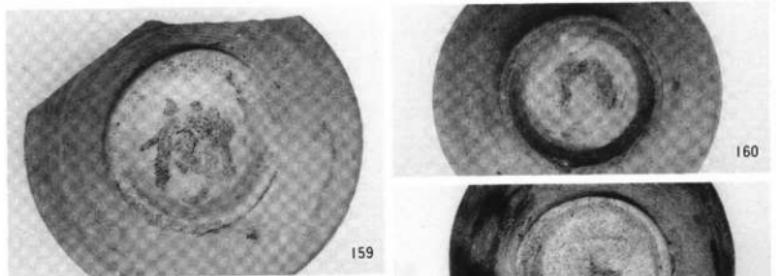
弥生土器・土師器Ⅳ

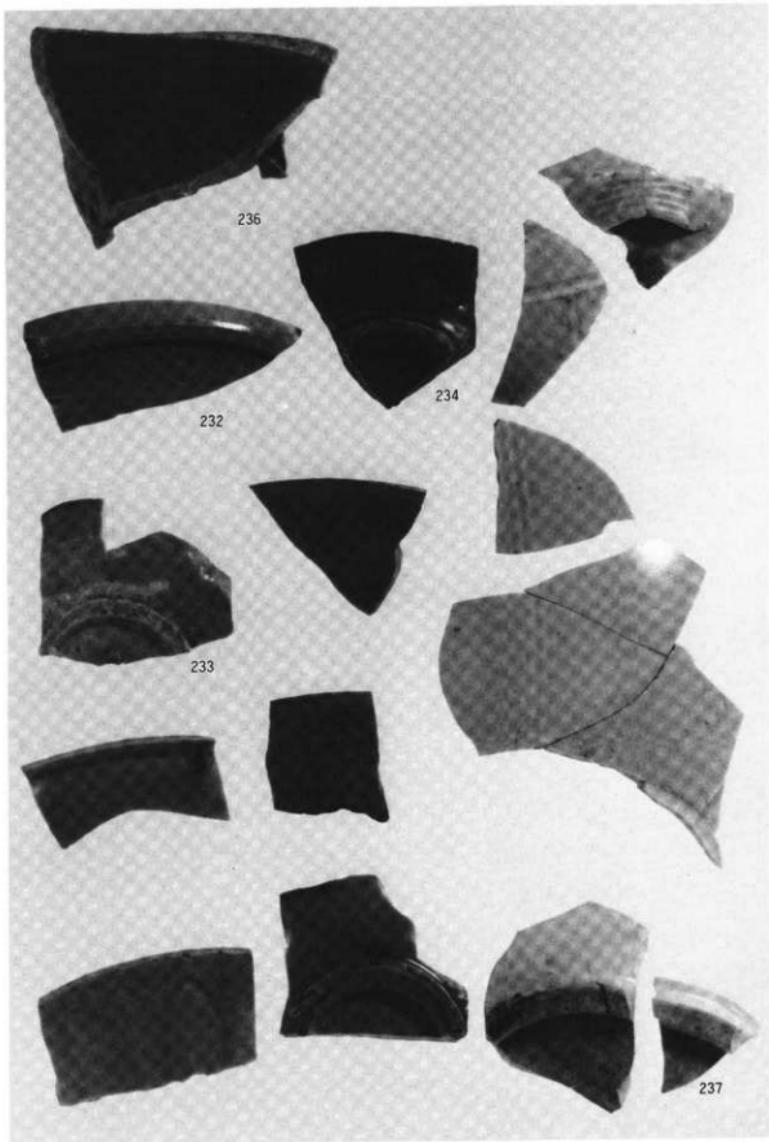




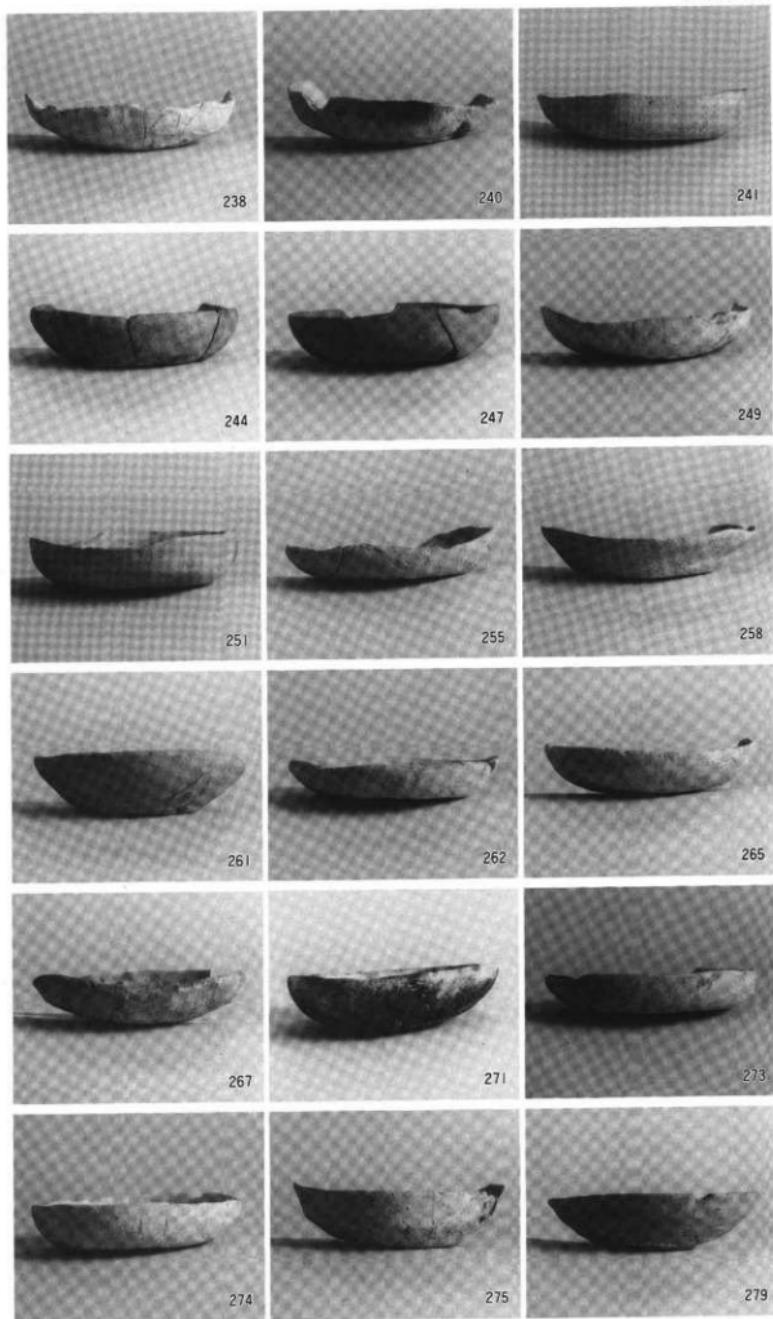
山茶碗II



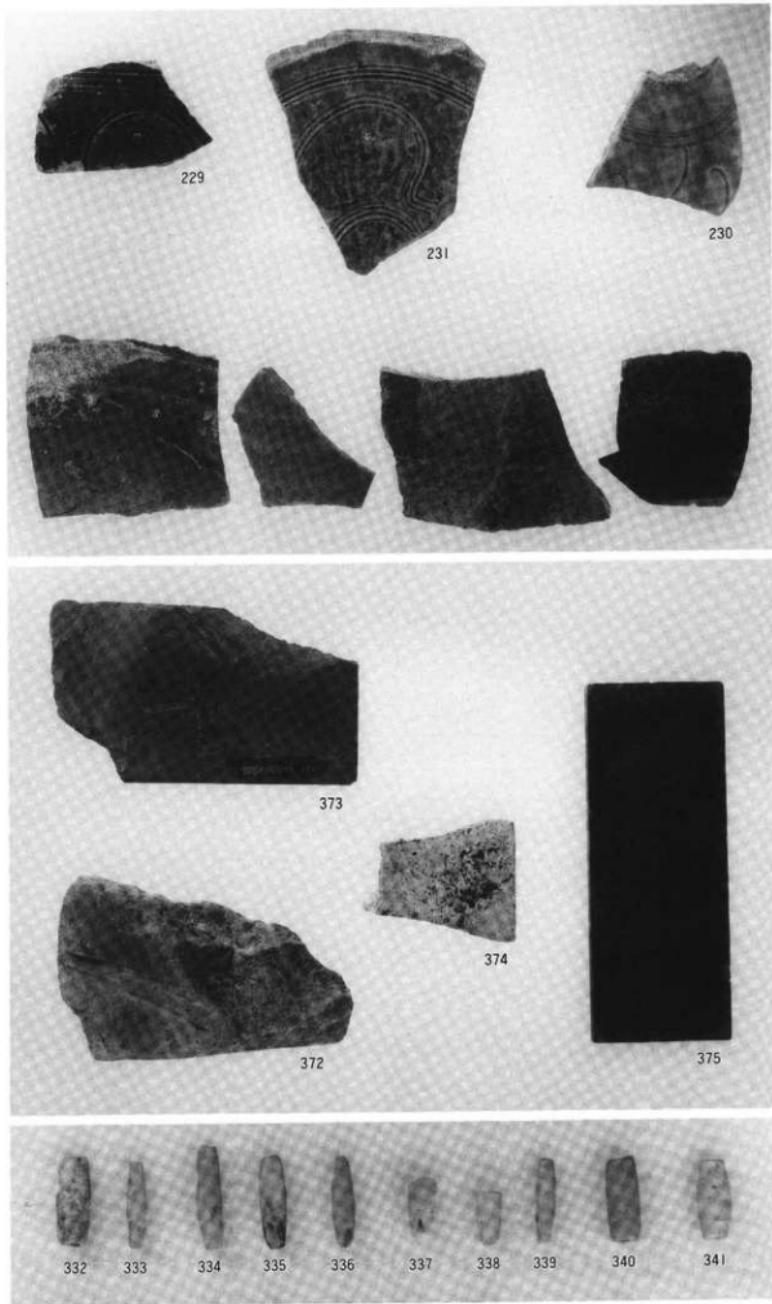




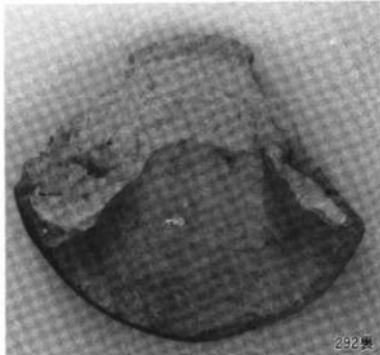
輸入磁器



土師質小皿

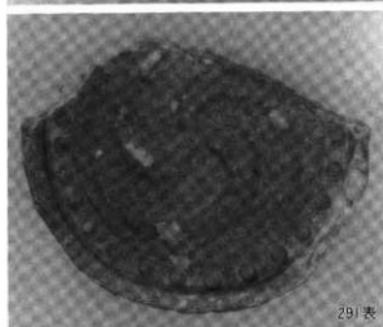


中世陶器・石製品・土錘

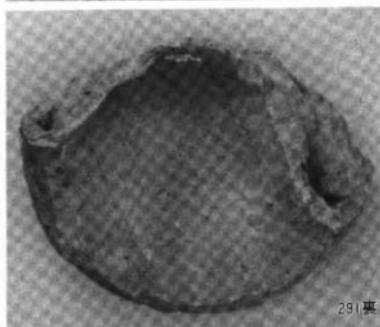


292表

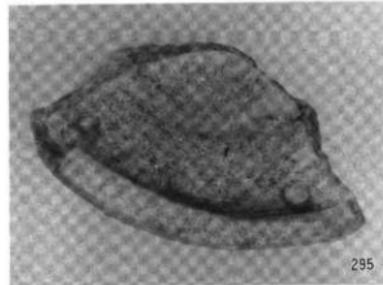
292裏



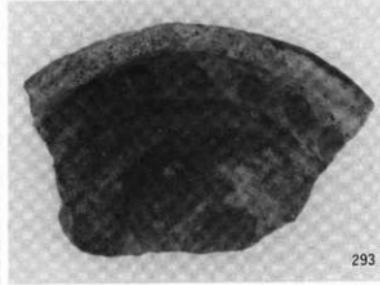
291表



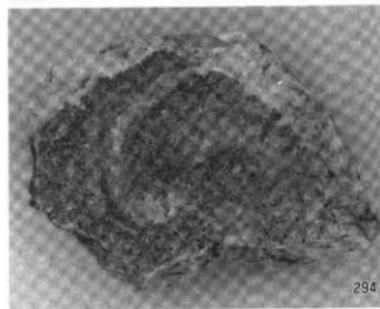
291裏



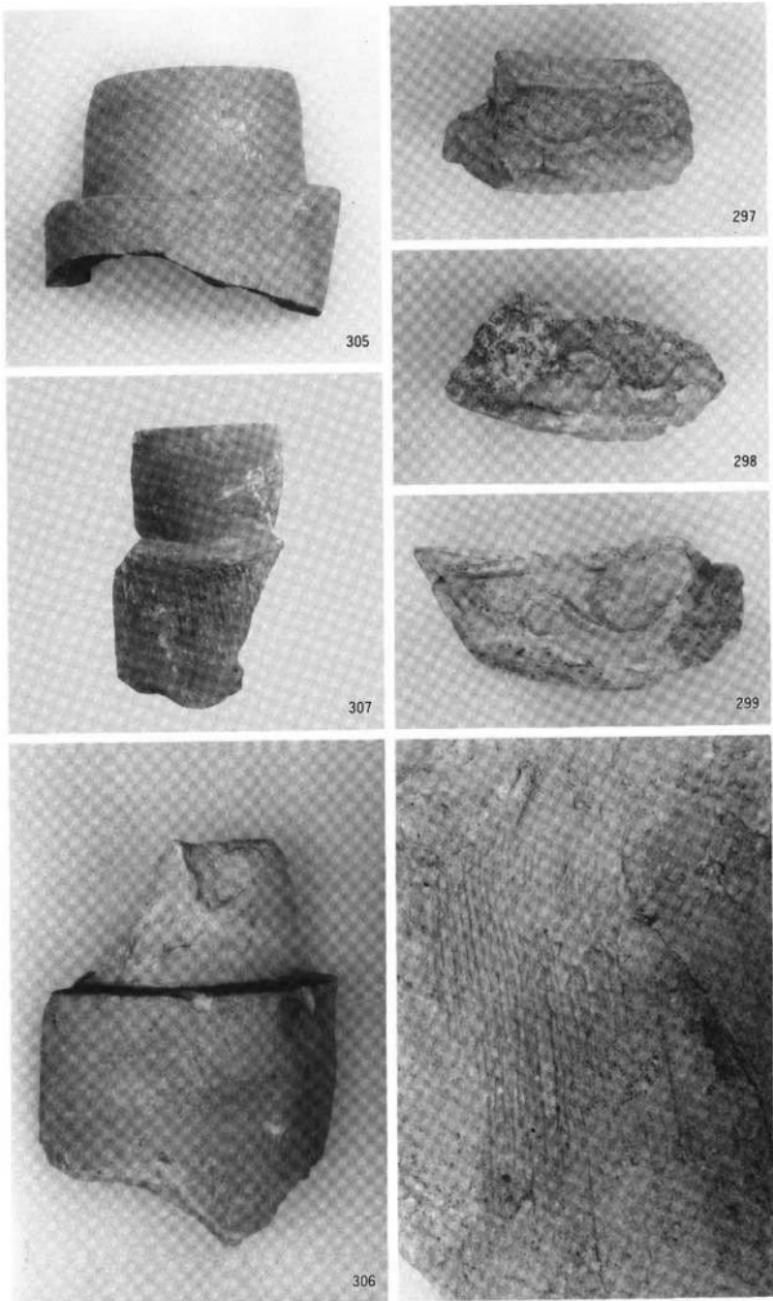
295



293

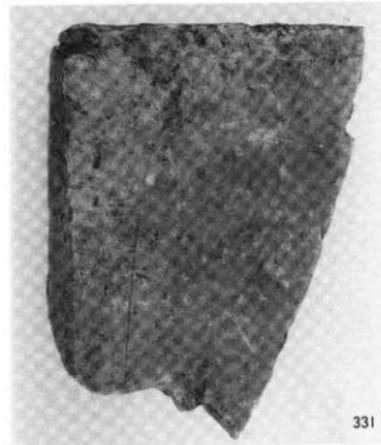
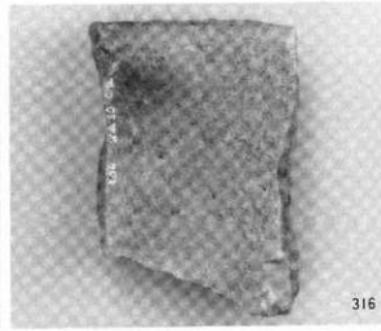
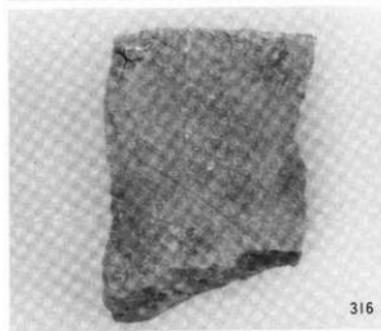
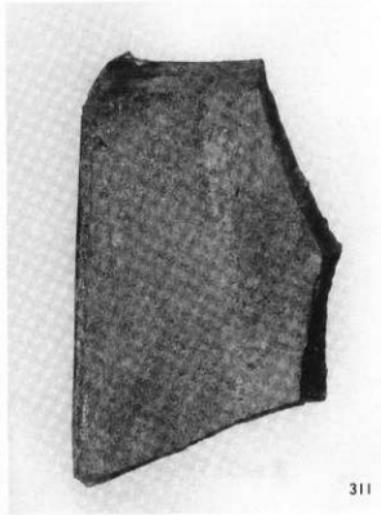
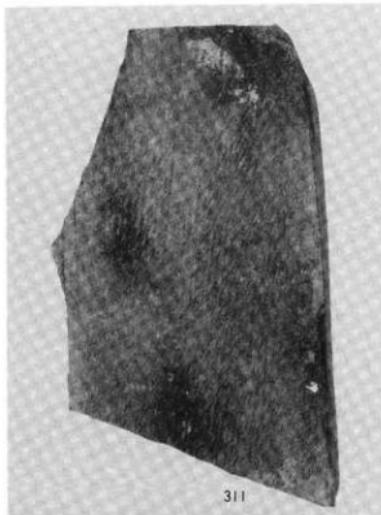


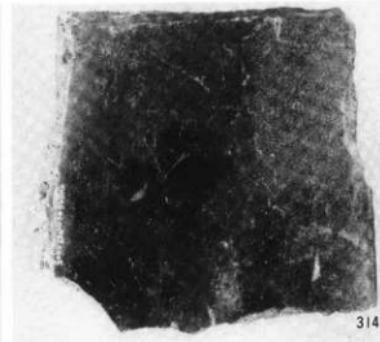
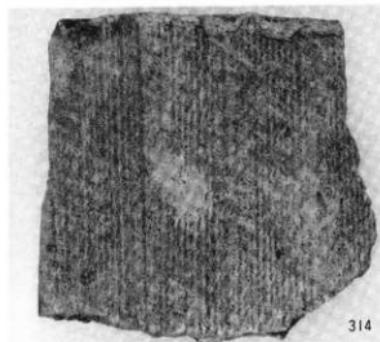
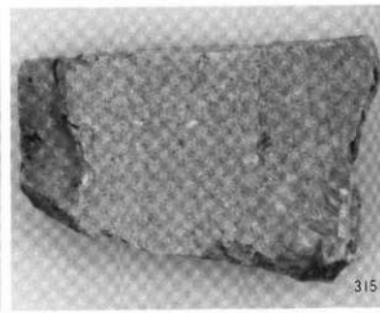
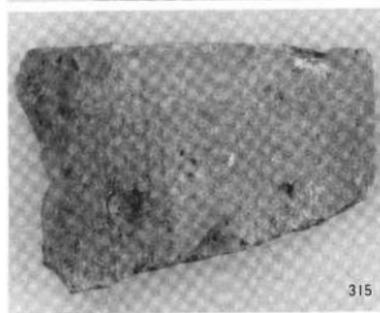
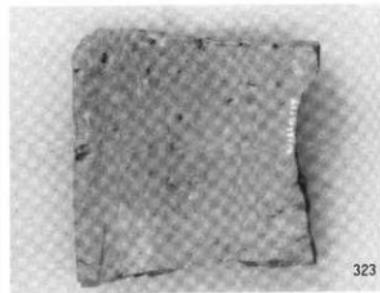
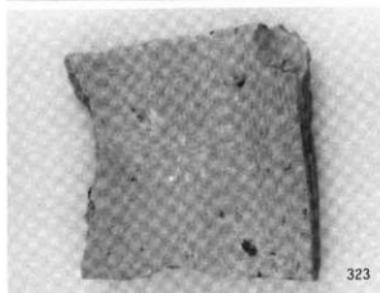
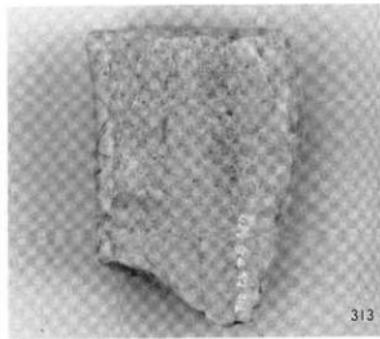
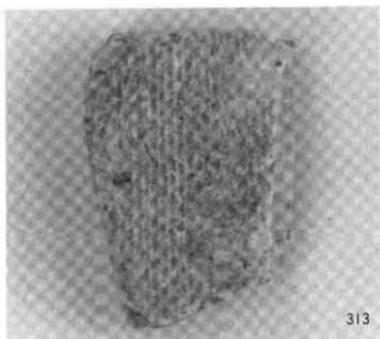
294

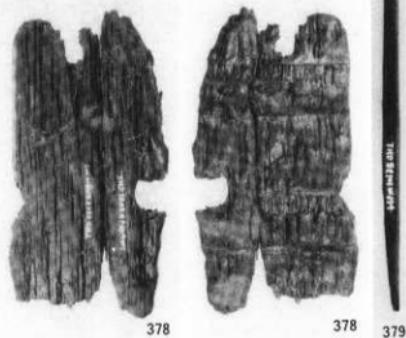
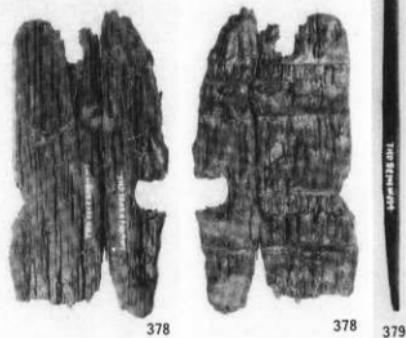
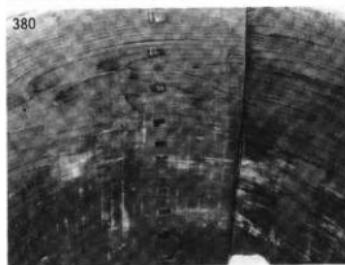
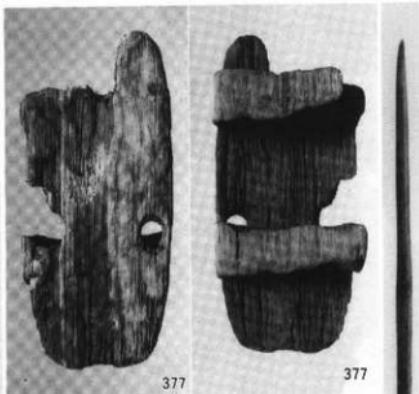


軒平瓦・丸瓦 I

306の凹面部分







木製品

祝田遺跡 II

昭和57~59年度都田川河川改修工事(細江地区)埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和60年3月30日

編集発行 財團法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所

印刷所 株式会社 三 創
静岡市中村町166番地-1